

江淹評伝

福井佳夫

目次

- 一 黄昏の回想
- 二 剣呑な日々
- 三 下獄による教訓
- 四 呉興令への左遷
- 五 望郷の日々
- 六 哀傷の日々
- 七 道教へのあこがれ
- 八 宋から斉へ
- 九 斉朝下の高官

十 江郎才尽

十一 「われ」なき名篇

一 黄昏の回想

江淹（しやうえん）（四四四―五〇五）は、梁を樹立したばかりの蕭衍（しやうえん）（梁武帝。四六四―五四九。在位五〇二―五四九）から、たいへん優遇された。

まず散騎常侍、左衛將軍に任ぜられた。そしてそのうえ、臨沮県開國伯に封ぜられ、食邑は四百戸をたまわったのである。

こうした官爵をさずかること自体は、たいしたことではない。そんなことより、かく処遇されることによって、蕭衍の新王朝においても、彼および彼の一族は安泰であると予見できたこと、そっちのほうが、より重要であり、またありがたいことであつた。今回も、つよい側につくことができた。わしの見たては、はずれておらんかつたな。江淹はこうおもつて、安堵したことだろう。

この梁とかいう新王朝、以前から顔なじみの、あの蕭衍がたてたものだ。やつは、わしが厚遇された齊室とあなじ蕭の一族だが、血筋はかなりとおいようじゃな。くわえて、改元されて天監となつた今年（西暦五〇二）、わしはもう五十九になつてしもつた。いまさら自分ごとき年寄りが、しゃしゃりでるような幕などありそうにない。そのうえ、蕭衍のもとには、范雲達の沈約達の任昉だのといつた、たいへんな知恵者や文章上手たちがそろつていようだしな。

自分はこれまで、齊室の有力者たちにちかづいて、自分でいうのもなんじゃが、たいへん重宝されてきた。初代の高帝さまのときなど、詔勅の執筆もまかされていたほどだ。そうした点からすると、范雲ら梁の重臣からみれば、わしはほろんだ齊室にちかい、要注意人物だとうつつていることだろう。それなのに蕭衍、意外にもこの

年寄りに、けつこうな官爵をあたえてくれた。とすれば、そうながくはない命じゃが、この梁朝下でも、なんとか安楽な日々をおくらせてもらえそつだ。

安心したおかげで、江淹は口がなめらかになった。蕭衍から官爵をさすかったその日かもしれないし、後日かもしれないが、彼は、周囲にいた自分の子弟たちに、つぎのようにかたつたという（『南史』巻五九江淹伝。以下、とくにことわらぬかぎり、本伝は同書）。

わしはもともと、しがなないこつば役人で、富貴な身分など、もとめておらんかった。だがいま、こんな官爵をいただいてしまった。わしは平素から、足るをしり、分をわきまえることをかたつてきたが、もうこれでしゅうぶんじゃ。

人生はたのしんでこそ。さらなる富貴を期しても、きりがな。わしは、もう功なり名とげることができな。いまや田舎にひっこむことにしようかな。

このとき周囲にいて、この江淹の述懐をきいたのは、だれだったのだろう。

まず、彼の子どもたち。本伝によると、江淹の死後、江為こゝろいという人物が封爵をついだとあるので、彼が長子だったのだろう。また江淹には、江玠こゝろいという男子もいた。だが彼の「傷愛子賦」序に、「江玠、字は胤卿あなを、僕の第二子なり。生まれるや神俊、必ず美器と為るべし。惜しいかな閔に遭い、歳を渉りて卒せり」とあるので、早世したようだ。そのほか、才君とよばれた女子がいたこともわかっている（この時点では没。後述）。いっぽう、妻だった劉氏（？四七六）は、このときはすでに故人となっている。おそらく江淹、後添えをもらったのだろうが、そうしたことについては、史書はなにかたつていない。

すると、すくなくとも江為とその息子たち（江淹の孫）は、この江淹の述懐をきいたにちがいない。この江淹、

息子朶や妻劉氏の死にさいし、哀情せつせつたる詩文をつくっており、たいへん家族おもいだったようである。そうした性分であれば、いまはしらぬ子や孫、あるいは親族関係の者が、彼をしたって、おおぜい周辺にあつまっていたことだろう。なんといつても、このときの江淹は、江一族の出世がしらであり、大黒柱であった。とすれば彼らは、年おいた江淹がポツポツとかたることばに、つつしんで耳をかたむけたはずだ。

この述懐をきいたとき、長子の江為などは、こうおもったのではないか。ああ、父うえはずとまえから、こうだったな、と。そうである。この時点をさかのぼること十九年、四十歳（永明元年、四八三）の江淹は、自分で自分の文集を編纂し、それに附した「自序」（自伝、自序伝ともいう）のなかで、このうべていたのだった。

私はつねづね、こういつてきた。

「この世につまれては、身の丈にあつた暮らしをするのが、いちばんたのしい。どうして必死に努力して、死後の名声をもとめたりしようか」と。……

さらに私は、学問をして、ひとにしられようとおもわず、気にいらぬ者とも交際しないよう心がけてきた。また天竺の因縁を説いた仏典を信じ、老子の清浄なる道をこのんできた。仕官しても、ただ卿の地位と二千石の禄があればよく、もし日々の暮らしをたて、夏冬の祭ができるほどの蓄えがあれば、すぐにでも隠遁したいとおもっていたものだ。

いつも夢みるのは、幽居に庵をむすんで俗世と縁をきること。庭には紅葉、池にはあおみがかった清水。左側には郊外がつづき、右側には沼地が帯のよつにひろがる。春ともなれば、平坦な岸辺を散歩し、すみきつた秋には、家のなかでひとり酒をくもう。侍姫は三四人、趙の美女は数人というところか。

これがだめなら、気ままに行商の旅でもし、琴を弾じ詩を詠じることしよう。そうすれば朝露ほどの

かなき命だろうと、老のちかづいたこともわすれてしまうちにちがいない。私が到達した結論は、こうした生きかたをするにつきる。

この「自序」の記述が、さきの述懐とよく似ていることは、一目瞭然だろう。つまり江淹は十九年まえも、おなじようなことをのべていたのである。

とすれば、こうした発言は、江淹の本音であり、また彼の本質をしめすものだとしてよからう。彼は生来、ぎらつくような野心や強欲さは、もちあわさなかった。富貴な身分など、べつになりたくない。ほどほどの地位と財産があれば、それでじゅうぶん。それがありさえすれば、俗世と縁をきって田野に隠棲し、気らくにたのしむことにしよう——そんなつつましい生活を、四十歳のときのぞんでいたのだった。ところが、そうした江淹が、おもわぬ立身をし、おもわぬ高位にのぼってしまったのだった。

梁朝下の江淹、蕭衍から官爵をさずけられたあと、このことばとおりの日々をおくったようである。「梁書」本伝の末尾には、こうある。

其の年（天監元年、五〇二）、「江淹は」^{やま}疾を以て金紫光祿大夫に遷り、醴陵侯（伯のあやまりか）に改封されたり。四年（五〇五）、卒す。時に年六十二。高祖は「亡き江淹の」為に素服して哀を挙げ、錢三万、布五十匹を^{おく}贈れり。^{おくりな}諡して憲伯と曰う。

右の「疾を以て」というのは、真に病氣になったものではあるまい。おそらく、「病氣を口実にして」ということだろう。金紫光祿大夫は二品の高位で、いわば天子の政治顧問にあたる。つまり江淹は、さらに同年のうちに、官位はたかいが、実務のない名譽職にうつらせてもらったのである。この異動は、たぶん江淹が内々にお願ひしていたものであり、まつりあげられたというより、格段の厚遇をさずかったということなのだろう。

すると梁朝下の江淹は、念願だった安楽な日々をおくれたのではあるまいか。それは、たぶん「庭には紅葉、池にはあおみがかった清水。左側には郊外がつづき、右側には沼地が帯のようにひろがる。春ともなれば平坦な岸辺を散歩し、すみきった秋には家のなかでひとり酒をくもう」という日々だったろう。そして三年後の天監四年（五〇五）、功なり名とげた彼は、おだやかな死をむかえたのだった。享年六十一。

江淹のいきた宋齊のころは、政治的には陰謀つずまく混沌の時代であった。帝位をめぐる皇族どうしの内訌がはげしかつたうえ、野心をもった軍人や貴族らもそれらにからんでゆき、政争に拍車をかけた。彼らは、たがいに背信や裏切りをくりかえしつつ、おのが野望をたくましくしていったのである。

そうした争いにまきこまれて、おおくの文人がごろされていった。たとえば范曄、謝靈運、鮑照、王融、謝朓ら。彼らは、ある者はみずから権力闘争のなかに首をつっこみ、ある者は混乱の巻きぞえをくらって、非業の死をとげていったのだった。

ところが、江淹はそうした政争の荒波を、みごとにおよぎつたのである。彼はどの時期においても、その篤実さと文辞能力とによって権力者に信頼され、また主君のために尽力した。ただ権力者というものは、気まぐれだったり、勢威をうしなったりすることが、しばしばおこるものだ。そのため、ときに、荒波に足をすくわれかねないことも、ないではなかった。だが江淹、そのたびに、運がよかったというべきか、先見の明があったというべきか、たくみに危機一髪のところを危難をさけ、ぶじ、いきのびることができたのだった。

江淹が、先見の明を有していたというのは、事実である。「自序」のなかでも、彼は自分で「深慮し遠謀を有していた」（原文は「深沈有遠識」）とかたっていたし（後述）、当時の人びとも、そうおもっていたようだ。「深沈」にせよ「遠識」にせよ、世のなかを手がたく、そして安全にわたってゆくにはひじょうに、有益な性分であ

る。そのためか、死活にかかわる事態においても、いやそうしたときこそ、彼はつねに周囲の情勢を冷静にみとおし、あやまつことなく身を処することができた。具体的には、そのときその場において、もっともつよい者を的確にみいだし、そちらの側につくことができたのである。それが他人には、「先見の明がある」とうつったのだらう。

彼の先見ぶりをしめす逸話を、ふたつほど紹介しよう。

ひとつめは、斉末のときであった。東昏侯（四八三～五〇一。在位四九八～五〇一）こと蕭宝卷が十六歳で践祚するや、生来の暴虐さを發揮して、斉室の重臣や將軍をつぎつぎと殺害しはじめた。これをみて、自分もいずれ肅清されるだらうとおもった崔慧景は、ついに広陵において、蕭宝卷に反旗をひるがえした。そして東昏侯の同母弟の蕭宝玄を奉じて進軍し、ついに建康を包囲するにいたったのである。ときは永元二年（五〇〇）三月、江淹は五十七歳であった。

かく崔慧景が優勢をたもち、台城まであやつくなったとき、おおくの貴族たちは、こっそり慧景に名刺をおくつて、好みを通じようとした。慧景が勝利をえたときにそなえ、いまのうちに渡りをつけておこうとしたのである。ところがこのとき、江淹だけは病と称して、名刺をもっていかなかった。

そして一か月がすぎたころ、急をしった豫州刺史の蕭懿（のちの梁武帝 蕭衍 の兄）が、軍をひきいて建康にかけつけた。そして果敢に慧景の軍をうちやぶって、これを殺害したのである。かくして同年四月、慧景の乱は鎮圧され、東昏侯は命脈をたもつことができたのだった。事後、崔慧景の陣営のなかから、貴族たちの名刺がぞくぞくとみつかった。だが東昏侯は、「江夏王（蕭宝玄、自分の弟）でさえ反乱軍に味方したのだから、他人を罰することはできぬ」といって、それらを焼却せしめたという。あまりにおおすぎて、処罰しようにもでき

なかったのだろう。

そのあまたの名刺のなかに、江淹のものがなかった。これによって、「事（崔慧景の反乱）の平らぐに及びて、世は其（江淹）の先見に服せり」（『南史』本伝）となったのだった。

ふたつめは、おなじ永元二年の冬に端を発する齊梁交替、その一連の事件中におこった。十月、崔慧景の乱の鎮圧に功あつた蕭懿が、東昏侯から死をたまつたのである。東昏侯の側近たちが、蕭懿の勢威がたかまつたのを嫉妬し、東昏侯に讒言したのだった。「蕭懿は謀叛をたくらんでいます。陛下、はやくあやつを誅さないで、あの隆昌の鬱林王（鬱林王こと蕭昭業は、隆昌元年 四九四 に蕭鸞 後の明帝 によつてころされた）のようになりませう」と。このことばを、おろかな東昏侯が信じたのだった。

十一月、兄蕭懿が賜死されたことをしるや、弟の雍州刺史蕭衍はついに蹶起した。兄がこうなつた以上、自分もあぶない。以前から東昏侯打倒の準備はしていたのだが、こうなつたからには緊禪一番、いまずぐ兵をあげることにしよう。そう決断するや、蕭衍の行動はすばやかだった。すぐ隣接する荊州に同盟をよびかけ、当地の長史だった蕭穎胄と連携をとることに成功した。かくして翌年（五〇二）三月、荊州刺史の蕭宝融（東昏侯の弟）を天子にたてて、中興と改元したのであった。そして、蕭穎胄に江陵で宝融を守護してもらいつつ、彼自身は義師をひきいて、東昏侯を打倒しようと建康にむかつたのである。蕭衍ひきいる義師は東下しながら、郢州をぬき、江州をおとし、その年の九月には、建康近郊の新林にまでせまつた。

かく風雲急をつけた時期、江淹は秘書監だったが、とつぜん衛尉も兼任するよう命じられた。衛尉は、宮門の衛士を管掌する官で、いわば宮城防衛の責任者に相当する。江淹は軍人でなく、文官にすぎない。にもかかわらず、この時期にこの職務に任せられたというのは、彼はよほど齊室に信頼されていたのだろう。江淹はときの権

力者に篤実につかえ、信用される人物であったが、暴君の東昏侯やその周辺からさえも、たよりにされていたのだった。

とはいえ、東昏侯はだれがみても暴虐であり、おろかな天子である。いま、蕭衍ひきいる義師が建康に殺到しつつある時期に、この衛尉の官に命じられたことは、ありがたいことではない。江淹は固辞した。だが、ゆるされない。そこでやむをえず、衛尉の官についたのだった。そのさい彼は、知人につきのようにかたつたという（『梁書』本伝）。

この衛尉の官に私が適任でないことは、道ゆく人びとでも知っていることだ。きっと私の虚名を、利用しようというのだろう。

ただ天時も人事も、変化してやまないもの「で、将来どうなるかしたわけではないの」だ。孔子さまも「文事が得意な者は、かならず武の備えもしている」とおっしゃっているではないか。とすれば「きちんと備えをし」、そのときに適切に対応すればよいだけのこと、どうして心配する必要などあるつか。

この江淹の発言、要するに、いま衛尉の官についたって、心配することはない。どうせ情勢はころころかわる。いざというときに、適切に、そして臨機応変に対応すればいいだけのことさ——ということだろう。このことば、江淹はおのが出处進退に、つよい自信をもっていたことをしめしている。このとき、彼の心中には、もう時勢に対する的確な見とおしがついており、適切な時期に「あること」を実行しようとする決意が、かたまっていたのだろう。

ときがきた。蕭衍が義師をひきいて、いよいよ建康近郊の新林までせまってきたのである。すると江淹、躊躇なく、その「あること」を実行した。それは、「微服して来奔^{びへん}」することだった。つまり宮城防衛の責任者たる

彼、義師がせまるや、さっと「齊朝の官服をぬいで」しのび姿となり、蕭衍の軍に投じたのである。

すると、蕭衍はどうしたか。彼は江淹をうけいれ、冠軍將軍に任じてくれたのである。ついで、司徒左長史の官も兼任せしめたのだった。おそらく蕭衍としては、首都決戦をまえにして、江淹をかく寛大にあつかうことによって、他の投降もいざなおうとしたのだろう。

江淹のほうも、蕭衍がこうした措置をとってくれることを、予期していたのだろう。自分が投降したなら、蕭衍はきつとつけいれてくれるはず。自分という人間は、それなりに名をしられた存在である。とすれば、切れ者の蕭衍のことだ。きつとわしの利用価値を的確に認識し、うまく役だてようとするにちがいない——江淹はこゝ予測して、「微服して来奔す」ることを決意し、そして実行したのだった。

かくして彼の「遠識」は、みごとに図にあたった。知人にかたったように、江淹はたしかに、「そのときになつて適切に対応」することができたのだった。これによって江淹は、「右にみたごとく」蕭衍が樹立した梁朝下において、安全で、そして安楽な日々をおくることができたのである。

かくみてくると、このときのおもいきった転身は、まことに的確、まことにあざやかなものだったといわねばならない。崔慧景のときの先見の明もすばしかったが、今回はもっと劇的な成功をおさめたのだった。

一一 剣呑な日々

この江淹は、どういう人物だったのだろうか。まず、生まれからみていこう。

彼の出身については、『梁書』『南史』の本伝、そして彼自身の手になる「自序」でも、ともに

済陽の考城の人なり。

とかがっている。済陽考城は、いまの河南省蘭考県あたりで、長江はもちろん、淮水よりもずっと北の地である。かく淮水以北の出身であるにもかかわらず、江淹が江南の宋や齊につかえたのはなぜか。それは、例によって西晋末の混乱時、江の一族も、長江をわたって南渡したからである。

では、より具体的には、江一族は、だれのと看、どういつふうにして南渡したのか。そうした事情をおしえてくれるのが、江淹と同世代の同族、江悦之（四四五―五〇五）という人物の記事である。悦之は、もとは宋齊につかえた軍人だったが、梁のときに北方に亡命したため、その伝は『魏書』卷七十一におさめられている。

江悦之は字は彦和、済陽考城の人なり。七世の祖の「江」統は「西」晋の散騎常侍なり。劉淵、石勒の乱あるや、南に徙りて「長」江を渡る。

この記事を見ると、江悦之の七世の祖だった江統という人物が、西晋末の混乱時に南渡したようである。この江統は、西晋では散騎常侍という高官についていたのだが、劉淵や石勒の乱をさけて、江南の地へ避難してきたのだった。こまかくいえば、はじめ河南の成皋に避難し、ついで長江をわたったらしい。この時期、済陽考城から江南に移動したのは江一族だけでなく、他族の人びとも大挙して南渡している。そうしたなか、江一族の人びとは、おおく建康の東方の南徐州の地（京口、丹徒など）にすみついたのである。江淹は、そうした江南の江氏として生まれたのである。

この済陽の江氏は、南渡するまえも、したあとでも、すぐれた人物を輩出していたようだ。じつさい、「済陽考城」の語で『南史』や『宋書』などを検してみると、おおくの江姓の高官や知識人が輩出しているのがわかる。たとえば南渡後にしほって、宋代の著名人をあげれば、

江秉之、字は玄叔、済陽考城の人なり。祖の「江」逌は晋の太常たり。父の「江」纂は給事中たり。……出でて永世、烏程令と為る。善政を以て名を東土に著^{あら}わす。建康令に徴^めされ、治を為すこと嚴察なれば、京邑肅然たり。

江夷、字は茂遠、済陽考城の人なり。祖の「江」彪は晋の護軍將軍たり。父の「江」敷は驃騎諮議參軍たり。……復た丹陽尹、吏部尚書と為り、散騎常侍を加えらる。右僕射に遷る。夷は風儀美しく、挙止善し。歷任するや和簡なるを以て著われ称えられたり。

江湛、字は徽淵、済陽考城の人なり。湘州刺史の「江」夷の子なり。喪に居りては孝を以て聞こゆ。文義を愛好し、彈棊鼓琴を喜び、兼ねて算術に明るし。

江智淵、済陽考城の人なり。湘州刺史の夷の弟の子なり。父の僧安は太子中庶子たり。……智淵は文雅を愛好し、詞采清贍なり。世祖深く相知待し、恩礼は朝に冠たり。

後廢帝の江皇后は諱^{いみな}は簡珪、済陽考城の人なり。北中郎長史の「江」智淵の孫女なり。

などとある。こうした人びとは、当時著名だったから、かく伝記がかかれていくわけだ。なかでも、江智淵（四一八～四六三）の孫むすめにいたっては、宋の後廢帝（劉昱）の妃となったわけだから、そうとう有力な一族だったといつてよからう。

ただ、ふしぎなことに、その江智淵本人について、つぎのような話柄がのこっている。元嘉の末のころ、彼は尚書庫部郎に除されたが、当時、名流の者はこの地位にはつかぬ慣例だった。彼は門閥がひくかったので、こうした官に任ぜられたのである。そのため智淵はよろこばず、この官を固辞したという。

つまり、いくら天子から「深く相知待」され、孫むすめが后妃となるような有力な人物であっても、門閥がひ

くいと、この種の不快な思いをさせられることがあったのだらう。江氏は、そうした、すぐれた人材を輩出はするものの、門閥としては二流という家柄だったのである。

では、南徐州にすみついた江氏のうち、江淹の家系はどうだったのだらうか。

彼の直属の先祖で確認できるのは、

江淵（江泉とも）——江象————江耽——江康之——江淹

というものである。晋のひとだった江淵は大鴻臚、そして江象は衛尉だった（ともに三品）という。すると、この時期の江淹の先祖は、なかなか羽振りがよかったといつてよからう。

ところが、たぶん江南に移動して以後だらうが、江象につづく二代が、まったくの事跡不詳である。ということとは、この二代のころからおちぶれていったのだらう。そして祖父の江耽は丹陽令、父の江康之は南沙令という、いずれも地方の役人どまりで、当時としては中下層レベルの寒門に属することになった。祖父は、事跡がこれ以外つたわらず、父のほうも、息子の江淹の伝に「父の康之は南沙令たり。雅より才思あり」とかかれる程度にすぎない。このように、おおくの俊才をうんできた済陽考城の江氏ではあるが、江淹が属する一支に関しては、渡江以後におちぶれてしまつて、けっきょく彼は、寒門のしがない地方役人の息子として、この世に生をうけたのだった。

では江淹はどこで生まれ、どこでそだったのか。

それはおそらく、南徐州の治所があった京口だらう。というのも、彼が三十一歳のとき、南徐州刺史の劉景素によつて、建安の呉興令に左遷されたことがあった（くわしくは後述）。そのとき、江淹は京口を出立するにあつて「去故郷賦」をつくつたが、そのなかに、

そこで私は、郷里がみえなくなったことに涙をこぼし、故国が空の果てにきたことをかなしんだ。

於是泣故関之已尽、傷故国之無際。

という二句がある。ここの「故関」「故国」は、京口をさしている。ということとは、標題の「故郷を去る」の「故郷」も、南徐州の京口を意味すると解してよからう。江淹にとって、故郷とは京口のことであり、彼はそこで生まれ、そだったのである。

つづいて、江淹の少年時代をみてみよう。

江淹はさきにも引用した「自序」で、自分のわかいころのこともかたっている。この「自序」、自身の記述だから信頼できるともいえるし、だからこそ信用してはならぬという場合もあるだろう。そのあたりに注意しながら、「自序」によって、少年のころをみてゆこう。

私は、幼時から家学をさすけられ、六歳で詩をつくれた。十三歳で父が死に、その教えをうけられなくなった。長じてからは群書を博覧したが注解の学問には従事せず、もっぱら詩文をまなんだのである。読誦した書物は二十万言ほどもあった。

私は奇抜なものや異物をこのみ、つねに深慮し遠謀を有していた。いつも司馬相如と梁伯鸞をしたっていたが、そのとおりににはできなかった。魂が通じあうほどの友は、陳留の袁叔明ひとりだった。

「幼時から家学をさすけられ」（原文は「幼伝家業」とあるが、彼の家に、家学というほどのものがあつたのだらうか。すこし気どつてのべただけかもしれない。ただ、学者ふうの注解の学問はこのまなかつたようだが、六歳で詩をつくるほど、詩文は得意だったようである。また群書を博覧し、二十万言の詩文を読誦したというのは、詩文中での博大な典故利用をかんがえれば、おそらく事実にかしいのだろう。

また、「深慮し遠謀を有していた」（原文は「深沈有遠識」というのは、さきにも引用したが、江淹の慎重な性格をのべたもので、結果的に、いろんな折りに彼を危機からのがれさせることになった。その意味で、江淹の人となり特徴づけるものとして、記憶されておいてよい。

さらに、司馬相如をこのみ、隠者の梁伯鸞をしたったが、そのとおりにはできなかったともいう。ここは詩文でなく、生きかたをのべたものなので、司馬相如も、賦家ではなく、梁伯鸞とどうよう、隠者の理想像として（司馬相如は晩年、病と称して閑居し官爵をもとめなかった）挙例されているのだらう。江淹はその生涯において、隠逸を口にしながらも、けっきょくは実践にうつさなかったので（「七 道教へのあこがれ」参照）、たしかに「そのとおりにはできなかった」といってよい。

ここで注目したいのは、江淹十三歳のとき、父に死なれたということである。息子の伝に「雅より才思あり」とかかれた父の康之、地方官をつとめていたが、淹をのこして逝去してしまったのだった。これが、江淹の人生におおきな影響をあたえたことは、容易に想像できよう。この父が死んでもまもなくたったころ、江淹の周辺にふしぎなできごとがおこった。「南史」本伝によると、つぎのようなものである。

江淹が十三歳だったとき、父が死んで貧窮となったので、いつも山で薪たきとりをして母をやしなっていた。あるとき薪とりでかけたところ、高価な貂蟬ちようせんの冠をみつけた。江淹はそれをつつて、母の生活費にあてようとした。

すると母はいった。「これは、おまえにとつて吉兆ですよ。おまえの才能は、この貂蟬のようにすばらしいのです。どうして、いつまでも貧困であるはずがありません。手もとにおいておき、おまえが侍中に立身したときに、この冠をかぶりなさい。」

いかにも『南史』にありそうな、小説ぶつの逸話である。この話は「江淹は」秘書監、侍中、衛尉卿を累遷す」と記述したあと、「初め、淹年十三の時に」云々と引用されている。すると話中の「貂蟬の冠」なるものは、江淹が将来手にいれる高官（具体的には侍中）を暗示しているのだらう。じっさい、右の話を引用したあと、

是（五十六歳で侍中に任官した）に至りて果たして母の言の如し。

とつづけている。つまり『南史』編者は、このエピソードを引用することによって、母のことばが適中し、江淹はその後、侍中に立身したといたいのだろう。

この貂蟬云々の話柄、真偽はあやしいものの、江淹が少年時そうとう苦学していたことは、まちがいないとてよい。江淹の母は平原の劉氏の出で、名門ではあったが、そちらからの援助もあまりなかったのだらう。そのため、父に死なれた江淹は、じっさいに薪とりにはげんで、家計をたすけていたのだとおもわれる。とすれば、江淹母子は日々、「なんとか淹が侍中に立身し、生活がラクになればいいなあ」と念じていたのだらう。だからこそ、母の口から、こうしたことばがでてきたものとおもわれる。

これを要するに、江淹は、俊才を輩出する済陽江氏の出身であった。だが、彼が属する一支は、南渡後に寒門におちぶれてしまい、さらに父が淹十三歳のときに逝去してしまった。そのため少年時の江淹は、山で薪をとって家計をたすけるなどして、貧窮の日々をおくっていた——とかんがえてよからう。

そうした江淹だったが、尋常ならぬ彼の天稟をみぬいた人物もいた。たとえば何点、あざなは子哲がそのひとりだったが、より注目すべきなのは、江淹よりずっと年上の文人だった檀超、あざなは悦祖であらう。彼はのちに、江淹とともに国史の編纂にもたずさわることになるが、酒すきの豪放な男であった。

この檀超、なぜか少年江淹の資質をたかく評価し、座するとき上席にしてくれるなど、江淹を礼遇してくれ

たという。ただ、史書にはこれ以上のことはかかれてないので、彼がどうした事情で淹の天稟をみぬぎ、どういうふうに援助してくれたかは、具体的にはわからない。ただ貧困にあえぐ江淹が、おのが立身の道を模索してゆくなかで、この檀超が陰になり日向となつて、ひきたててくれたのだとおもわれる。

ずつとのち、江淹四十歳のとき（四八三、永明元年）、この檀超は斉武帝にこころされた。その豪放ぶりが武帝にきらわれたのかもしれない。国史の編纂途上だったが、交州に配流され、その途中で殺害されたのである。

檀超の死後、江淹は、武帝の忌諱にふれる「かもしれぬ」のもかまわず、あえて檀超の墓誌をかいた。その「齊故司徒右長史檀超墓誌文」は、つぎのようなものである。

金属でもっともひかるものが銑、玉で最美のものが瑤。檀どのは、その銑・瑤に比すべき深遠さをもち、行いは世人の範であつた。その精神は洒脱、その氣質は恬淡。学識は内からあふれ、麗筆は外にかがやいた。文采は評判たかく、朝堂で腕をふるわれた。

かく美質を有する氏であるが、竹や蕙がしばむがごとく物故された。人命ははかなく天運は悠久、世道は短促にして天道は永遠。だが、檀どのの名声は不朽にして、後世でもほろびることはあるまい。

「惟金有銑、君実淵哉、行為世標。」

高志灑落、

奥学内溢、嘉采籍譽、登国振朝。

「惟玉有瑤。」

逸気寂寥。

深文外昭。

亦既有美、筠傷蕙凋。

人邇運曠、永矣仁矣、流芳無澆。

世促道遠。

訳文一行目の「深遠さをもち」は、原文では「淵哉」。丁福林・楊勝朋『江文通集校注』一六二八頁は、この「淵」字に注目し、同音の「冤」（無実の意）の借字ではないかという。すると「君は実に冤（えんぬれぎぬ）なるか

な」の意となる。そうだとすれば江淹、この墓誌をつくることによって、さりげなく檀超を弁護し、名譽を回復させようとしたのだろう。江淹は、かく恩義をわすれぬ男でもあった。

若年期にもどる。貧窮の日々をおくっていた江淹だが、その天稟は、やはり彼を陋巷につもれさせはしなかった。「自序」によると、

二十歳のとき、私は始安王の劉子真に五経を教授し、その大義をつたえた。また「同年のうちに」、南徐州刺史の新安王劉子鸞のしたで従事となり、さらに「翌大明八年には」奉朝請に転じた。

とある。二十歳の江淹は大明七年（四六三）、なんと、ときの宋室の皇子の教育係の仕事に、ありつけたのだった。

始安王の劉子真（このとき七歳）に「五経を教授し、その大義をつたえた」というだけなので、これは現在ふうにいえば、正規の官位をえたのではなく、臨時の家庭教師のようなものだったろう。それでも相手は皇族の子弟、すなわちときの天子、孝武帝劉駿の十一男である。さらに別資料によれば、子真だけでなく、「後日に仕官する」劉景素らの諸皇子にも教授したともいう。二十歳の若造にとっては、たいへん名譽なことだ。

いくら秀才だったとはいえ、寒門青年にすぎぬ江淹が、どうした事情で皇室と関わりをもつことができたのか、現在ではまったくわからない。しられている範囲では、この時期の江淹には、右でのべた檀超ぐらいしか、この仕事を幹旋できそうな人物はいない。檀超は、宋の孝武帝に氣にいられていたのだ、あるいはその関係で、江淹にこの家庭教師の口を紹介できたのかもしれない。あるいは、他の江氏有力者からの、つよい推しがあったのだらうか。

臨時とはいっても、皇族の子弟に五経を教授したというのは、たいへんな経歴である。そのためだろう、江淹

はさつそく同年の十月に、やはり皇族の子弟である劉子鸞（このとき八歳。名目上ではあるが、南徐州刺史であり、また新安王でもあった）のしたで従事になったのだった。この南徐州刺史の従事というのは、さきの臨時の家庭教師とはちがって、地方王の幕府中のものであるものの、きちんとした官位である。つまり江淹は、正式に起家することができたのだった。

この起家も、どうした事情や、だれの推輓があつたのかなどは、まったくわからない。ただ、劉子鸞は孝武帝の八男で、家庭教師をした劉子真の兄にあたっている。すると宋室の人びと、子真やその周辺から評判をきいて、「では、正式に官をさずけてやろつ」ということになったのかもしれない。そうだったとすれば、江淹、おのが才覚でうまく宋室にくいこんだ、といつてよからう。

このときに江淹がつくつたのが、「奏記詣南徐州新安王」という劉子鸞あての奏記（書翰の一種）である。当時の彼のはりきりようや文辞の能力をしる一助として、ここに引用してみよう。

つつしんでかんがえますに、明公殿下（劉子鸞）におかれましては、後宮に声誉がとどき、朝廷でも名声がなりひびいております。儒雅の士をもとめ、奇才の人物をまねいては、宝玉をおしまず、黄金も散じておられます。

この江淹は、東国の輕輩にすぎません。世にでないで隠棲し、陋屋に坐して学問しておりましたが、ご厚情をかけていただき、お恵みをたまりました。この鴻恩をおもえば、わが心は恐懼にたえません。

私は、斉右の名手が高唱すれば、へたな歌手はいらないし、柏梁台が完成すれば、良材も不要になる、と書いております。この淹は、幼時は故郷で名声を博することなく、長じては才学がすぐれるという評判もありません。どうして明公さまに、えせ賢者をつかませ、にせ才子を登用させてよいものでしょうか。ついて

は、わたくし淹は、このたびの職位を辞したいとおもいますので、召書を撤回してくださいませ。

伏惟明公殿下、

「列譽椒壁、

「爰求儒雅、

「削赤野之玉、

「蜚声冲漢、

「傍招異人、

「翦燕山之金、

至如淹者、東国之徒步耳。方斂影逃形、匡坐編蓬之下、遂遭

煙露余彩、惟恩知泰、変色薰心。

日月末光、

淹、

「齊右既撫、無待巴人之唱、淹、

「幼乏鄉曲之譽、豈宜

「炫璞鄭氏、

「願避職吏、緩其召書、

「柏台已構、寧俟不才之末、

「長匱芹藻之德、

「獻鳳楚門哉、

末二句で「職位を辞したいとおもいますので、召書を撤回してくださいませ」というのは、もちろん謙辞であり、要はがんばりますといっているのである。また自分を「東国の輕輩にすぎません」と規定し、「幼時は故郷で名声を博することなく、長じては才学がすぐれるという評判ありません」と卑下するところ、弱冠にして初出仕というにしては、なかなか世なれたことは遣いをしている。

くわえて行文も、適宜、典拠あることばを使用し、対偶も多用した駢散兼行のスタイルとなっている。たとえば「齊右既撫」云々の四句にいたっては、典拠（『孟子』告子下と宋玉「対楚王問」）をふまえたうえ、賦で多用される四字・六字の輕隔対をつかつており、かなり高度に練成された句法だといつてよい。

十三歳で父に死なれ、薪とりをしていた江淹が、どこでどうやって、こうした美文の叙法や奏記の書式をまなんだのか。文中の典拠あることばは、「『自序』でいう」群書を博覧し、二十万言を読誦した成果だったのか。そうだとすれば、彼が読誦したという書物は、江淹の自宅にあったのか。それともだれから借覧したのか——等々、少年時代の彼については疑問がすくなくない。だがそれはそれとして、現に二十歳の江淹が、こうし

た奏記をかいているのだから、彼の俊才ぶりはまちがいないものと思ねばならない。

ただこの奏記、若年期の作だけあって、しいて粗さがしをしようとすれば、できないこともないようだ。たとえば「列誉椒壁」の四字、この句は「後宮に声誉がとどき」の意であるが、このときの子鸞は「南徐州「刺史」新安王」という高位を有していた。とすれば、彼がまだ「椒壁」（後宮の母のもと）にいたとするのは、事実ではあっても、すこし具合がわるいようだ。もっと年長者あつかいし、たとえば「椒壁」でなく、「辟雍」などの語をつかうべきだったろう。

また「幼乏郷曲之誉」長置芹藻之徳」の二句は、あまりバランスのよい対偶ではない。「幼時は……、長じては……」の対応は問題ないのだが、細部までみてゆけば、両句間の均衡が不じゅうぶんである。たとえば、「幼乏郷曲之誉」は司馬遷の「報任少卿書」に依拠し、対する「長置芹藻之徳」は『詩』魯頌泮水をふまえたものである。すると、典拠の重みが不均衡になっているし（『詩』がおもすぎる）、場所（郷曲）とひと（芹藻＝才学の士）を対応させるのも、あまりぴたりとしたものではない。

さらに、このみじかい奏記のなかに、「淹は……」が三度もでてきている。これは、わかき江淹のはりきりぶりをしめすものではあるが、ややしつこく、でしゃばりすぎる感じがしないでもない。

これ以後、江淹は順調に累進してゆく。翌大明八年（四六四）には、中央の奉朝請の官に転じた。この奉朝請は当時、若者が起家するさい、しばしばこの官をあてがわれたようで、同時代でいえば、明山賓や沈約、何遜らの伝記でも「奉朝請に起家す」とある。その意味では、この江淹、寒門出身でもあっても、それなりの出世コースにのったといつてよからう。

江淹が立身をはじめた宋末は、政治的には暗黒の時期であった。帝位をめぐつて、宋の皇族のあいだで猜疑心

がたかまり、たがいに攻伐し殺戮しあうという、おそろしい状況だったからである。そうした風潮が惹起されたのは、劉義隆こと文帝の横死がきっかけだった。

比較的安定した政權運営をしていた文帝（四〇七～四五三、在位四二四～四五三）が、なんと、長男の皇太子劉劭にころされたのである。劉劭は、はやく帝位につきたいとあせって、父が死ぬよう巫蠱ふこの術をおこなった。それが露見して廃されそうになったが、「それなら、こっちから」ということで、親ごろしの凶行におよんだのだった。

親ごろしという、天もゆるさぬ弑逆をしでかしたため、すぐ報いがくだされた。すぐ、弟の江州刺史劉駿が義兵をあげ、あつというまに劉劭をうちとつたのである。劉劭は台城内の井戸のなかにかくれたが、たちまちみつきり、ひきずりだされて殺害された。かくして文帝の三男だった劉駿が、あらたに帝位にたつことになった。これが孝武帝である。このとき、まだ二十四歳の若者だった。

だが、この孝武帝、践祚しても、内心はおだやかではない。父の文帝が長男（自分からは長兄）の劉劭に殺害され、そして弟の自分が、兄の劉劭をたおして即位したのである。いわば家族内で殺しあいが発生し、たまたま自分が勝利者となったにすぎない。こうした帝位をめぐる骨肉の争い、二度あることは、三度あるやもしれぬではないか。

じつさい、即位してすぐ叔父の劉義宣が、軍人の臧質とともに挙兵した。これはなんとか鎮圧したが、践祚まもなくの親族の反乱は、孝武帝にはおおきな教訓となった。他人はもとよりだが、家族、さらに一族の連中には、よくよく気をつけねばならぬと、おもいつたのである。そしてそうした思いは、とうぜん他の皇族たちのあいだにもつたわってゆく。これ以後、皇室内に不穏な空気がただよいだした。

ただ、この孝武帝の時代（在位四五三～四六四）は、まだましなほうであった。彼は、弟の武昌王劉渾や竟陵王劉誕を殺害し、おおくの廷臣や王侯貴族をころしたが、これはあとからみれば、まだ宋室内訌の、ほんの序の口にすぎなかった。この孝武帝につづく天子たち、前廢帝劉子業（在位四六四～四六五）、明帝劉彧（同四六五～四七二）、後廢帝劉昱（同四七二～四七七）らが在位していたころは、まさに猜疑と不信にいろどられた恐怖の時代であり、宋室内外ですさまじい殺戮の嵐がふぎあれたのだった。

どの天子も即位するや、はげしい疑心暗鬼にかられた。血族の連中、さらに重臣や將軍たち、彼らはみな自分をころして、帝位をうばおうとしている、とみえたのだった。そしてよけいにやかいだったのは、当時、そうした見かたは、あたっていないこともなかったということなのである。

たとえば、かつて、父の文帝に対し長男の劉劭が、孝武帝に対し長男の叔父の劉義宣が、それぞれ謀叛をおこしたのだが、踐祚したての明帝に対しても、すぐ對抗勢力があらわれた。明帝は孝武帝の弟で、甥の前廢帝劉子業（孝武帝の長男）をころして帝位を奪取した人物である。かく傍系からたつた天子だったため、晋安王の劉子勛が、叔父明帝の踐祚に異をとнаえ、みずから尋陽の地で即位したのだ。すると、その弟の劉子綏、劉子房、劉子頊、劉子元らもこれに呼応し、一時は天下を二分するほどの勢威をもったのだった。

ただし、いま名をあげた反明帝の諸王は、いずれも十歳前後の幼君にすぎない。実態としては、野心をもった臣下たちが幼君をかつぎ、自分たちで権力を奪取しようとしたのである。宋の天子は、血族も危険だったが、臣下や將軍たちにも、用心せねばならなかったのである。

こうした権力奪取をねらうという点では、女性も無関係ではなかった。文帝の側室（孝武帝の母でもある）だった路太后（本名は恵男）にいたっては、この劉子勛（太後の孫）の挙兵をきくや、明帝に毒酒をのませてころそ

うとした。自分の孫の踐祚をねがって、「自分とは血縁のない」明帝を亡きものにしようとしたのである。だが、もうすこしのところで明帝に気づかれ、逆に明帝によってその毒酒をのまされて、ころされたのだった。

この明帝は、自身が甥の前廢帝を暗殺して即位しただけに、自分もそうされるのではないかと狐疑し、過剰に警戒した。この狐疑や警戒の念が高じたとき、彼は、確証があるうとなかろうと、果敢に、そして残虐に應對したのだった。自分にたてついた者はいうまでもないが、あやしいとおもわれた者、なにもしてはおらぬが、いかしておいては危険な者、なにもしそうにないが、自分の氣にくわぬ者——こうした者どもがいたら、すぐ先手をつって、躊躇なく殺害したのである。血縁の濃淡、年齢の多少、いつさい関係がなかった。

その例としてよく指摘されてきたのが、兄孝武帝の息子たちの運命である。孝武帝には二十八人の男子がうまれた。だが全員が、弱冠にいたるまえに死んでしまったのだった。まず、十人が乳幼児のうちに夭折した。これは当時のこととて、しかたがないことだろう。だがそれ以外の十八人は、すべて非業の死をとげたのだった。前廢帝がうち二人（そのひとりの子鸞、後述）をころしていたが、明帝はのこる十六人を、劉子勛、およびその乱に關係した者もしなかった者（うちひとりの子真）も、すべて殺害したのである。ころしつくさねば、安心できなかったのだろう。

ちなみに、わかき江淹がつかえた皇子たちの運命にも、ふれておこう。まず、江淹が起家させてもらった劉子鸞。彼は江淹二十二歳（泰始元年）のとき、異母兄の前廢帝にころされた。子鸞は、母の殷淑儀が孝武帝に寵愛された關係で、孝武帝からとくにかわいがられていた。そのため、前廢帝によって嫉妬され、彼が即位するや、すぐ賜死をこうむったのだった。享年十。つぎに劉子真。彼はその翌年、劉子勛の乱がおこったとき、なんの理由もなく、明帝から賜死をこうむった。ただ、邪魔だったのだろう。やはり十歳だった。

この子鸞、彼が最期にかたつたことばは、たいへん有名になっている。彼は死にのぞんで、「願わくば身の復た王家に生まれざるを」となげいたのだった。このことば、当時の宋室の残虐ぶりをよくしめすものだ。十歳の子ども（数えなので、現代ふうにいえば小学三年生だ）が発しただけに、よけいに悲痛な感をあたえる。こうしな思ひは、おそらく子鸞だけでなく、他のころされた兄弟や血族たちも、おなじだったことだろう（じっさい、宋最後の天子となった順帝劉準も、類似のことばをかたつて殺害された。後述）。

さて、わかき江淹にもどうだろう。彼はこうした時代に、仕官を開始したのである。まだ下っぱだったとはいえ、はげしい権力闘争や、そのはての陰謀や殺害等のうわさは、しばしば耳にしたことだろう。寒門出の江淹には、だれも保護してくれる者はいない。こうしたとき頼りになるのは、自分の「深沈にして遠識有り」という慎重さだけ。よほど周囲の動向に、そしておのが言動に、気をつけねばならぬと、肝に銘じていたことだろう。

彼は奉朝請に転じた大明八年（四六四）のうちに、ふたたび始安王劉子真につかえることになった。この年には、孝武帝が崩御し、凶暴な前廢帝劉子業が踐祚している。江淹、この年になぜ、ふたたび子真の幕府につかえることになったのかは、よくわからない。ただ中央の官からの転任なので、こんどは臨時の家庭教師ではなく、正式の官僚として子真のそばに侍したのだらう。

このとき、八歳の劉子真是領石頭戍事となつて、建康西方の石頭城に赴任することになった。江淹も子真にしたがつて、石頭城にうつつていった。つぎの「侍始安王石頭詩」は、その赴任時につくつたものだろう。

小官（江淹）は盛世にめぐまれ

緒官承盛世

恩情をたまわつて英主始安王さまにお仕えできました

逢恩侍英王

いま剣をおびて始安王さまにしたがい

結劍從深景

衣服をととのえて王のお姿をおいかけています

夕方の思いが心中におしよせるなか

秦淮河畔の石頭城から周辺をながめやります

平原が茫洋とおくまでひろがつており

ぼんやりと南湘の地がみえます

するとなぜか塞北の陰鬱な気が

空たかくとぶ鴻雁とともにちかづいてくるのです

鏡をもって愁色ふかき景色をてらし

正坐して憂いの元を確認してみましよう

山中がもし暗闇にとざされていないのなら

桂葉を傷つけぬよう「すぐさま出立」せねばなりません

撫袖逐曾光

暮情鬱無已

流望在川陽

平原忽超遠

参差見南湘

何如塞北陰

雲鴻尽来翔

擘鏡照愁色

従坐引憂方

山中如未夕

無使桂葉傷

この詩では、石頭城から周辺をながめている。前半では劉子真につかえた経緯をかたるが、後半の「何如」以下では、くらい雰囲気がただよっている。たとえば、「なぜか塞北の陰鬱な気が……ちかづいてくるのです」などは、当時の「危機的な」状況を暗示するかのようだ。江淹の詩文では、たとえば謝靈運の謝朓の詩にみるような清麗な自然は、あまりでてこない。逆に、陰鬱な黒雲、寒気、北風、夕暮などがよく登場し、それをみて、つらくなったり、不安な気分になられたりしている。なぜそうしたおもぐるしい描写や気分がおおいのかは、またべつに一篇の論考を必要とするだろうが、江淹の詩文の特徴として、記憶されておいてよい。

この詩にもどれば、末四句にみえる「愁色」「憂方」「無使桂葉傷」などは、まさにそうした傾向が顕著にうか

がえ、詩の雰囲気がかくらしい情緒でつつまれている。とくに末二句は、淮南小山「招隱士」をふまえて、劉子真の周囲にはべる臣下たちに、「桂葉（＝子真）を傷つけぬよう、しっかり守護せねばなりませんよ」と、忠告しているかのように感じられる。わかき江淹は、この詩をつくったころ、なにかしら子真の前途に不安を感じていて、それがこうした詩句になったのだろう。

この江淹の危惧はあたった。劉子真は、江淹がこの詩をつくってから二年後の泰始二年（四六六）、明帝から、賜死を命じられたのだった（前述）。桂葉は傷ついたどころか、無惨にふみにじられてしまったのである。その意味でこの詩は、当時の険悪な時勢や劉子真の運命を、正確に予言していたものといえ、詩籤と称されてもよいかもしれない。

このとき八歳だった劉子真が、詩中の寓意を理解できたとはおもえぬし、二十一歳の江淹も、どこまで危険を察知していたかはわからない。さらに、もしこの詩が「のちに子真を害した」明帝の目にふれたなら、名もなき陪臣の江淹といえども、あぶなかつたかもしれない。だがそれでも江淹は、この寓意ありげな詩をつくり、「たぶん」子真やその周辺に披露したはずだ。このときの彼は、なにほどのこともできぬ寒門出の若造にすぎない。それでも若造は若造なりに、皇子やその周辺に警戒するよう示唆したのだろう。

あとでものべるが、江淹は、基本的に自分が仕官した主君には、篤実にお仕えするタイプだった。恩義ある主君や上官を裏ぎったり、危地においこんだりすることは、けっしてしない男である（ただし、その人物が死んだり、恩義がなかったりした場合は、そのかぎりではない）。とくにわかいころは、得意の文辞能力や情勢分析を駆使して、懸命に文書をつづったり、忠言を献じたりしてきた。そのため、江淹はおおむね、どの主君からも信頼され、期待され、厚遇されてきたのだった。この「侍始安王石頭詩」の創作も、そうした主君への忠誠ぶりを

しめす一事だとしてよいであろう。

それにしても、江淹は、なぜこうした詩籤ふう内容をかくことができたのだろうか。私見によれば、これは、本稿冒頭でのべた先見の明（崔慧景の乱と蕭衍軍の接近のとき）と同根のものだったとおもう。江淹はたぶん、わかいころから時勢に敏感で、未来を察知する嗅覚がすごかったのだろう。そのするどい嗅覚によって、これはあぶない、これはさけたほうがよいなどと、的確に危険を察知することができたのだった。どうして彼がそうした嗅覚をもっていたのか、なぜ彼だけがもちえたのか等々は、あとでかんがえるとして、この詩の創作こそ、江淹のするどい嗅覚を証明するものといつてよからう。

もう一篇、劉子真につかえたときの詩をみてみよう。子真は翌泰始元年（四六五）秋九月、南兖州刺史に任ぜられて、建康から北の広陵の地へ旅だった。二十二歳の江淹も、その子真にしたがったが、赴任の途中で、おのが故郷の京口をとおりましたようだ。もちろん、官命による旅であり、自分の家にたちよることはできなかったが、その途上で、つぎのような詩「從征虜始安王道中詩」をつくったのだった。詩題は、征虜將軍始安王（劉子真）の広陵赴任に扈從する、ぐらゐの意だろう。

笏をもって「始安王さまの」幕中にしたが

秉笏從帷幕

つつしんで政務をお手伝いしてきました

仄身豫休明

王はご休息などされぬかたですので

君子未獲晏

私もせいぜい努力したものでした

小人亦自當

いま王は馬車にのって「広陵にむかつて」冷涼な原野をゆかれ

結軒首涼野

馬をはしらせ寒冷の地にむかわれています

驅馬徼寒城

船の櫂はひらひらとわが郷里へむかい

容裔還鄉櫂

船の旗はくねくねとわが郷里からとおざかつてゆきます

逶迤去国旗

山の霧は百里さきまでとどき

山氣直百里

山の色は雲と見分けがつきません

山色与雲平

たかい松樹は日夜すつくとたち

喬松日夜竦

あかい霧は旦夕に生じてきます

紅霞旦夕生

この私 王の厚情におこたえすることができず

徒慙恩厚概

禄をいただくだけなのをはずかしくおもいます

空抱春施名

始安王さまの名声がひろがるのを願ひはするのですが

仰願光威遠

歳晚には「いまそこにある」故郷の陋屋にかえりたいものです

歲晏返柴荆

この詩、やや説明ふうの詩句がおおくて、それほどすぐれた行旅詩とはいにくい。ただ末句で、いささか唐突に「歳晚には故郷の陋屋にかえりたい」とのべているのが注目される。この望郷ふう発言には、不穏な状況からとおざかりたいとの、寓意が存しているとれなくもないからである。その寓意とは、おそらく「劉子真の危難（前廢帝に殺害されるかもしれない）を目にしたくないし、またまきこまれたくもない」ということだろう。江淹らが広陵に出立したおなじ九月に、前君だった劉子鸞が前廢帝にころされている。江淹はそのニュースを、すでに耳にしていたのかもしれない。

江淹の詩は、この詩にしろ、さきの「侍始安王石頭詩」にしろ、たんに風流をかたったり、美景を叙したりするのではなく、詩でもってなに「ことかをかたろうとする傾向がつよい。とくにこの時期、彼が詩をつくるのは、

「秋はさびしい」や「花がきれいだ」のように、雪月花をめどうとするためではない。もつと具体的な、そしてときには切実な意図や思いがあつて、そのことを主張したり行動にうつしたりするかわりに、詩によってそれをつつたえ、示唆してみた、というふうなものがおおい。そして、そうした場合の意図や思いというのは、悼亡や望郷など私事に関するものでもないではないが、概して自身の進退や主君への美刺など、公事や職務に關したものがおおいように感じられる。

逆にいえば、そうした意図や思いがなくなれば、詩をつくる必要はなくなってしまうわけだ。たとえば、なにかべつのこと（発言や行動）によって意図や思いがはたせられたり、すべてに充足し、うったえる必要性を感じなくなったりすれば、詩はつくられなくなるのだらう。彼が晩年に「江郎才^{さい}尽^つく」と揶揄されたのも、おそらくそうした意図や思いの有無と、關係があつたのだとおもわれる（後述）。

ただ、この「從征虜始安王道中詩」にかぎっては、もつとすなおに読解してもよいのかもしれない。というのも、江淹は、後述するように、たいへん家族おもしろい人物でもあつた。すると、故郷の京口をとりすぎたとき、ふと母や家族の笑顔を想起してしまった（ただし、母の没年は未詳）。そのため、つい詩中に「歳晩には「いまそこにある」故郷の陋屋にかえりたい」とかいてしまった——という可能性もないではない。

秀才で、俊敏で、深慮遠謀を有した江淹といえども、このときはまだ二十すぎの若者だ。始安王一行が郷里のそばをとあつたので、つい母の笑顔とあばら家とが、こいしくなったただけかもしれない。そうだったとすれば、なんだかホッとさせられるではないか。

三 下獄による教訓

この広陵赴任の翌年の泰始二年（四六六）、劉子真是やはり明帝から死をたまわった。子鸞と子真の二人がともに、わずか十歳でころされたのをみて、二十三歳の江淹は、権力闘争の苛烈さをおもいつたにちがいない。自分は容易ならぬ世界へ足をふみいれている、とあらためて実感したことだろう。

その江淹、劉子真が殺害されたあと、いかに身を処したか。「自序」によると、

劉子真さまが死をたまわると、建平王の劉景素どのが、私のよき評判を耳にし、氣にいつてくださった。そして布衣の礼で遇してくださったのである。

とある。「布衣の礼」というのは、身分の差をかまわぬ交際をいう。すると江淹は、子真の死後、間をおくことなく、劉景素（四五二―四七六）の幕府へ、したしく招じいれたのだった。

この劉景素は文帝の孫であり、前廢帝劉子業や殺害された子鸞や子真とおなじ世代に属する。彼はこのとき十五歳。当時では加冠の年であり、成人に達したばかりだった。子鸞や子真ら（ともに孝武帝の子）は、兄の前廢帝や叔父の明帝に警戒されて、すべて加冠のまえにこの世をさつている。だが、この景素は文帝の七男・建平王劉宏の子で、権力の中枢からややとおい場所にいた。そのため、なんとか目をつけられることなく、いきのびることができたのだった。彼は、父の劉宏が二十五歳のわかさで病死したあと、その後をついで建平王となつていった。

この時期、文帝の息子や孫たちは、たがいに殺戮しあつたので、宋室ではすっかり人材が払底していた。文帝の孫世代では、前廢帝劉子業が十八歳で明帝にころされたあとでは、十五歳といえども、唯一の成長した人物で

あつた。

さらに、この景素という皇子は、詩文がすきな性分であり、江淹のような文筆の士をこのんでいた。彼の本伝にも、

劉景素（建平王）は詩文や書籍をこのんだので、才義の士を招集した。そして、みずから膝を屈して礼儀た
だしく応接したので、景素は名譽を手にいれたのである。

とある（『宋書』劉宏附景素伝卷七二）。すると景素も、詩文に造詣があつたはずであり、江淹の文才はじゅうぶ
ん認識できたのだらう。すると江淹は、「才義の士」のひとりとして、広陵にあつた彼の幕府へむかえられたも
のとおもわれる。

くわえて、江淹はこの劉景素と、これ以前に面識があつたようだ。以前、江淹が家庭教師として子真に五経を
教授したとき、景素も机をならべていた可能性がたかい（前述）。そうかんがえれば、景素へのすばやい仕官も
了解しやすくなる。たぶん、主君（子真）に死なれた江淹をみて、景素が声をかけてくれたのだらう。皇室の貴
公子からかく遇され、寒門出身の江淹はたいへん感激したはずだ。

ところが、その翌年（泰始三年）のことと推定されるが、二十四歳の江淹に、とつぜん絶体絶命の危難がふり
かかった。彼の「自序」によると、

私はわかいころ、才気ぬきんで世俗と一線を画していた。そのためか世人に嫉妬され、賄賂をとつたとぬれ
ぎぬを着せられて、罪にとわれそうになった。

という事態になり、獄中にとらわれてしまったのである。この江淹、「深沈にして遠識有り」という慎重さが取
り柄であり、おのが言動にはじゅうぶん注意していたはずだ。にもかかわらず、彼は獄中の身の上となつてしまつ

たのだった。

この「賄賂をとった」という罪状が、あたっていたのか、いなかったのかは、現在ではしよせんわからない。ただ、当時は陰悪な世相であり、皇族や重臣であっても、すぐころされることがおかつた。そうした世の中であれば、獄中の江淹、自分のことき下っぱの弁明など、だれも本気で耳をかたむけてくれまいと、絶望的な気分になったことだろう。

そこで彼は、乾坤一擲の勝負にでた。主君の劉景素にむけ、獄中で弁明書をつづつたのである。文学ずきな景素だったら、自分の弁明書を真摯によんでくれるかもしれない。こうおもって、弁明書の執筆に一縷の望みをかけたのだろう。そうしてかきあげたのが、「詣建平王上書」という上書だった。この上書は、結果的に彼の若年期の代表作となり、『文選』にも採録される名篇となったのだった。

この上書、たいへん特徴的な内容を有している。

第一に、無罪であることの論証をいっさいせず、「冤罪をこつむつた自分がいかに無念か、いかにかなしいかを、ひたすら強調するだけなのである。通常だったら、詳細な事実関係を縷述して、自分の無実を証明しようとするところだろう。しかし江淹は、そんなことはしなかつた。ただ旧時、自分とおなじように無実の罪でくるしんだ古人の事例を、列挙しただけなのである。

まず、冒頭をしめそう。

むかし鄒衍が胸をたたいて冤罪をかなしめば、夏でも燕地に霜がおりました。また斉の寡婦が無実を天にうつたえれば、大風が斉王の台をおそいました。私は、この話を書物でよむごとに、いつも書物をおいて涙をながさないではおれません。それというのも、土に不変の信念があり、女に不朽の行いがあつたとして

も、それでも「郷衍のように」誠実でありながら疑念をもたれ、「寡婦のように」貞潔でありながら汚名を着せられることもあるからです。

ですから、丈夫や義士らは死地におちいっても、おのが命をかえりみませんが、それはこの冤罪をそそぎたいがためなのです。

ここでは、まず郷衍と斉の寡婦の故事を提示する。彼らは、汚名を着せられることをかなしんで、冤罪をそそぐとした、という。いうところは、自分（江淹）もおなじなのです、ということだろう。江淹は以下、冤罪にくるしんだ古人の事例を、えんえんとつづけてゆく。後半からも一節をしめそう。

私は「つもる中傷は金をとかし、つもる讒言は骨もけずる」ときいております。ふるくは直不疑が金をぬすんだとされ、ちかくは第五倫が不義の汚名を着せられました。この二人でさえそうでしたから、私「ことがどうして冤罪をまぬがれましょうか。むかし上將が辱めをうけた例として、絳侯の周勃が獄につながれたことがありますし、また名臣が恥をこうむった例として、司馬遷が蚕室にくだった場合があります。私ごときは、なにをかいわんやです。

この部分でも、中傷や讒言をうけて、獄につながれた古人の事例を列挙している。前漢の直不疑はこうでした、後漢の第五倫はああでした、前漢の周勃、司馬遷の場合はしかじかでした——と。江淹は、かく古人の事例をあげつつ、最後に、わたくし淹も彼らとどうよう、いま獄中で無実の罪にくるしんでおります。どうかお助けください、と憐れみを乞っているのである。

第二に、この上書は、一篇全体が、鄒陽「獄中上書自明」の模擬作なのである。前漢の鄒陽、彼もさかのぼること六百余年まえ、江淹とおなじように讒言によって獄中にほうりこまれた。そして江淹とおなじように、無実

をつつたえる上書をつづった。その鄒陽上書の内容が、やはり事実関係をのべて無実を立証するのではなく、故事を列挙して、自分の苦衷をつつたえるものなのである。そして、さらに重要なことは、鄒陽はその上書が功を奏し、ぶじ無罪放免をかちとることができたのだった。

つまり江淹は、そうした縁起のよい鄒陽の前例を模して、自分の「詣建平王上書」をつづったのである。こうした叙しかたをすれば、鄒陽とおなじく、自分も成功するかもしれない。文学ずきな景素のことだから、そうした鄒陽の事例もしているはずだし……等々、さまざまな計算をしたうえで、江淹はこの模擬ふう上書をつづったのだろう。

結果的に、この江淹上書は、おおきな成功をおさめた。この上書をよむや、十六歳の劉景素は即日、江淹を獄中から釈放してくれたのである。くりかえすが、この上書は、詳細な事実関係によって、無実を立証したものである。ただ「古人の甲はこうでした、乙はああでした」と叙しただけなのだ。それゆえこの上書では、江淹の無実が立証されていないのである。だが、そうではあっても、劉景素は江淹を釈放してくれたのだった。では、なぜ景素は江淹を釈放してくれたのか。それは、劉景素が江淹の無実を確信したからでなく、上書の能文ぶりに感心し、「こいつは自分の役にたちそうだ」とおもったからだだろう。

じつさいこの上書は、修辞的にもきわめて高度なレベルの美的文章でつづられている。たとえば、右の「私はつもる中傷は金をとかし」云々の原文をしめせば、

下官聞、
 積毀銷金、
 遠則直生、
 取疑於盜金、
 彼之二子、
 猶或如是。
 況在下官、
 焉能自免。

積讒磨骨。

近則伯魚被名於不義。

昔 上将之恥、絳侯幽獄、至如下官、当何言哉。

名臣之羞、史遷下室。

夫 魯運之智、辞禄而不返、子陵閉関於東越、亦良可知也。

接輿之賢、行歌而忘歸、仲蔚杜門於西秦。

というものだ。対偶のおおさは一目瞭然であるし、また傍点を付した箇所は、過去の事例、つまり典拠をふまえたものだ（出典は省略）。こうした行文は、当時の水準をはるかに凌駕する、高水準の文章だといつてよい。

この景素は、右でもものべたように、詩文に造詣をもった若者であつた。そうした彼なので、この江淹上書がいかに卓抜した行文であるかが、よくわかつたのだらう。さらに、なんの資料もない獄中において、さつと鄒陽の上書を模し、また故事を列挙した物しりぶりに、ほほうと感心したかもしれない。

こんな有用な人物を、獄中でくちはてさせる手はない。ここで自分が獄中からだしてやれば、きつと恩に感じて、自分のために名文をつづてくれるはず。また、かかる若者を釈放してやったことが世間にひろまれば、自分の明君としての評価も、もっとたかまってくるにちがいない。聡明だつた景素は、おそらく頭のなかでこうした計算をしたのだらう（あるいは周辺の者の入れ智恵も、あつたかもしれない）。

さらに、この上書が無実を立証しようとして、くわしい事実関係の釈明をしたりせず、ひたすら憐れみを乞っている姿勢も、またこのましく感じられたにちがいない。景素にとつて、江淹が無実であるかどうかなど、あまり興味はないし、正直どうでもよかった。ただ、自分の役にたつか、忠実にはたらいってくれるか、それだけが重要だつたのである。その点、へたに抗弁せず、ひたすら憐れみを乞う姿勢は、なかなかかけっこうだ。こうした人物だつたら、きつと屁理屈をこねず、いちずに奉仕してくれるだらう。こうしたことが、即日釈放ということに

つながったのだとおもわれる。

以上、江淹を釈放した景素の心理を私なりに推測してみた。もし、江淹がこうした景素の心の動きまで計算して、「詣建平王上書」をつづっていたのなら、彼はまさに、希代の「深沈にして遠識有」る男だったことになる。だが私は、さすがにそこまでは、江淹もかんがえていなかったらうとおもふ。

まず、高度な修辭的行文によつて上書をつづったのは、それが自分の命運を左右する文書である以上、とうぜんのことだとせねばならない。「この上書で自分の運命がきまる」とおもったら、だれでも、一世一代の名文をつづらうとするはずだ。

いっぽう、ひたすら憐れみを乞ふ姿勢も、彼のごとき寒門出身の若造だったら、とうぜんこうなつたはずだ。くだくだと弁明したり主張したりしても、主君からうつとおしがられるだけなのは、わかりきつたことである。それゆえ、へたな自尊心や矜持はすてさつて、ひたすら憐れみを乞ふとしたのは、江淹のごとき立場であれば、むしろ自然なことであつたらう。

かくかんがえてくれば、江淹が上書によつて釈放されたのは、かなり偶然的要素がつよかつたというべきだろう。要は、運がよかつたということだ。ただ、その幸運をよびよせたのは、やはり彼の文辭能力だつたといわねばならない。彼が、よむにたえぬ悪文しかかけなければ、こうした幸運はよびよせられなかつたのだから。やはり「芸は身をたすく」だつたのであり、江淹の場合は、卓抜な文辭能力がその「芸」だつたのである。

かくして江淹は、若年時のおおきな危機をのりきつた。彼にとつて、この下獄と上書による釈放とは、貴重な教訓となつたはずだ。このにがい経験から、彼はどんな処世上の、また文学上の教訓をえたのだろうか。私は、江淹はつぎの三つのことを、まなんだのではないかとおもふ。

一つめは、この世をいきぬくためには、つよい側につかねばならぬ、ということである。自分が釈放されたのは、ひとえに建平王さまのご意志によるものだ。建平王さまが私の上書を、よしとお認めくださったので、私は出獄できた。やはり権力をもつた者はつよい。とすれば、有徳者だとか清廉の士だとか、そんな者などはどうでもよい。権力をもつ者、そうした人物にこそお仕えしよう。そうでないと、自分の命は保障されないぞ——江淹はこうおもったことだろう。じつさい、江淹はこれ以後、この「つよい側につけ」を処世のモットーにしていたのである。

二つめは、自分は詩文の能力を生かしてゆくべきだ、ということである。今回たすかったのは、無実が立証できたからではない。自分がうまい文章（詣建平王上書）をかき、その腕前がみとめられたからだ。ということは、詩文の腕がたつしゃだったら、役にたつ男だと評され、命も保障され、立身もできるということだろう。将来、自分が立身してゆく捷徑は、この詩文の腕をみがくことにある。これを武器として、以後の人生をわたっていこう——こう決意したことだろう。それゆえ、この下獄の経験こそが、文人としての江淹を誕生させた、といってよいかもしれない。

じつさい、これ以後の江淹は、じつにおおくの詩文を創作していった。建平王のための教令や章表など、公用の文はいうまでもないが、詩賦や書翰などの文学的な作も、積極的につくった。そして文人としての評価を、たかめていったのである。

詩賦や書翰の類は、立身とは関係がないとおもわれるかもしれない。しかし当時では、政治的公文文だけでなく、こうした詩文の創作も、文人としての価値をいやますものであった。「あいつは、公文文がうまいが、詩賦のほうもよくかける。なかなかできる男だ」、かく評されてこそ、立身の道はおおきくひろくはずだ。江淹はこ

うおもって、意欲的にいろんなジャンルに手をそめていったのだろう。

三つめは、詩文をかくさいは、オリジナルでかくより古典の力をかりる、具体的には古典を模してかいていたほうがよい、ということである。獄中で上書をかくとしたとき、江淹はとっさに鄒陽上書を模した。博学な彼には、それがかきやすかったからだ、結果的に自分の博学ぶりも披露できたので、たいへんうまいこといった。こうしたことから、江淹はおもったのだろう。寒門出の自分が文章をつづり、なにをどう主張しようとも、なかなか本気ではよんでもらえない。とすれば、自分のような立場の者は、古人の詩文の枠ぐみや古典の典故をかり、その笠のしたで、おのが主張をしたほうが好都合だ。そうすれば、すこしは注目して本気でよんでもらえるし、また自分の博学ぶりも了知してもらえらるだろう——と。

これ以後、江淹が詩文をかく場合、「自分はこうおもつ」という書きかたでなく、古典模擬や典故多用のスタイルに依拠して、ものをいうことがおこなった。地位のひくい者が詩文をつくって、なにかを主張しようとする場合は、そうした手法をとったほうが効果的だったからである。くわえて博識の江淹には、そうした書きかたのほうが、かきやすくもあつたのだろう。かくして江淹の、模擬を重視したり、典故を多用したりする作風が、この時期から本格化してきたのだった。

さて、その後の江淹にかえろう。獄から釈放してもらったあと、彼はどこでどうしていたのか。「自序」によると、つぎのようにある。

私は「泰始四年（四六八、江淹二十五歳）の春に、南徐州刺史の桂陽王劉休範（文帝の子）によって、秀才に推挙された。ついで「同年の秋」対策の試験に合格したので、巴陵王劉休若（やはり文帝の子）の左常侍右軍にな「り、王にしたがって湘州にい」った。

さらに「同五年に建平王さまのもとにかえり、同七年には「主簿となり、何年にもわたって客分として遇していただいた。王はいつも、文学の士として私をもてなしてくださったのである。

この「自序」には、具体的な年代はしるしていないので、私が諸資料を勘案しつつ、「一」のなかに時期や年齢をおぎなっておいた（以下もおなじ）。これによると、泰始四年から五年にかけての期間、江淹は秀才推挙、対策及第により、巴陵王劉休若に左常侍右軍としてつかえ、湘州まで赴任していったのだった（もつとも、この湘州赴任、当初は赴任先がなかなかきまらなかったうえ、さらにきまっただのが「中央の朝廷でなく」辺鄙な湘州だったので、江淹はあまりうれしくなかったようだ。第七章にひいた「報袁叔明書」や「本稿にはひかぬ」「哀千里賦」を参照）。

ただ、巴陵王につかえた時期は、結果的にみると、短期間でおわった。江淹は一年後、すぐ湘州をさつて、ふたたび景素のもとにかえっているからである。移動の時間もかんがえると、湘州で仕官したのは、ほんの数か月だけだったろう。かくみていると、江淹は獄から釈放されたあと、一時は巴陵王につかえたものの、基本的には劉景素のもとにとどまりつづけていた、とみなしてよさそうだ（もちろん、一時的に故郷にかえつたりもしていただろう）。

とすると、劉景素は江淹に、「当時はかなり形骸化していたが」秀才推挙、対策及第という栄誉をあたえ、箔はくをつけてやるうとしたのではないか。さらに、江淹を下獄させた関係者も、まだ周辺にのこっていることだし、ここはいったん、自分のそばからはなしたほうがよい、という判断もあったのだろう。それゆえ、巴陵王に短期間つかえた件は、臨時的な派遣のようなものだったろうとおもふ。

じつさい、江淹が元徽二年（四七四、江淹三十一歳）にかいた「被黜為吳興令辞箋詣建平王」では、「私は王

の膝下に参じること八年、お仕えして九年となります」（原文は「伏早九載、齒録八年」とつづっており、秀才にあげられたことや巴陵王につかえたことなど、なかったかのような書きかたをしている。したがって実態としては、江淹は泰始二年（四六六、二十三歳）から元徽二年（四七四、三十一歳）にいたるまで、あしかけ九年にわたって、劉景素の膝下にあったのだろう。つまり彼は、それだけ劉景素から厚遇されていたのだらうと、私は推測する。

わかい江淹、こうした劉景素の殊遇に、たいへん感激したようだ。なにしろ、獄中でかいた上書をみとめて釈放してくれたうえ、寒門の自分を文学の士として遇してくれたのである。江淹からすれば、景素は英明であるとともに、文学にも理解がある主君にみえたことだらう。それゆえ江淹は、自分より八歳わかい劉景素に、理想の主君像（「つよい側」）にあり、また文学にも理解がある主君）をみだし、人格的にも傾倒していたのだとおもわれる。それが、あしかけ九年にもおよぶ君臣関係となったわけだ。

かくして江淹は、劉景素のために懸命に忠誠をつくそうとした。景素が自分の文辞能力をかつてくれるとすれば、公用文の執筆はもちろん、詩文の方面でもはりきらざるをえない。江淹は劉景素につかえた九年間、呉興、湘州、荊州、京口など、景素の任地へつねに随行して、景素のしたでおおくの詩文をつくり、また公用文を代筆したのだった。そのなかの一、二を紹介しておこう。

泰始六年（四七〇）、十九歳の劉景素が湘州刺史となって赴任するや、二十七歳の江淹もこれに随行した。その途次、神仙がすむとされる廬山を経由したが、そのさい、景素とともに廬山の香爐峯にのぼった。そして頂上にいたるや、眼下の景色をながめながら、まず劉景素が詩（佚）をつくり、ついで江淹もそれに和したのである。それが、つぎにしめす「從冠軍建平王登廬山香爐峯詩」である。これは『文選』にも採録されており、よくしら

れたものとなっている。

神仙の広成子は薬壺を大切にし

淮南王劉安は金丹の書をこのんだそうです

この香爐峯には鸞や鶴がとびかい

往来する者はみな神仙ばかりです

仙草はいきいきと生じ

仙樹は青あおとしげっています

あかい霞がおりてきてたちこめ

白雲がたちのぼって空がかすんでいます

峯の中腹には虹がかかり

下方をみると流星が目にはいりました

奇怪な峯の奥座までゆかずとも

耳目をおどろかすようなことばかりです

日輪は長沙の渚にせずみゆき

重雲は万里のむこうにひろがりま

蘭のうえに座せばいろんな想いがおこり

風にふかれれば沈黙のうちに情がわいてきます

松栢のしたにすむ隠者をみならおうとしますが

広成愛神鼎

淮南好丹經

此峯具鸞鶴

往来尽仙靈

瑶草正拿絶

玉樹信葱青

絳氣下縈薄

白雲上沓冥

中坐瞰蜿蜒

俛伏視流星

不尋遐恠極

則知耳目驚

日落長沙渚

曾陰万里生

籍蘭素多意

臨風默含情

方学松栢隱

世俗の利得をおいかけろ自分がはしくおもわれます

羞逐市井名

建平王さまの詩に和することができましたが

幸承光誦末

これからも王の末尾にくわえていたいただきたいものです

伏思託後旌

この詩は、香爐峯からながめた情景描写が、後世たかく評価されたようだ。たしかに「瑶草」云々の聯は、神仙の里として有名な廬山にふさわしい描写だし、また「絳氣」云々の聯も、「絳氣↕白雲」の対応がすばらしい。さらに「日輪は長沙の渚にしずみゆき 重雲は万里のむこうにひろがります」以下の叙景は、後代の詩話でしばしば、すぐれたものとして好評を博している。

ただ、私が注目したいのは、詩中の叙景の美でなく、神仙関連の発言のほうである。たとえば江淹は冒頭部分で、広成子や淮南王劉安の名をだし、さらに、後半で「松柏のしたにすむ隠者をみならおうとしますが 世俗の利得をおいかけろ自分がはしくおもわれます」と、隠逸をのぞむかのようなことばを発している。

だがこれは、うわつつらだけのポーズにしか、すぎないだろう。このときの江淹は、立身意欲にもえた二十代なかばの青年である。かつて母とともに、「侍中に立身できればいいなあ」と念じていたこと（前出）を想起しよう。そんな寒門の青年が、出世の入り口にたちながら、隠逸をねがうことなど、あるはずがない。

それゆえ江淹の本音は、隠逸などではなく、末尾の「建平王さまの詩に和することができましたが これからも王の末尾にくわえていたいただきたいものです」にある、とすべきだろう。つまり江淹の創作意図を、私なりに推測してみると、自分は立身したい。神仙や隠逸などには、まったく関心はない。だが、神仙や隠逸は最近の風潮でもあるので、体裁よくそれらしい詩句をつづつておこう——ということだろう。

もう一篇、みてみよう。右の詩をつくった翌年の泰始七年（四七二）、湘州刺史だった劉景素は、今度は荊州

刺史に任ぜられた。とうぜん江淹も随行した。荊州に到着するや、劉景素はすぐ江淹に命じて、荊州の臣僚に発する教（命令）をつくらせた。それが、「建平王散五刑教」「建平王聘隱逸教」の二篇である。世にひそむ隱者をまねこうとする後者の教の文は、かつて拙著『六朝書翰文の研究』で引用したことがあるので、ここでは、前者のほうを紹介しよう。

この「建平王散五刑教」は、荊州刺史に着任した建平王（景素）が、「荊州の刑罰をかるくするぞ」と布告したものである。標題の五刑は、もとは五種の刑罰の意だが、ここでは刑罰一般をさすのだろう。

府州国紀綱が「荊州刺史の劉景素にかわって」という。

私はあやまって朝臣となっているが、いま、朝廷の命令を荊州の臣僚たちにつたえるぞ。

私は朝命によって、この荊州の長官となり、うるわしの当地へやってきたばかりである。ついては、いかに善政をなすべきかと、寝もやらず頭をいためている。この旧楚の地は広大であり、また以前の鄆の地でもあつて民草がおおい。さらに江水が枉渚をめぐり、魯陽の山がそびえる要地とあれば、なおさらどうすべきかと、頭をいためているしだいである。

ところが昨今、このあたりは、なぜか農地に雑草がはえ、田畑もあればてている。また「税收不足のため」財政は逼迫し、監獄も收容しきれぬほどだという。私は、どうすれば当地の風紀をよくし、道義をあらためられるか、よくかんがえてみた。

ついては、五年以下の罪で、まだ審理しておらぬものについては、一律に罪にとわぬこととした。文武の役人で弾劾された者も、すべて旧職にかえらせることにする。関係部署の者は、旧法によりつつ寛大に処理し、私の思いにそうようにせよ。

府州国紀綱。

吾謬繼朝組、乃班恩命。

重渥華藩、永言政惠、良攬情寐。況

旧楚地曠、

水帶枉渚、

踐龍懋甸。

前鄧氓殷、

山匠魯陽。

自頃「田邑榛故、

財賦方屈、思所以

厚風厘俗、

封井萊蕪、

犴獄実繁。

変瑟改調。

自五歳形已下、未運台者、一皆原遣、文武彈坐、亦悉復職。主局依旧施散、薄紆此懷。

冒頭に「府州国紀綱」という句が布置されている。ここの「府州国」は、荊州刺史こと劉景素の軍府をさし、

「紀綱」は主簿の官、すなわち江淹自身をさす。つまりこの教（命令書）は、紀綱の官たる江淹が、荊州刺史の

劉景素の意を体しつつ、荊州の属僚に「代理で」命令をつたえているのである。

教は実用文だといつても、江淹は手をぬいたりしない。駢体を多用した行文でつづり、句形も四言を基調とし

た整然たる文章である。また「水帶枉渚↕山匠魯陽」は荊州の山と水とを、そして「厚風厘俗↕変瑟改調」は、

政治の実務と彈爭の比喩とを、それぞれ対応させたもので、なかなか巧妙な対偶だといえよう。

内容的にも、当地のことを「華藩」「懋甸」などと、美麗なことばで表現したうえ、自分（劉景素）は「いか

に善政をなすべきかと、寝もやらず頭をいためている」とのべて、新刺史の仁愛ぶりを強調している。こうした

行文が前半にあるからこそ、後半の寛刑を宣言することばと、スムーズに連結するのだろつ。

かくみていると、この文章は、荊州の風俗改善や刑罰輕減に尽力しようとする、新刺史のあっぱれな明君ぶり

を示唆した、みごとな教だといわねばならない。こうした教をださせた劉景素、まだ二十歳の若者だったはずだ

が、たしかに賢明（あるいは狡知）な人物であつたらうとおもわれる。

ただ、この教に関していえば、賢明だったのは、景素だけではなくたのではない。私は、ここでの江淹は、主簿として庶務を統轄していただけでなく、刑罰をゆるくする政策それじたいにも、ふかく関与していたのではないかとおもふ。ひょっとしたら、この教の発布したいが、江淹の発案、そして献言によったものだったのかも。その意味で、この劉景素につかえていたところが、江淹にとって、もっとも得意で、意気軒昂な時期だったのではないかとおもわれるのである。

四 吳興令への左遷

ところがである。その敬愛する劉景素が、「江淹からみれば」危険な異図をもちはじめたのだった。現天子である後廢帝を廢して、自分が帝位につこうとしたのである。これまで宋室では、劉劭、劉駿（孝武帝）、劉義宣、劉彧（明帝）、劉子助らの皇族が、おなじような異図をもって行動をおこした。ある者はみずからの野心によって、ある者は周辺の者にたきつけられて。そして、ある者は勝利して帝位につき、ある者はやぶれて殺害されたのだった。

景素は賢明な人物だったので、こうした先人たちの行動やその結末も、よく知っていたはずである。よくしつたうえで、やはり先人とおなじことを企図してしまったのだ。危険だとしりながら、それでも異図をもち、実行にうつしてしまうというのは、個々人の賢不賢などとは関係なく、軍人出身の劉一族に通底するあらざる気性が、かくしからしめるのだろうか。

かくして劉景素も異図、つまり後廢帝への叛意をいだくようになった。その経緯を、やはり江淹「自序」によつ

て説明すると、つぎのようである。

宋末には変事が多発し、皇室の人間さえ、いきてゆくのが困難だった。そこで建平王さまは、羽檄を發して天下から兵をあつめ、つかのまの幸運をもとめようとされたのである。

私は冷静にお諫めし、世の成敗の理をかたった。そして、たびごとに「殿下が宗廟の安泰をもとめることなく、側近の計略にのったりすれば、「亡国して」麋鹿が姑蘇の台で野宿するような状況におちいりましよう」ともうしあげたのだった。だが、王は私の諫めをきいてくれぬうえ、私の忠誠心までお疑いになられたのである。

この「自序」の記述には、いささか解説が必要だろう。

まず「宋末に変事が多発し」云々というのは、明帝（在位四六五―四七二、享年三十三）崩御後に即位した後廢帝劉昱が、暴戾をきわめたことをさす。この劉昱、即位したときは、わずか十歳だった（在位四七二―四七七）。さすがに当初は、周囲の監督もあつて、猫をかぶっておとなしくしていた。ところが、一、二年たつと地金がでてきて、すさまじい殘虐ぶりを發揮しはじめたのである。

彼は天性の殺人狂だった。伯父の孝武帝や父の明帝も殘虐だったが、彼らは帝位や権力をめぐり、猜疑や不信にとらわれた事情もあり、それなりに理由が説明できるものだった。ところが、この後廢帝の場合は、説明することばがみつからず、もう病的な殺人嗜好者だったというしかない。

彼の殘虐ぶりは、『南史』の後廢帝紀にたいへんくわしい。凶器をもった部下をしたがえて、毎日のように市中をであるき、であつた者がいれば、かたっぱしから矛でつきころさせた。男女でも犬馬でも牛驢でも、まぬがれたものはいなかった。おかげで日中から門をしめ、道をゆくひとがいなくなった。彼は、ひとが刺殺され、そ

の死体から鮮血がながれでるのをみると、たいへんよろこんだという。

自分への「廷臣の阮佃夫らによる」暗殺計画が発覚したときは、もっとひどい殺しかたをした。宮門まえに犯人をすえおき、みずから馬車を駆って轢殺^{れきう}したり、また刺殺したあと、死体をこまかくきりきざんだりもした。にんにく臭のする者をころしたときは、その腹をさいて、腹中ににんにくがあるかどうかしらべた——等々。当時の史書は、こうした凶行の記述に熱心で、ほかに鉗鑿錐鋸などの武器を手からはなさかった、それらをつるって「撃腦、槌陰、剖心の誅^{めづ}を為すこと、日に数十有り」だったなど、くわしく叙している。だが、こうした事がらについては、もう解説は略すことにしよう。

こうした凶行のかずかずを、現在ふうにいえば小学高学年や中学生にすぎぬ後廢帝が、日々くりかえしたのである。なぜ、こんな残虐なしうちをおこなったのか。あまやかされたからとか、周囲がそのかしたとか、わかくて自制がきかなかったとか、いろんな理由がつけられるかもしれない。だが、やはり天性の殺人嗜好者だったから、というのが、いちばん理にかなった説明だろう。皇室のなかに、こんな年わかい殺人狂があらわれ、しかもその人物が天子になっているのである。この宋末期が、いかに殺伐で恐怖にみちたものだったが、想像できるというものだ。

そうした後廢帝の凶行がくりかえされるや、劉景素への期待がたかまってこざるをえなかった。劉一族があまりにもはげしく殺戮しあつたので、宋室にはもう彼以外に、まともな人材がいなくなっていたのである。「南史」の景素本伝には、

少帝（後廢帝のこと）即位するや、失徳多し。景素専ら上流に據^よれば、威^みな此に因りて事を挙ぐるを勸む。とある。「上流に據^よれば」というのは、このとき景素は長江上流の荊州にいて、建康とへだたった地にいたこと

をいう。だから周囲の人びとは、挙兵するのに都合がいいですよ、と蹶起をそのかしたのだろう。

当初、景素は慎重で、そうした意見には心をうごかさなかった。ただ、後廢帝の凶行と自分への期待を耳にするや、しだいにその気になってしまったのだった。右の「羽檄を發して天下から兵をあつめ、つかのまの幸運をもとめようとされた」というのが、それだろう。端的にいえば、後廢帝をころして自分が踐祚しよう、という野心がきざしてきたのである。

丁福林『江淹年譜』はその時期を、後廢帝が即位した泰豫元年（四七二）、景素二十一歳、江淹二十九歳のときとする。だが『南史』後廢帝紀によれば、即位当初の後廢帝は、「位を嗣ぐに及ぶも、内は太后を畏れ、外は大臣を憚りて、猶お未だ志を肆にするを得ず」だったという。すると、後廢帝が凶行をくりかえし、景素が異図をいだくようになるのは、もう一、二年あとのころだったのではないかと、私は想像している。

ところが、こうしたとき、江淹は景素の野心に反対し、自重するよう忠告したのだった。「私は冷静にお諫めし、世の成敗の理をかたつた」云々がそれである。劉子鸞や劉子真が殺害されたのを見てきた江淹は、景素の野心「とその結果」を心配したのだろう。もし臣下たちの勧めをいれて謀叛をおこせば、麋鹿が姑蘇の台で野宿するような状況、すなわち国が荒廢するような事態におちいりますよ、と。しかし、劉景素は江淹の諫めをきかず、逆に江淹を、自分のいうとおりにせぬ不忠者であると、うたがうようになったのだった。

それにしても、江淹はなぜ景素に自重するよう、忠告したのだろうか。それはやはり江淹が、当時の政治状況を正確に分析していたからだろう。

というのは、こんな凶暴な後廢帝であっても、朝廷には、なお支持する人びとがいたからである。たとえば後廢帝の母、陳氏の親戚や楊暉長（のち、蕭道成の配下にころされる）や阮佃夫（のち、後廢帝殺害をもくろんで

逆にころされる)らの廷臣たちが、それであった。彼らは、凶暴だが暗愚でもある後廢帝の陰にかくれて、自分たちが専横をふるいつづけたかったのである。江淹からみると、景素の真の敵は後廢帝などではなく、裏であまじい汁をすっている陳氏の親戚や廷臣たちだったのであり、彼らはなおじゅうぶんの力を有していた。

もし劉景素が朝廷に反旗をひるがえしたら、おそらく彼らは一致して、景素の軍を鎮圧しようとするにちがいない。そうすれば、景素の拳兵が失敗に帰するのは必定だ。江淹は、後廢帝の背後にいる廷臣たちの力を、なおなどりがたいと、正確にみぬいていたのだらう。だから自重すべしと忠告したわけだ。こうした判断の正しさは、後日に証明されることになる。

それにしても、江淹のこつした情勢分析は、じつに的確ですばらしいものだといつてよい。こつした分析こそ、後日の先見の明(崔慧景の乱と蕭衍軍の接近のとき)の先駆をなすものだらう。いったい江淹は、なぜかかる卓抜な情勢分析ができたのか。それはもちろん、彼の「深沈にして遠識有り」なる資質のゆえだらうが、問題とすべきは、なぜ江淹だけが、そうした「遠識」を有することができたのか、ということである。

私見によれば、その理由は三つあるようだ。

第一に、心理学などという、樂觀バイアスをもっていなかったことである。たとえば、劉景素やその周辺は、「自分は宗室の有力者なので、拳兵すれば、味方がたくさんでくるだらう」とおもってしまいがち。このように彼らは、「……の点で有利なはず」「……も味方してくれるだらう」などと、状況を樂觀的にとらえ、危険や困難を軽視してしまいがちなのである。その結果、ややもすれば「拳兵したら勝利するだらう。いや、かつにきまっている」とおもいこんでしまうわけだ。

それに対し、ふけばとぶような寒門出の江淹は、なにごとにおいても、他にたよらず、自力で事態にたちむか

わねばならなかった。そのため、「……してくれるはず」「……であってほしい」のような樂觀バイアスをもたぬのはもちろん、「……すると恥だ」「道理として……すべきだ」などの世間体も気にしなかった。おかげで、偏見や先入主にとらわれず、冷静に事態を把握できたのだろう。

第二に、「つよい側につけ」の生きかた（先述した）も、功を奏したのだろう。江淹はわかくして、自分がかえた幼君が、天子から殺害されたのをみた。これにより、権力をもつ者のつよさと、またぬ者のよわさを、いやというほど思いしらされたのだろう。この経験により、へたな正義心や同情などにはとらわれず、だれがつよいのかを的確にみぬき、そちら側につくようこころがけた。この「つよい側につけ」の生きかたが、彼をより安全な方向にみちびいていったのだろう。

第三に、寡欲な性分も、彼を危険からおざけたのだろう。江淹は欲がつよくなく、「この世に生まれては、身の丈にあつた暮らしをするのが、いちばんたのしい」とおもつタイプだった。仕官しても、ただ卿の地位と二千石の禄があればよい、という程度で満足できる男だった（これも先述）。それゆえ立身の間でも、あまり高望みして、おおよけどすることがなかったのである。

こうした傾向や性分によって、江淹は冷静な情勢分析ができたのだろう。もちろん、こうした特質は、一朝一夕にできあがつたわけではない。彼はわかいころから、辛苦にみちた日々をおくってきた。そうした経験が、彼の志向や性分とうまく合体したのだろう。それが、彼に時勢を正確にみとおす力をあたえ、やがて、卓抜な情勢分析や先見の明になっていったのだとおもわれる。その意味では若年時の辛酸が、彼の先見の明をみがいたといつてよいであろうか。

さて、話がすこしそれてしまった。景素が異図をもつた時点にかえろつ。その後、どうなったか。「自序」に

よれば、事態はつぎのように推移したのだった。

「秦豫元年、四七二、江淹二十九歳のとき、荊州刺史だった」建平王どのが南徐州刺史となり、朱方（京口）にうつるや、私も当地の鎮軍參軍事となり、また南東海郡丞を拝した。やがて建平王どのは、不逞の徒と日夜、謀議をこらすようになったので、私は災禍の到来を予想した。

そこで「元徽二年、四七四、江淹三十一歳のときに」「效阮公詩」十五首をつくって、性命の理を明確にしつつ、王に拳兵せぬよう諷したのだった。だが建平王どのは、これをお悟りにならなかった。それどころか怒りにまかせ、私を建安の呉興令に左遷されたのである。

これによると、荊州から京口にうつった景素は、不逞の徒たちと拳兵の謀議をこらすようになった。江淹はそこで、ある行動にでた。阮籍の「詠懷詩」を模した「效阮公詩」をつくって、婉曲に拳兵反対の意をつたえたのである。

この「效阮公詩」十五首は、現在までつたわっている。江淹としては、「詣建平王上書」で鄒陽上書を模したように、ここでも阮籍の「詠懷詩」にかりて、拳兵反対の意をつたえようとしたのだろう。「詣建平王上書」でうまくいったので、今回もうまくゆくはずとおもっていたに相違ない。

ところが、建平王は「お悟りにならなかった」（原文「王遂不悟」）のである。この「不悟」は、詩中の諷意に気づかなかつたのではなく、気づいたけれども翻意しなかったということだろう。この時期、この情勢のなかで、わざわざ詩をつくってたてまつる以上、ただの詩であるはずがない。くわえて、江淹はこの詩をつくる以前から、拳兵に反対していた。それゆえ景素は、「效阮公詩」に「拳兵反対の」諷意があることは気づいたのだが、それでも翻意することはなかった、ということだったのだろう。

ただ、景素は気づいたかもしれないが、不敏な私には、この「效阮公詩」のどこに、どう諷意が存しているのか、よくわからない。そこで旧時の批評家のご意見をあおぐことにしよう。するとたとえば、同詩第八首をあげてみよう。

むかし私は大梁の城壁にのぼり

西南のほう黄河をのぞみみたものだっ

いまは寒涼の時節で原野がひろがるだけ

風がつよく霜や露もおおいころだ

この仲冬の時期は真にものさびしく

日や月もよわよい光をはなつだけ

落葉があちこちでまいあがり

飛鳥がときどき空をすぎてゆく

広大な流れの南方で頭をひねってばかり

望郷をねがうのだがその術もない

仕官するまえの布衣にもどり

潁水のほとりをのんびり散歩したいもの

昔余登大梁

西南望洪河

時寒原野曠

風急霜露多

仲冬正慘切

日月少精華

落葉縱橫起

飛鳥時相過

搔首広川陰

懷歸思如何

常願反初服

閑步潁水阿

この第八首、例によって私は、阮籍「詠懷詩」のどの篇を、どういつうに模擬し、またいかに諷したものであるかは、よくわからない。ではあるが、清末の吳汝綸は、この詩は「詠懷詩」を模しつつ景素を諷したものであるとし、詩の各句につきのような解釈をしめしている（『漢魏六朝百三家集選』江醴陵集選より）。

まず、なかほどの「日月少精華」の句に対しては、朝廷の失徳をたとえたものだという。具体的には、後廢帝の暴戾によって日月も精華を少くした、ということらしい。また「落葉縦横起」句と「飛鳥時相過」句に対しては、「宗室の危懼を喻^{たと}う」という。すると、落葉がまいあがり、飛鳥がとびまわるのは、斉の宗室たる建平王ら（「落葉、飛鳥」）が、後廢帝の暴戾をあやぶんでいるようすを暗示する、というのだろうか。さらに末句の「閑歩潁水阿」に対しては、「許由の逃讓するを以て建平を諷す。亦た洗耳を以て自ら寄せるなり」とかたる。つまり許由は、堯帝が禪讓しようとしたのをきらうて、潁水で耳をあらったというが、その故事をふまえて、「建平王さまも許由にならうて、潁水で耳をあらうてほしい（「周辺がある拳兵の謀議を、やめてほしい」）と諷したものだ、ということなのだろう（以上、引用は『中華大典・魏晉南北朝文学分典二』六二四頁より）。

なるほど、そういわれれば、そんな気もする。私など、思いもしなかった解釈であり、中国の批評家の炯眼にはおそれいってしまった。おそらく景素は、こうした箇所に敏感に反応し、江淹の諷意をさとしたのだろう。私見によれば、江淹と景素の二人だけに通じる符丁みたいなものがあって、それで景素は、直感的に了解できたのだとおもわれる。

ところで、「自序」によると、この「效阮公詩」をつくったのが原因で、景素が「怒りにまかせ、私を左遷し、建安の呉興令に命じた」という。だが、実態としては、そうではなかった。この記述には省略があり、景素はべつの理由で、江淹を左遷したのである。それは、つぎのような事情であった。

この時期、たまたま南東海太守だった陸澄が、親の喪に服することになった。同郡の丞だった江淹は、その陸澄にかわって、自分がその後任につくべきだと主張した。だが、景素は江淹でなく、司馬の柳世隆にこれをあたせたのである。すると江淹はさらに、この地位に自分をあてるよう強要したので、景素はたいへんおこった。

そして人事の役人にいつけ、江淹を建安の呉興令に左遷したのだった（以上、『南史』江淹伝による）。つまり江淹は、しつこい地位要求によって景素をおこらせ、左遷されてしまったようなのである。

ただ私見によれば、この程度の地位要求は、小事にすぎない。さらにいえば、『效阮公詩』による諷諫も、それほど決定的なことではなかったろう。そうしたことよりも、以前から江淹が後廢帝打倒の計画に反対し、しつこく景素にいきがってきただけで、それが左遷された真の理由だったろうとおもふ。謀叛計画に前のめりになっていた景素は、江淹の挙兵反対をうるさく、また不快だと感じていた。そこで、この人事の要求を口実にして、江淹をおどけたのだらう。江淹のほうも、「景素が自分の献言をききいれてくれないので」気分上におもしろくなく、すこし片意地をはって、あえてつよく大守の地位を要求したということも、あったかもしれない。

こうして元徽二年（四七四）秋、三十一歳の江淹は、景素のいる京口をはなれ、建安の呉興の地に赴任することになった。これは完全に左遷というべき異動であり、辺地への追放を意味する。江淹はこれまで、九年のながきにわたって、年少の景素に近侍してきた。ときには恩義ある主君として、ときには英邁な皇子として、さらにはときには優秀な弟のごとく、近侍し、また親炙してきたのである。その景素によって、建安の呉興という人煙まれな、さいはての地へおいやられることになったのだった。

この追放は、江淹にとって、二重の意味で衝撃だったろう。

ひとつは、景素がこの自分でなく、あの「拳兵をそそのかす」不逞の徒どもをえらんだ、ということである。

江淹は、自分は景素から信頼され、重視されているとおもっていた。景素は年少ながら、自分をひきたててくれた恩義ある、そして賢明な主君である。その主君が、あやしげなとりまきに使喚されて、けしからぬ謀議をかさねている。そこで信頼あつきの自分が、お諫めもしあげた。ところが景素さまは意外にも、きく耳をもたぬ

ばかりか、この自分に呉興へいけとおっしゃる。なんということか。景素さまにとって、自分はその程度の臣下にすぎなかったのか。

もうひとつは、よりによって呉興という辺地へ左遷されたことである。すこし官位がさがるぐらいならまだしも、呉興へとばされるとは、江淹は予想だにしていなかったに相違ない。こんなはずじゃなかった。自分はここまで、景素さまからきらわれたのかと、江淹は痛恨の思いだったのだらう。そうしたためだらう、この時期の詩文では、この呉興異動を転任と称さず、「被黜」や「待罪」などの語でかたっている。

江淹は、おのが矜持をうちくだかれ、あらためて現実の厳しさをかみしめたにちがいない。「自分は建平王さまから信頼されている」という思いしたいがあやまちであり、樂觀バイアスだったのである。江淹は、自分で自分を「深沈にして遠識有」る性分であり、将来を見とおす眼力がある、とおもいこんでいたかもしれない。ところが、自分の将来については、見とおすことができなかったのである。

おもつに江淹、こうした衝撃がおおきすぎて、九年後の「自序」でも、事実を直書することができなかったのだらう。だからこそ「自序」では、「效阮公詩」で諷刺したので、建平王の不興をかってしまった。そのため建安の呉興令に左遷させられてしまった——というふうにしかなじなかつた、いや叙せなかつたのではないかとおもっているのである。

五 望郷の日々

呉興に左遷させられた痛恨の思いは、江淹におおくの詩文をつくらせることになった。この左遷のショックが、

彼の詩囊をげしく刺激し、結果的におおくの詩文がうまれてきたのだった。皮肉なことに、このあしかけ四年（江淹三十一―三十四歳）、実質三年の左遷の日々こそ、江淹の創造力がもっとも高潮した期間となったのである。この時期につくられた主要な作をあげてみると、

「賦」倡婦自悲賦、傷愛子賦、扇上綵画賦、去故鄉賦、泣賦、青苔賦、石劫賦、赤虹賦、待罪江南思北歸賦、翡翠賦、四時賦、麗色賦、水上神女賦、空青賦

「詩」清思詩五首、銅雀妓、遂古篇、無錫眞歷山集、無錫舅相送銜涕別、吳中礼石仏、赤亭渚、渡泉嶠出諸山之頂、遷陽亭、学魏文帝、応謝主簿騷体、游黄檗山、悼室人

「その他」草木頌、被黜為吳興令辞箋詣建平王

などである。おおくが、この左遷「と次章でのべる妻子の死」との関連でつくられており、とうぜんながら、悲痛な内容のもがおおい。

以下では、江淹の行跡を叙してゆくのをいったん中断し、三つの章にわたって、この期につくられた詩文をみわたしてゆく。それゆえ、しばらくは詩文の引用や分析がおおくなるだろう。そうした詩文の分析には関心がなく、てっとりばやく江淹の生涯だけ知りたいというかたは、これらをとばして「八 宋から齊へ」へすすまれてもかまわない。

まずこの章では、左遷の衝撃をつづつた諸作を紹介してゆこう。それは「去故郷賦」「被黜為吳興令辞箋詣建平王」「待罪江南思北歸賦」の三篇である。これらはいずれも、吳興左遷をきっかけとしてつづつたものだ。同種の作は他にもあるが、この三篇は、すこしずつ時間をおいてつくられており、江淹の心情の変化をうかがうのに、たいへん都合がよい。すなわち、吳興へむかう途中でつくられたのが「去故郷賦」、到着した直後につくら

れたのが「被黜為吳興令辞箋詣建平王」、そして吳興で一年すごしたところにつくられたのが「待罪江南思北帰賦」である。この三篇をかりに左遷三部作とよんで、江淹の心情の変化をうかがってゆこう。

まずは「去故郷賦」をみてみよう。

この賦は、左遷先の吳興にむかう江淹が、その途上でつくったようだ。したがって創作年は、元徽二年（四七四）の秋だとかんがえてよからう。そのためか、この賦をよむと、左遷をいいわたされたときの、なまなましいシヨックが、まだ篇中にうずまいていくかのように感じられる。

夕暮れにちかづき、日は吳山の丘にしずもつとしている。北風が草木をへしおって、紅の花々がふきとび、流水がおしよせて、緑竹がまばらになっている。私は香りよい桂枝（建平王）をこのむが、いまは周囲にみあたらず、月をかくす浮雲（建平王のとりまき）をきらうが、わが身は左遷の途上となっている。私は、なんとかおおきな谷をこえ、ふかい潭（ふち）をこえることができた。眼前には茫茫たる水が横たわり、きりたった山崖がつらなっている。黒雲が水辺をおおいつくし、草むす原野は天空につづくかのよう。

こうしたなか、私は故郷がみえぬことをかなしみ、郷里が彼方になったのをいたむばかりだ。川の中洲をこえてから冠をぬぎ、激浦（じよほ）にいたってから外套もすてしまった。蘆（あし）のさみしげなざわめきを耳にし、霜露がおりていることに気づいた。水辺にむかつて憂いを感じ、海浜で歳末もちかいと感慨にふける。旅途で書物をとつてもたのしいとおもえず、樽酒があつても、盃をもつ気にもならぬ。旅亭をでると客人をさけられるし、蘆辺をあふくとひとりになる。わが思いは纏綿としてやむことなく、旅愁はふかく高潮するばかり。趙の琴を弾いても涙がでてき、燕の笛をふいても悲しみがあふれてくるのだ。

少歌にいう。河辺の草はかれそうだし、江水の波はわたることができぬ。私は世間とはなれ独居している

が、かつて一顧くださった君子（建平王）にお報いしたいもの。このとき、霜が蕙を傷つけ風が芷草しそをくだき、平原はすでにくらく黄雲もわいてきた。私は、松柏のもとに埋葬されようと、世間の名誉はほしらぬ。河をわたるに橋がなかったら、千里の原野にわが思いを託すことにしよう。

重にいう。江南の杜蘅（江淹）は、色つやはおとろえても、その思いは、黄鹄の鳥によって佳人（建平王）につたえてもらいたい。酒杯を横において、むなく佳人をしたい、玉琴を奏したとて、だれにもきいてもらえぬ。高山をみると日はしずみゆき、涙がこぼれ手拭いはずぬれた。物見やぐらは安定していても、やがて螻蟻とともに塵と化してしまふのがうれしい。

日色暮兮、隱吳山之丘墟。

北風折兮絳花落、
流水散兮翠萼疏。
愛桂枝而不見、
悵浮雲而離居。

乃 凌大壑、

茫茫積水、
窮陰匝海、
越滄淵、
陵陵斷山、
平無帶天。

於是 泣故関之已尽、

出汀洲而解冠、
聽蒹葭之蕭瑟、
傷故国之無際、
入激浦而捐袂、
知霜露之流滞、
对江皋而自憂、

撫尺書而無悅、

去室宇而遠客、
情嬋娟而未罷、
倚樽酒而不持、
遵蘆葦以為期、
愁爛漫而方滋、
切趙瑟以横涕、

少歌曰、
芳洲之草行欲暮、
絶世独立兮、
報君子之一顧。

桂水之波不可渡。

是時霜翳蕙兮風摧芷、平原晚兮黃雲起。

寧歸骨於松柏、若濟河無梁兮、沈此心於千里。
不賣名於城市。

重曰、江南之杜蘅兮色已陳、願使黃鵠兮報佳人。

橫羽觴而淹望、
撫玉琴兮何親。

瞻層山而蔽日、恐高台之易晏、与螻蟻而為塵。

流余涕以沾巾。

この賦は、呉興への旅途をえがいている。それは、「黒雲が水辺をおおいつくし、草むす原野は天空につづく」ような道途であり、「趙の琴を弾いても涙がでてき、燕の笛をふいても悲しみがあふれてくる」ような、つらくかなしい旅路である。かかる悲痛な道中ではあるが、末尾で「物見やぐらは安定していても、やがて螻蟻ろうぎとともに塵と化してしまうのがうれわしい」とあるが、これは物見やぐらを建平王に擬して、その将来を案じているのだろう。とすると、江淹はなお、景素への忠誠心はうしなっていないようだ。

この賦のつらい旅途や哀訴の情を一読するや、古典にくわしいひとだったら、すぐある人物を想起するだろう。そうである。あの楚の屈原である。周知のように屈原は、政敵から讒言をつけ、それを信じた楚王によって、国外へ追放されてしまった。江淹はこの「去故郷賦」において、景素を楚王に擬し、そして自身を、追放されて江潭にあそぶ屈原になぞらえているのだろう。そのためかこの賦は、あちこちに「楚辞」由来の「兮」字や典故をちりばめている。

たとえば、「川の中洲をこえてから冠をぬぎ、激浦にいたってから外套もすててしまった」（原文は「出汀洲而解冠↓入激浦而捐袂」）二句は、なぜ江淹がこんな動作をするのか、いまひとつ前後と連絡をつけにくい。そも

そも激浦は、当地ではなく、楚の地名なのである。だがこれも、『楚辞』や屈原の悲劇をふまえたものと解すれば、すぐ事情がわかってくるだろう。すなわち「汀洲」（川の中洲）は、『楚辞』九歌湘夫人の「汀洲の杜若を擧りて、將に以て遠き者に遺らんとす」にもとづき、「激浦」（湖南省をながれる河川）は、『楚辞』九章涉江の「激浦に入りて余は儋徊し、迷いて吾の如く所を知らず」に、おなじく「捐袂」（衣をぬぎすてる）は、『楚辞』九歌湘夫人の「余が袂を江中に捐て、余が襟を醴浦に遺つ」に、それぞれ依拠した表現なのである。

ほかにも、この賦中には『楚辞』由来の語が多い。その語と典拠だけあげれば、「桂枝」は『楚辞』離騷に、「浮雲」「蕭瑟」は『楚辞』九弁に、「江皋」は『楚辞』九歌湘夫人に、「嬋娟」は『楚辞』九歎思古に、「少歌」は『楚辞』九歌抽思に、「芳洲」は『楚辞』九歌湘君に、「桂水」は『楚辞』九懷に、「杜蘅」は『楚辞』招魂に、それぞれ典拠をもっている。こうした語句をちりばめることによって、江淹はみずからを、『楚辞』ふうの、そして屈原ふうの、トラジックな忠臣にしたてようとしたのだろう。

おかげで、この「去故郷賦」は、屈原ふうの悲痛な情感でめりつぶされてしまった。「わが思いは纏綿としてやむことなく、旅愁はふかく高潮するばかり」「高山をみると日はしずみゆき、涙がこぼれ手拭いはすぶぬれた」等々。さらにこの賦中には、悵、泣、傷、自憂、横涕、蕭瑟、沾巾、坐悲などの語が使用されて、悲痛な色彩をいつそうかきたてているのである。

江淹は、かの名篇「恨賦」において、自分で自分のことを「恨人」であるとかたっていた。「僕は本恨人にして、心驚いて已まず」。つまり、自分は多情多恨な男であり、いつも小心翼翼とすごしている、と自認しているのである。かかる多情多恨な性格によって、屈原の悲劇に親近感をいだいていた江淹だったが、このたびの左遷は、そうした傾向をいつそう助長したのだろう。

つづいて左遷三部作の第二として、「被黜為呉興令辞箋詣建平王」をみてみよう。

この箋（貴人への書翰）は、「黜けられ呉興令と為りて辞する箋、建平王に詣る」という標題からみれば、呉興令を命じられた江淹が、京口の地で景素にむけ告別の辞をつづったものの、ようにみえる。しかし、この箋をよくみると、このときの江淹は、もう呉興に到着している。とすれば標題の「辞」は、呉興へ到着した江淹が、呉興の地から別れをつげたものと解さねばならない。京口と呉興の距離からかんがえて、おそらく元徽二年（四七四）の冬、呉興にたどりついた江淹が、着任報告をかねてこの箋をつづったのだらう。

わたくし江淹は、もともと放浪の徒ですが、「やはり放浪した」孔子や墨子ごとき能力はもちあわせません。田野のなかを転々とし、岩窟でのたれ死ぬばかりでした。

ところが、建平王さまにみいだされ、王府の長廊をゆき、台階にしたがい、さらに欄干のもとで待し、曲池の宴席にはべることができました。また、官府の恩沢をたまわり、朝廷のお恵みにもめぐまれたのです。かくして筆をもって建平王さまに捧持し、礼服を着て廷内にたつことができました。

山東の庶民にすぎぬ私にとって、まことにすばらしい幸せでした。かりに死後、「王のために」土中で蟻あきの害をふせぎ、黄泉にお供したとしても、このご恩にむくえぬほどでございます。

ところが私は惑乱して「南東海太守の位をもとめるなど」、よからぬことをしました。それは、王の海や山のごとき寛大さをもってしても、ゆるされぬことでした。さらに、かつて収賄の疑いで入獄したときも、とても罪をつぐなえぬほどでした。

しかし、王の恵みぶかきご政道のもとでは、草木でさえふみつぶされません。私は酷刑にくだされることなく、「解放されて」罪をつぐなう機会をあたられたのです。王のお恵みたるや、河漢の流れで汚れをあ

らい、秋陽の烈日でかわかすようなものです。つまらぬ私とき愚人、どうして王の君恩に感動せずにおれましょうか。

愚考いたしますに、私は王の膝下に参じること九年、お仕えて八年となります。以来、いくたびかの春と秋をすごし、いろんなことが想起されてきます。ですが、悪事を制し、善事を称賛し、至誠をふるい、ご恩をかえすことが、まったくできておりませぬ。ただ大木中のこぶとなったり、溶融した金属のはねかえりだったりしただけで、天命などではなく、みずから悪行の報いをつけてしまったのです。それでも王の寛容さをたまわり、呉興の令とさせていただきました。

こうして私は霜や露のなかを、乾し飯ほいいを持参して旅をつづけ、呉興に到着しました。当地では、山中の岩石をけずって岩窟をつくり、竈げんだと仲間になるつもりです。とはいえ、歩行できぬ者もたちあがるのをわすれず、盲者も物をみるのをあきらめぬものです。まして私の罪たるや、朔方に配流された蔡邕よりおきいのですが、彼とて罪一等を減ぜられましたし、朱崖の地をすてた賈捐之よりひどいのですが、彼も何度か抗弁をゆるされました。金石に知覚はありませんが、この私とて「蔡邕や賈捐之のように罪をゆるされたならば」、どうして恩をかえす道理をしらぬはずがありません。

私はかつて、王にしたがつて、南荊州、荊州、そして揚州と、随従させていただき、また建康や中枢の地でも、ながくお供させていただきました。王のお教えはまだ耳にのこり、おことばも昨日きいたがごときです。それなのに、私は進退きわまり、この呉興の地にながされております。この地は晨鳥さえとばず、わが骨もいつ郷土にかえられることやら。

ともあれ、私は王のいます都邑を出発し、あつというまに呉興に到着いたしました。この地では空に白雲

がたなびき、山河が王のいます地とへだてています。西のかた（京口）を望見すれば、涙がポロポロとこぼれるばかりです。

淹王遷徙之徒、非有儒墨之能、亦以

軫命溝間、誤得
待殯岩下。

步修椳、伏層檻、
循高軒、坐曲池。

承翠河之潤、載筆奉后、盛飾立朝。
降施日之光。

於山東百姓、亦已殊甚。雖

薄螻蟻、不足以塞患。
抵黃泉、

而小人狼狽、為鬼為蜮、山淵所容、衣劍不貸、鯨赭幽園、皆非報責。仰遭大道之行、草木勿踐、輟鏹劍火、吹魂拾骨。

濯以河漢之流、叢然黔首、豈不戴天。
曝以秋陽之景、

窃思

伏早九載、
齒錄八年、
以春以秋、竟不能
且思且顧。

抑黑質、抽精膽、
揚赤文、報慈光。

而自為擁腫之異木、所謂孽由己作、匪降自天。猶沐浴化余靈、宥以遐邑。
卒成踴躍之妖金。

方蒙被霜露、裹糧洲島。鑿山楹為室、永与鼃鼃為群。

猶蹶者不忘起、況罪溢朔方、尚駐一等之刑、金石無知、何以識答。

盲者不忘視。

咎過朱崖、猶緩再重之施。

昔河濟荆吳、必獲陪從、德音在耳、淹乃梁昌、自投東極。

京輔閑輟、長奉帷席。
晨鳥不飛、
遷骨何日。

話言如昨。

一 辞城濠、旦夕就遠。白雲在天、山川間之。眷然西顧、涕下若屑。

この箋は、しいて三段にわければ、冒頭から「ご恩にむくえぬほどでございます」までが、建平王への感謝、「ところが私は惑乱して」から「呉興の令とさせていただきました」までが、かつての自分の反省、そして「こうして私は霜や露のなかを」から末尾までが、望郷の情を叙したもの、としてよからう。

この箋では、すこし時間がたつたせいだろうか、江淹、かなり冷静になつてるようにみうけられる。

前作「去故郷賦」では、つらい、かなしいというばかりで、自分の激した感情をぶちまけるだけだった。ところが、この箋では江淹、寒門の自分をひきたててくれた景素にむけて、感謝のことばをおく叙している。たとえば、「山東の庶民にすぎぬ私にとって、まことにすばらしい幸せでした」「死後、「王のために」土中で螻蛄の害をふせぎ、黄泉にお供したとしても、このご恩にむくえぬほどでございます」など。これらのことばは、冷静になればこそ、つづれたものだろう。

たしかに景素は、江淹に寛容だった。江淹は、景素らが異図をいだいているのをしっている。景素からみれば、くわだてをしり、しかもそれに反対する江淹は、たいへん危険な男だったはずだ。口封じのため、ころされてもしかたがなかっただろう。にもかかわらず景素は、江淹を殺害せず、呉興に左遷するだけでとどめた。これは、やはり彼の寛大さのゆえであり、また江淹を信じていたからでもあろう（ただし、目付けの役人ぐらいは、つけていたかもしれない）。こうしたこととかんがえると、江淹が景素に感謝のことばをのべるのは、とうぜんのことだったといわねばならない。

かく冷静になつた江淹、自分の行為をみなおす余裕もでてきたのだろう。南東海太守の位を執拗に要求したことを、「惑乱して、よからぬことをしました」と反省している。そして、あれほどつらがつていた呉興へ

の左遷を、「みずから悪行の報いをつけてしまったのです。それでも王の寛容さをたまわり、呉興の令とさせていただきます」と感謝できるようになっているのである。

そして呉興に到着したことをのべ、自分はこの地で「山中の岩石をけずって岩窟をつくり、鼈鼉と仲間になるつもりです」という。この発言、決意のことはなのだろうが、すこしユーモラスな感じもしないではない。

こうしたおだやかな行文は、この作が賦ジャンルでなく、箋の文章ということもあるのだろう。「楚辞」語彙の利用もすくなめであり、全体に冷静な任地到着の報告書という印象をあたえている（ただ末尾では、「西のかた（京口）を望見すれば、涙がポロポロとこぼれるばかりです」とのべ、あいかわらずの未練はのべている）。

もう一篇、左遷三部作の第三として「待罪江南思北帰賦」もみてみよう。

この賦は、標題によると、「処罰を江南（呉興）でまちつつ、北（京口）へかえりたいと念じている賦」ということになる。内容から推察すると、呉興に着任して一年ほどたった、ある秋の日につづったものだと推測される。とすれば元徽三年（四七五）、江淹三十二歳ごろの作だろう。

「待罪江南思北帰賦」

わたくし淹は非力ではありませんでしたが、建平王さまにお仕えし力をつくしてまいりました。王は河漢のごとき雄才をお持ちになり、日月のごとき英邁ぶりでございました。あたかも大鵬のごとく、雲上にでて、大音声を発し、青天を背にして、翼をはばたかれています。王の徳望はいつも私を元気づけてくださり、王の恩情は私に無限の力をあたえてくださいました。

ところが私は、職務の規律をまもることをせず、まことに愚昧で、短慮なことをしてかしました。かくして王のうるわしい恩徳に恥じいり、かがやかしい徳望にあわせる顔をなくしたのです。法の網にみずからか

かつてしまい、夜も寝ずに後悔しても、だれにも同情してもらえませんでした。

ところが王のご政道の寛容さたるや、草木さえふみつぶされません。私は「罰せられず」遠国の呉興令をおおせつかり、失敗から再起する願いがかなえられました。かくして王のいます宮殿をさり、京師の街とも別れをつけたのです。

この呉興の地は、丘陵がつづき、万里のかなたまで荒蕪の地がひろがります。そして、大狐がいる比景の地につらなり、毒蛇がいる蒼梧につづいています。

私は春に家族とわかれ、仲秋に呉興めざして出立しました。途中、わが馬は涼冷な葭の叢にくるしみ、農夫たちも霧や露にあえいでいます。私は金色の峰々と緑なす山々をこえ、桂樹ならぶ河川や碧の急流をわたりました。雲は清冷にして糸のようになびき、風は蕭条としてつねにふきよせます。猿は日光のもとで悲しげにさげび、黒猿はさむざむとした月下で声をあげています。たちこめる煙霞のもとをさがしてみれば、すべて急峻な山の木々や岩石のあいだから発しておりしました。

こうして、この呉興の地で私は、虹がかかる高所にいつて岩室を築き、山中の岩石をけずって柱としております。上をみると皓皓たる明月がうかび、下ではうつとおしい長雨がふりつづいています。雨水はとおくの谷にむかい、木石も山谷へながれこみます。鷹隼ようしんにびくびくしながら岩室にひそみ、鼃かみをおそれつつ岩穴にすんでいるのです。

厳冬の月下、風がビューと木々をゆらし、黒雲があつまって雨もこおり、黄煙がわきあがつて雪となりま

す。虎でさえくるまつて、外であることとせず、蛟龍もとびあがると、もとの穴にかえられません。

やがて春になり、江籬が花をつけはじめると、杜衡の草もしだいに繁茂してきます。

桂樹が香をはなつて、葉がはえる夏となると、ハスは花をさかせ、根をはやします。下方をむけば、金色の川浪が百丈に波打ち、川底の沙がうごきまわるのがみえます。山の峯には、もうもつたる霧が見えかくれし、雲はいりみだれ上にあがつていきます。岩石はさまざまな色にかがやき、峰の遠近にはかわつた景色がみられます。

つむじ風が蕙をゆらす秋になると、天空の奥から露がおりてきます。木々はヒューとさみしげな音をたて、草々はしとどぬれて夕暮れになります。夜になると燈火がわびしく、ふかい憂いが心中からきえません。わが魂は生気がなくなつて、なにもかたろうとせず、心もぼうつとして、だれにもしゃべる氣になりません。わが情意はかれはて、なにも感じられず、精神も混乱して、芯がぬけたかのようです。

不世出の英雄だつた劉邦でも、故郷の沛県をいたしましたし、機略縦横の劉秀も、故郷の南陽をなつかしかりました。潘岳は洛陽をさらんとして涙をながし、陸機も呉を出立せんとして心をいためました。まして北方の愚人たる私が、南方の流人となつたとなれば、いうまでもないことです。

私はこの地で、いつも妖怪どもと顔をあわせ、蜘蛛どもの隣にすんでいます。秋には露が刀やさやにポツポツおり、春には青苔が頭巾や衣服にまとわりつきます。庭をあると雑草がおおくしげり、左右をみわたしても、親戚や客人はおりません。憂いが骨にしみ、思いもみだれるばかり。わが願ひは都にかえること、途上に困難があろうとも、わが身をおしむことはありません。

伊小人之薄伎、奉君子而輸力。

〔接河漢之雄才、〕 〔絶雲氣而厲響、〕 〔德被命而不渝、〕
〔曄日月之英色。〕 〔負青天而撫翼。〕 〔恩潤身而無極。〕

何規矩之守任、信愚陋而不肖。愧金碧之琳郎、樊天網而自離、徒夜分而誰弔。

慚丹牖之照曜。

遭大道之隆盛、雖草木而勿履。誤銜造於遠國、出顛沛之願始。去三輔之台殿、

辭五都之城市。

惟江南兮丘墟、帶封狐兮比景。當青春而離散、寒蒹葭於余馬、

遙万里兮長蕪。連雄虺兮蒼梧。方仲秋而遂徂、傷霧露於農夫。

跨金峰与翠巒、雲清冷而多緒。猿之吟兮日光回、究煙霞之繚繞、

涉桂水与碧端。風蕭條而無端。狄之啼兮月色寒。具林石之嶮岈。

於是臨虹蜺以築室、上皓皓以臨月、奔水潦於遠谷、鷹隼戰而櫓巢、

鑿山楹以為柱。下淫淫而愁雨。汨木石於深嶼。龜鼉怖而穴処。

若季冬之蔽月、風搖木而騷屑。玄雲合而為凍、虎踞踟而斂步、

黃煙起而成雪。蛟夔尼而失穴。

至江離兮始秀、桂含香兮作葉。俯金波兮百丈、霧益益兮半出、石昭爛兮各色、

或杜衡兮初滋。藕生蓮兮吐絲。見碧沙兮來往。雲雜錯兮飛上。峰近遠兮異象。

及迴風之搖蕙、天潭潭而下露。木蕭梢而可哀、夜燈光之寥回、歷隱憂而不去。

草林離而欲暮。

魄寂寂而何語、情枯槁而不反。

心湯湯而誰告、神翻覆而亡據。

夫以「雄才不世之主、猶儲精於沛鄉、」
 「奇略独出之君、尚婉恋於南陽、」
 「潘去洛而掩涕、」
 「陸出吳而增傷、」
 「況北州之賤士、」
 「共翹翹而相偶、」
 「秋露下兮点劍烏、」
 「步庭廡兮多蒿棘、」
 「与蠅蛸而為鄰、」
 「青苔生兮綴衣巾、」
 「顧左右兮絶親賓、」
 「憂而填骨、願歸靈於上國、雖坎軻而不惜身、」
 「思兮乱神、」

内容からみて、景素を讀者に想定しているようなので、そうしたふうに訳しておいた。

この賦は、さきの「被黜為吳興令辞箋詣建平王」と、同傾向のものだといってよからう。「被黜箋」の文とどうよう、北帰の情を表白しながらも、景素への感謝、自身の反省、そして当地の報告などをまじえたものとなっている。

多少のちがいといえば、吳興の日々の記述がさきの箋よりも、くわしくなっていることだ。その記述内容、あいかわらず「鷹隼にびくびくしながら岩室にひそみ、鼃鼃をおそれつつ岩穴にすんでいる」などと、当地の辺鄙さを強調しているが、それにくわえて、四季のめぐりも叙しているのが注目される。すなわち、「嚴冬の月下

やがて春になり 桂樹が香をはなつて、葉がはえる夏となると つむじ風が蕙をゆらす秋になると

のように、四季の変化を順序だてて叙している（ただし、四季の風物とても、心がやすらぐような自然ではない）。ただ、明確にことなる点もないではない。それは、「去故郷賦」にあった悲痛な感情がすがたをけし、また「被黜箋」には存していた、「涙がやむことなくこぼれ」ということばもなくなっている、ということだ。つまりこの「待罪賦」では、江淹はもう涙をながしていないのである。こうした前作との相違は、吳興に赴任し時間

が経過するにしたがって、江淹の気分がおちついてきたことをしめすものだろう。

それでは、もうすっかり呉興になじみ、すめば都と達観したのかというところ、それはけっしてそうではない。江淹はこの賦中でも、「兮」字を多用し、『楚辞』の典故も使用して、つよく北帰の希望をうたえている。たとえば末尾では、「わが願いは健康にかえること、途上に困難があるうとも、わが身をおしむことはありません」。私はやはり健康にかえりたい。途上に困難があつても、ぜひかえりたい——かく北帰を建平王にうたえて、この賦をとじているのである。

ところがである。興味ぶかいことに、ずっとあとでかいた「自序」においては、呉興での日々を、つぎのようにつづっている。

その地は、東南の嶺外であり、ふるくは閩越の地であつた。碧水や丹山があり、また珍木や靈草もはえていた。これらは、みな私が平生このんでいたものであり、辺地にきたとはおもわなかつた。山中ではなにもおこらず、ひたすら道書を友としつつ、悠然と山中へはいつていったものだった。あるときなど、夕方になつても帰宅するのをわすれるほどである。そして山野を放浪したさいは、詩文をつくつてたのしんだものだった。

この「自序」でかたる暮らしぶりは、右の「待罪江南思北帰賦」の記述とは、ずいぶんちがつたものだ。呉興の地は、「碧水や丹山があり、また珍木や靈草もはえていた。これらは、みな私が平生このんでいたもの」であり、江淹は、「山野を放浪したさいは、詩文をつくつてたのしん」でいるという。すると「待罪賦」でかたつていた、「鷹隼にびくびくしながら岩室にひそみ、鼃龜をおそれつつ岩穴にすんでいる」や、「わが情意はかれはてなにも感じられず、精神も混乱して、芯がぬけたかのよう」の記述は、うそだったのだろうか。

私見によれば、これはおそらく両方とも、いささか事実をかざって叙したのだろう。すなわち「自序」は、なんといても、立身したあと、「四十歳のときに」十年まえのできことをかいたものであり、過去を美化する気分が混入してくるのは、やむをえないとせねばならない。いっぽう「待罪賦」のほうは、江淹の心中に、景素にゆるしてもらって、帰郷したいという気もちがあるので、現今の状況を過度に劣悪につづったのだろう。両方の記述とも、正確なものとはいいがたいが、しかしやむをえないことだといってよい。

したがって事実としては、両方をたして二でわつた程度だったと解すればよからう。呉興での江淹、もちろん景素にゆるしてもらい、帰郷できることを熱望していたのはまちがいない。だが、そうとはいっても、四六時中「かえりたい、かえりたい」と涙にくれ、わめいていたわけではあるまい。あるときには、「自序」にあるように、行楽をたのしんで樂觀的な気分になっただろうし、またあるときには、「待罪賦」のごとく、望郷の思いにくれたのだろう。

六 哀傷の日々

ところで、呉興での江淹、彼の苦難は、辺地での非文化的な生活だけではなかった。左遷と前後して、さらなる悲劇におそわれたのである。それは、江淹にとって大切な人びと、つまり親友や妻、子どもが、あいついで死んでしまったことだ。辺地へ左遷されたことでさえ、痛恨のきわみだったのに、このさらなる悲劇は、たいへん江淹をくるしめたことだろう。

くわえて、江淹は、親友はもちろん、自分の妻子の死のさいにも、たちあうことができなかった。これも彼に

とつて、無念だったことだろう。というのは、江淹は、妻子を京口においたまま、単身で呉興に赴任したからである（『江文通集校注』一七三六頁）。なにしろ呉興は辺鄙な土地であり、「鷹隼にびくびくしながら岩室にひそみ、鼯鼯をおそれつつ岩穴にす」む日々が予想された。だから江淹は、妻子を呉興へつれてゆかぬことにしたのである（あるいは建平王の命により、妻子は一種の人質として、京口にとめおかれたのかもしれない）。そのため江淹は、親友や妻子の死を、おそらく後日、書翰等でしつたのだとおもわれる。

その意味で、このときの江淹は、彼の人生のなかでも、もっともつらい日々をすごしていたはずだ。そうしたあいつぐ苦難は、呉興への左遷とどうよう、江淹の詩囊をはげしく刺激した。かくして、左遷をかなしむ諸作について、死をいたむ哀傷の詩文が、つぎつぎと生まれおちてきたのだった。

この章では、そうした哀傷の諸作を紹介してゆこう。とりあげるのは「傷友人賦」「傷愛子賦」「悼室人詩」「十首の三篇」、いずれも呉興左遷の前後、孤独のうちにかけられたものである。この三篇をかりに哀傷三部作と名づけ、順にみてゆくことにしよう。

まず哀傷三部作の第一として、「傷友人賦」をみてみよう。

標題にいう「友人」とは袁炳、あざなは叔明という人物である。この友人については、「自序」でも「魂が通じあうほどの友は、陳留の袁叔明ひとりだった」と言及していた。いま、正史でこの人物を検してみると、『南齊書』文学伝につぎのようにあった。「陳郡の袁炳^{えんへい}は字は叔明、文学有り。亦た袁粲の知る所と為る。晋書を著さんとするも未だ成らずして卒せり」。これによると、袁炳は文学の士だったようで、晋書をかこうとしたが、完成せぬまま逝去してしまったらしい。

ただ、こんな略伝よりも、江淹が友の死後かいたとおぼしき「袁友人伝」のほうで、その人がらをずっと明確

に描写してくれている。そこで江淹の「袁友人伝」を、書きくだし文で紹介しよう。

友人袁炳、字は叔明、陳郡陽夏の人なり。

其の人は天下の士なり。幼にして異才有り、学びて覽みざる無し。文章は俶儻清澹てきとうせいだんにして一時に出でたり。心に任せて書を觀て、章句の学を為さず。其れ篤行なれば、則ち信義ありて恵和にして、意は罄けい如たるなり。常に松柏を蔭かげとするを念い、詩書を詠ず。志氣跌盪てつたうにして、俗人と交わらず。

眉を俯ふせて暫く仕え、国常侍、員外郎、府功曹、臨湘令を歴す。粟ぞくの入る者あれば、悉く散じて以て親を贍たすく。其の節たるや此くの如し。数百年未だ此かくのごとき人有らず。乃ち妙を好み文を賞するに至りては、獨り世に絶せり。又晋史を撰さんとし、奇功未だ遂げざるに、不幸にして官に卒せり。春秋二十有八。

「袁炳は」余と青雲の交り有りて、直ただ杯酒を銜ふくむのみに非ず。嗟あ乎、斯この才にして、斯の命あり。天の善人に報施するは、何如いかんせん、何如いかんせん。

これですべてである。この文、対偶をつかわぬ散体でかかれており、いかにも伝記らしい、簡明直截な行文となっている。江淹の才能はじつにゆたかで、このように駢散の体も、自在に交替させてつづることができた。あとも説明するが、このように自由にスタイルをかえられる才能、それが、彼に模擬詩の傑作「雜体詩」をかかせることになったのだった。

ところで、この「袁友人伝」によると、袁炳はただの文学の士ではなく、天衣無縫にして、豪放な人がらだつたようだ。出仕して「粟」、つまり禄秩をもらつたようになると、すべて親族や知己に散じたというから、江淹もそのおこぼれにあずかったかもしれない。また「心に任せて書を觀て、章句の学を為さず」「志氣跌盪にして、俗人と交らず」などは、江淹の気性とも似ているといつてよい。江淹は、こうした袁炳の人がらにほれこんで、

彼を「魂が通じあうほどの友」とおもつにいたつたのだらう。

こんな愛すべき親友が、わずか二十八歳で逝去してしまつた。これをかなしんだ江淹は、袁炳のために右のような「傷友人伝」をかき、そして「傷友人賦」をつづつたのである。丁氏『江淹年譜』によれば、この両篇はともに元徽二年（四七四）、江淹三十一歳の秋につくられたという（すると、江淹が三歳ほど年長となる）。とすれば、江淹が劉景素によって呉興への左遷を宣告され、京口を出立する直前につづつたことになるう。

では、「僕の神交せし者に、嘗て陳郡の袁炳有り」と開始される「傷友人賦」をしめせば、つぎのようなものである。

私にはかつて心の友がいた。それは、陳郡出身の袁炳というひとだ。この袁炳は逸才があり、鑑賞眼を有していた。また博覧強記なうえ、才能は明敏で見識も卓越していた。私は、この友こそ天下無双の男だと信じていたが、いたましいことに、秋草がかれるとともに逝去してしまつた。いまはもう、その英姿をみることはできぬ。

彼の死後、私は書物をひろげても、この袁炳のことが脳裏をさらす、瑟を前にしても、炳にきいてもらえなくなつた。我われ兩人は、あの張劭と范式のごとき霊の交感はないにしても、向秀が嵇康の死をいたんだ心情にはちかいといつてよい。そこで彼をしのんで、この賦をつくつてみた。

涙がわが衣をぬらし、俊秀たりしわが友、袁炳の死をかなしむ。

袁炳は、神聖な袁氏の血をうけて世に生まれ、偉大な系統をついで子孫となつた。炳の家は四代をへて子孫をふやし、十代目となつて隆盛した。炳の誕生たるや、山川が神霊をくだしたものであつた。彼は品格たかく風韻ただよい、その気概にもすぐれたものがあつた。才氣卓越していたが、心根はものしずか。詩文で

は王褒や司馬相如にせまり、修史の才は司馬遷や班固にちかった。炳の人がらをたとえれば、冬の雪がきよらかなよう、秋の月がすみきっているかのよう、といえようか。こつした人物は、上代でもまれだったが、現世では絶無であった。

それなのに、いたましいことだ。蕙草や杜若が芳香をうしない、琬琰のごとき美玉が欠けるかのよう、この袁炳は死んでしまったのである。

私は、幼時からこの袁炳のことがだいすきで、いちど顔をあわせただけで心の友となった。昔時に意気投合してから、平生ずっと交遊してきた。そして交遊はとぎれることなく、親睦し心をゆるしてきたのである。私と彼の友情は城壁よりかく、情愛は黄金より価値があった。我われは二人して、今人を軽視して、その浅薄さをわらい、古人を敬慕して、その深識をもとめた。そのため、おなじ学問の道をあゆむようになり、ことなる志向をもつこともなかったのである。

炳は霜にまけぬ柏に思いをこらし、私は冬もしほまぬ桂に心をうたれた。また百官の転落ぶりを考察し、諸侯が衰亡するさまを観察した。二人で荆玉の能をふるって才腕の輝かしさをきそい、随珠の才をもって詩文の華麗さをはりあったりもした。書物をひらいて古籍を解釈し、経書にまなんで史書を閲読した。また洛書を検討し、河図も分析したのだった。さらに諸子百家の主張をたずね、地理書のなかもなくまなく調査したこともある。

また私たちは、詩文中のあてやかな詞藻をよろこび、賦が艶麗に叙されたさまも鑑賞した。古今の宝のよいうな書物をよみつくし、簡牘中のふしぎな記事をさがしまわった。おかげで、朝の陽ざしがいつのまにかくれ、夜空の星がしらぬまに移動していたものだ。それほど熱心に、秋の実のごとき内容を西苑でとり、春の

華のごとき美文を東池でつんだものだった。

私たちは、同年に建康で対策に合格したのだが、地方でもにすぎせたのは、わずか一年もなかった。やがて炳はふかい水をたたえた湘水に、私ははるかな荊州の山々にむかった。炳の音容と手紙は、想起するよすがになったものの、二人は楚と越のように、南北にわかれたのである。

その後、私は梁孝王のごとき建平王さまの幕府にお仕えし、朱方こと京口で奉職していた。ところがこの世は多事多端で、ただしき天道もあつたものではない。あの碧玉の神樹、または紫石の霊根に比すべき袁炳を、死なせてしまったのだ。

私はとおい湘州の江辺より訃報をうけとり、炳の亡き魂に沈痛な思いをささげた。わが魂はきえいりそれで、涙がボロボロと玉のようにおちるばかり。鑑賞眼をもつた炳がこの世にあらぬのをいたみ、わが知己だった炳が死んだのがかない。

黄金は価値があつても、別物に鑄造されるし、桂樹は芳香を発しても、やがてはおれてしまふ。わが友の炳は、百年の長寿のはずが無念の急逝。せめて炳の名声だけでも、永遠ならんことをいのる。

僕之神交者、嘗有陳郡之袁炳焉。

有逸才、博学多聞、才明敏而識奇異。
有妙賞、

僕以為天下絶倫、黯与秋草同折。今不復見矣。

既而

陳書有念、

雖乏張范通靈之感、乃為辭曰、

横瑟無從。

庶同嵇向篤徒之哀。

泫然沾衣兮、悲袁友之英秀。

系神緒而作氏、轢四代而式昌、
胤靈枝而啓胄、泊十葉而克茂。

友人之生、川岫降明。

峻調迴韻、倜儻遠度、文攀淵卿、
惠志聰情、寂寥靈素、史類遷固。

譬如冬雪既潔、
將似秋月至徹。

乃上代而少双、弔蕙若之暫芳、
故叔世而曠絕、慟琬琰之永缺。

余幼好於斯人、乃神交於一顧。

邈疇年之繾綣、
窈生平之游遇。

既游遇兮可尋、

懷愛重於素璧、舍一代而笑淺、故高術而共徑、

乃協好兮契心。

結分珍於黃金、訪古人而求深、豈異袖而同襟。

爾凝情於霜柏、

擊千品之消散、帶荆玉而爭光、

我發志於冬桂。

鏡百侯之衰替、握隨珠而比麗。

披圖兮昭籍、

共煥兮洛書、既思游兮百說、

抽經兮閱史。

同析兮河紀、亦窮精兮万里。

愛詩文之綺苑、

罄古今之宝贖、信朝日之徒晨、覽秋実於西苑、

賞賦艷兮錦起。

彈竹素之琛奇、属夜星之空移、摘春華於東池。

蚤同歲於上京、

爾湘水兮深沈、惟音華与書酒、伊楚越兮南北。

未滿年於下国、

我前山兮眇默。

余結誼兮梁門、	何人徑之困阻、	凋碧玉之神樹、
復從官兮朱藩、	而天道之匪存、	銷紫石之靈根、
承遠書於江滄、	魂綿昧其若絕、	吝妙賞之不留、
結深痛於爾魂、	泣縈盈其若結、	悼知音之已逝、
金雖重而見鑄、	百年一尽兮、	貴揚薤於後烈、
桂徒芳而被折、		

この、親友の死をいたんだ「傷友人賦」は、哀傷の情だけでなく、あつき友愛の情も、主要なテーマとなっている。袁炳への哀傷と友愛の情とが、一篇中でせつない二重奏をかなでており、そのかなしい旋律は、読者の胸をゆすぶるかのようである。以下、とくに胸をうつ場面をふりかえってみよう。

江淹の袁炳に対する友愛の情。それは、彼の俊秀ぶりをたたえるだけでなく、二人の思い出をかたることによって、さらに熱をおびてきている。たとえば、なかごろの「炳は霜にまけぬ柏に思いをこらし、私は冬もしばまぬ桂に心をつたれた」（原文は「爾凝情於霜柏、我發志於冬桂」）以下をみてみよう。ここで江淹は、かつて袁炳とともに切磋琢磨した場面をえがいている。すなわち、

詩文中のあてやかな詞藻をよるこび、賦が艶麗に叙されたさまも鑑賞した。

「愛詩文之綺発、

賞賦艶兮錦起。

秋の実のごとき内容を西苑でとり、春の華のごとき美文を東池でつんだものだった。

「覽秋実於西苑、

「摘春華於東池、

などは、俊秀の若者が二人、ともに学問や詩文にはげんでいるさまを叙したものだ。この二つの聯では、「綺甃
↓錦起」と「覽秋実↓摘春華」の対応もピッタツときまつており、比喻と対偶とがあいまって、すばらしい修辞効
果をあげている。こうした二人の思い出をかたることによって、袁炳の俊秀ぶりを強調するとともに、二人の友
情もさりげなく示唆しているのである。

ところが叙述は、そうしたうつくしい思い出から、仕官によるたがいの離別にうつり、そしてとつぜん「この
世は多事多端で、ただしき天道もあつたものではない」（原文は「何人径之困阻、而天道之匪存」という哀傷の
情がでてくる。そして袁炳の死が、宝玉や樹木の比喻をからませつつ、

あの碧玉の神樹、または紫石の靈根に比すべき袁炳を、死なせてしまったのだ。

「洞碧玉之神樹、

「銷紫石之靈根。

と叙されるのである。このあたり、袁炳の不意の死に対して、天に抗議するようなつよい態度がきわだっている。
こないいいやつが、こんなにはやく死ぬなんて。不都合じゃないか。天道よ、いったいどうなっているのか。そ
んな江淹の訴えが、よむ者の心をつつ。

かく袁炳の死をのべたあと、江淹は友の運命に対し、自分なりの述懐をかたっている。それは、
黄金は価値があつても、別物に鑄造されるし、桂樹は芳香を発しても、やがてはおれてしまう。わが友の炳
は、百年の長寿のはずが無念の急逝。せめて炳の名声だけでも、永遠ならんことをいのる。

「金雖重而見鑄、百年一尽兮、貴揚薤於後烈。
桂徒芳而被折。」

というものだ。この述懐も、なかなか深みがある。黄金や桂樹といえども、やがては鑄造され、おれてしまうものという発言は、江淹なりの一種の諦観なのだろう。天道への訴えは、ようやくしずまってきた。友の死は厳然たる事実、うけいれるしかない。かくして江淹は、「炳の名声だけでも、永遠ならんことをいの」って、なんとか彼なりに納得しようとしているのである。

以上を要するに、この賦は、才能すぐれし袁炳の思い出といたましい早世とを、華麗な修辞でつつんだ秀逸な哀傷賦だと評してよからう。

つづいて哀傷三部作の第二として、「傷愛子賦」をみてみよう。

この賦は、江淹の第二子の江茭（こしゅう）、あざなは胤卿の死去をいたんだ作である。この第二子については、賦中に、寅年（元徽二年にあたる）にうまれたが、病にかかって「歳を涉りて卒」した、とかたっている。すると、翌元徽三年（四七五、江淹三十二歳）に逝去したわけで、この賦もその年につくられたとかがえてよからう。

この年は、江淹にとっては呉興左遷の二年目であり、さきにみた「待罪江南思北歸賦」をつくった年でもあった。親友に死なれ、呉興に左遷させられただけでも、江淹には苦痛だったのだが、そのうえ、この第二子の死までかさんったのだった。

江茭、あざなは胤卿、私の第二子である。この子は生まれながら稟性すぐれ、きつと俊英になると信じていた。だが、無念なことに病気にかかり、一歳すぎで死んでしまった。父の私は悲しみのあまり、あちこちさまよいあるき、そしてこの賦をつくったのである。

秋の気配がこくなってき、わが心に悲しみの情がわいてくる。哀悼してクヨクヨし、いとし子の死をいたむばかり。おかげでわが風貌はおとろえ、悄然として気がめいりそう。日月はしずむことはあっても、私の哀しみはきえることないだろうし、金石はとけることはあっても、わが痛恨の思いはやむことはあるまい。わが江氏の先祖をふりかえれば、赫赫たる帝高陽（せんぎやう顓頊）の子孫に由来している。ただ遺憾なことに、後世になって勢威が衰微し、子孫が旧時の輝きをたもてぬことを心配していた。そのため、日月星がわが江氏を祝されんことをねがい、賢明な胤卿の成長を期待していたのである。ところが胤卿よ、なんとむごいことか。天はなぜこの子に幸いをくださらなかったのか。

胤卿は春にうまれたが、それはまさに寅年の正月「で、あの屈原とおなじ」だった。俊秀ぶりが先哲に比肩し、英明ぶりが前賢とおなじであつてほしいと念じていた。そして先祖の高徳をうけつぎ、清廉な業績をひろめてほしかった。ところが秋、白露がふいに百草におりるかのごとく、わが胤卿も、梧楸とともにしほみ死んでしまったのである。

今年の夏のころをおもえば、胤卿、伶俐さがきわだっていた。だが、彼が炉边や帳中に病臥するのを見て、人びとはおおいに不安にかられ、部屋窓からのぞいて、「孔子が伯牛の不治の病をさつたように」「その重篤さに気づいたのだった。

なぜいま「胤卿が死んで」こんなにひっそりし、かつての音容がきえてしまったのか。

「胤卿の」姉は室内を目にしただけでなきだし、兄も末っ子（胤卿）の死をいたんで、顔じゅう涙だらけ。木石のごときひとでさえ、胤卿の逝去をいたみ、周辺の人びとまでも、悲しみこみあげ涙をこぼした。

また母は、最愛のひとをうばわれてしまった。胤卿、おまえは母の宝ものだったのだ。母は血涙を地面に

こぼし、天に憂いの情をむける。そして遺愛の品をみては慟哭し、形見にふれては悲嘆にくれる。かかる悲傷にとらわれ、どうして平静でおれよう。かかる悲運にみまわれて、なにをかたることができよう。

私は過分のはからいにより、江畔（呉興）の地で官についている。だが、薄暮になるとものがなしさがつのり、黄昏になると哀情にたえきれぬ。月は日光をひきついで輝きを発し、霞は雲とともに暗さをこくしている。霧はもうもつと樹木のあたりにたちこめ、月光は皓々と林上にふりそそぐ。ああ、どうすればよいのか、わが子よ、私はただ悲しみにつきまとわれるばかり。「悲しみのあまり」夜ごとにわが帯がゆるくなり、日ごとに髪の毛がうすくなっているのだ。

ひとがこの世にいきるや、楽しみはすくなく哀しみがおおいもの。百二十年もいきるのは無理だが、百齡だつてありえない。てりつけていた日の光とて、やがて夜の闇にとざされるし、ゆたかに水をたたえていた白露も、朝には霜に化してしまふ。この「自然でさえおとるえるという」比擬によって憂いをわすれ、この道理によつて悲しみをいやしたいもの。

かくみてくれば、この世の楽しみというのは、けつきよく親しみと愛情とにつきよう。つまりは家族と親族、そして老親と子どもたちとのそれだ。それなのに気のどくなわが胤卿は、永遠に冥界でひとり逼塞せねばならぬ。私は、天の神に罪はおかしてないし、地の神に罰せられるようなこともしておらぬ。かくなれば、釈氏の果報を信じ、三世の報いに帰依することにしよう。そして胤卿とともに浄土に生まれかわり、世俗の苦しみから永遠にのがれたいものだ。

江丸、字胤卿、僕之第二子也。生而神俊、必為美器。惜哉遭閔。涉歳而卒、悲至躑躅、乃為此文。

惟秋色之顚顚、心結兮悲起。曾憫憐之慘淒、痛掌珠之愛子。

形惇惇而外施、日月可銷兮悼不滅、
心切切而內圯、金石可爍兮念何已。

緬吾祖之赫羲、帝高陽之玄胄。

惜衰宗之淪沒、覬三靈之見福、
恐余人之弗構、佇弱子之擢秀、
酷奈何兮胤卿、那逢天兮不祐。

爾誕質於青春、撰提貞乎孟陬。

謂比芳於右列、遭高行之美跡、白露奄被此百草、爾同凋於梧楸。

望齊英於前修、弘盛業之清猷。

憶朱明之在節、睨爐帳而多招、奚在今之寂寞、失音容之髣髴。

顧岐嶷之可貴、瞻戶牖而有慰。

奪懷袖之深愛、爾母氏之麗人。屑丹泣於下壤、視往端而辭栗、

僚殷憂於上旻、踐遺緒而苦辛。就深悼而誰弭、

我過幸於時私、爰守官於江潯。

悲薄暮而增甚、月接日而為光、霧籠籠而帶樹、

思曛黃而不禁、霞合雲而成陰、月蒼蒼而架林。

嗟奈何兮弱子、我百艱兮是尋。驗纖帶之夜綏、

察葆鬢之朝侵。

惟人生之在世、恆歎寡而戚憊。

雖十紀之空名、迅朱光之映夜、指茲譬而取免、
豈百齡之能要、湛白露之凝朝、排此理以自銷。

然則生之樂今親与愛、内与外今長与稚。傷弱子之冥冥、独幽泉兮而永閔。

「余無愆於蒼祗、」信釈氏之靈果、願同升於淨刹、与塵習兮永棄。

「亦何怨於厚地、」帰三世之遠致。

この賦は、幼にして死んだ息子をいたむ作だけあって、全体がふかい哀悼の情でおおわれている。ただ、さすがに江淹だけあって、この作には、他の哀悼の作にはあまりみることのない、いくつかのくふうがほどこされている。それを指摘してみよう。

第一に、『楚辞』の利用がはなはだしいことである。江淹にかぎらぬが、六朝の賦では、感情をつよく表出しようとすることは、助の句形や『楚辞』由来の語彙（「兮」や『離騷』中の語など）を多用すること

がおおい。この『傷愛子賦』では、まさにその慣用を踏襲して、哀傷の気分や雰囲氣をもりあげているのである。そうしたなか、江淹はよりすんで、亡き江亢（あざなは胤卿）を屈原になぞらえようとしているのに注目しよう。さきにみた『去故郷賦』では、景素を楚王に、自身を追放された屈原に擬していたが、この『傷愛子賦』では、死んだ息子を「追放された悲劇の忠臣でなく」俊才としての屈原になぞらえているのである。

たとえばこの賦中で、江淹はおのが家系について、

わが江氏の先祖をふりかえれば、赫赫たる帝高陽（顓頊）の子孫に由来している。

緬吾祖之赫羲、帝高陽之玄胄、

という。これからみると、江氏の源流は、帝高陽（顓頊）の子孫にゆきつく、という伝承があったようだ。江淹はそれに依拠して、このように叙したのだろう。この伝承で大事なことは、この帝高陽の子孫には、あの屈原もいる、ということである。すなわち、屈原は『離騷』の冒頭で、自分の生まれについて、『帝高陽の苗裔にして、

朕が皇考を伯庸と曰う。撰提にして孟陬に貞しく、惟れ庚寅に吾以て降れり」とかたっていた。つまり屈原も、帝高陽の子孫であり、江氏と同族なのである（すくなくとも、そういう理屈になる）。

この強引な系譜づけをうけて、江淹は亡き胤卿の誕生を、

胤卿は春にうまれたが、それはまさに寅年の正月「で、あの屈原とおなじ」だった。俊秀ぶりが先哲に比肩し、英明ぶりが前賢とおなじであってほしいと念じていた。

爾誕質於青春、撰提貞乎孟陬。謂比芳於右列、

望齊英於前修。

と叙する。この「息子江荊」屈原」の比擬は、くるしいこじつけであることは、江淹も自覚していたらう。だがそれでも、亡き子を称揚したいがあまり、江淹はこう叙したのである。

第二に、ただ胤卿の非凡さや稟性のすばらしさをおしむだけでなく、のこされた者の悲しみぶりを叙することにも熱心である。たとえば、まず胤卿の姉と兄（まだ幼児のはずだ）の悲しみぶりを、

「胤卿の」姉は室内を目にしただけでなきだし、兄も末っ子（胤卿）の死をいたんで、顔じゅう涙だらけ。

「姉目中而下泣、

兄嗟季而飲淚。

と叙している。さらに胤卿の母（江淹の妻でもある）の悲痛ぶりも、

母は血涙を地面にこぼし、天に憂いの情をむける。そして遺愛の品をみては慟哭し、形見にふれては悲嘆にくれる。かかる悲傷にとらわれ、どうして平静でおれよう。かかる悲運にみまわれて、なにをかたることができよう。

「屑丹泣於下壤、」視往端而辭棄、
 「就深悼而誰弔、」
 「僚殷憂於上旻、」踐遺緒而苦辛。
 「歸末命兮何陳、」

と叙している。江淹は胤卿が死んだとき、呉興に左遷されていたので、「たぶん」彼自身は息子の死にはたちあえなかった。それゆえ、こつした家族らの哀悼ぶりは、想像で叙したのだろう。だが、そうした事情は逆に、江淹のふかい悲しみぶりを、よけいに強調することになった。

中国の画法のひとつに、烘託法こうたくほうとよばれるものがある。周辺をえがくことによって、主たる対象物をうかびあがらせ、ひきたてる技法であるという。たとえば「烘雲托月こううんたくげつ」なることばがあるが、これは、周囲を雲でぼかせることによって、月の美しさをひきたてる、の意である（『六朝麗指』「六、烘託法」汲古書院 一九九〇）。するとこの烘託法なるものは、周辺の甲を叙することによって乙をひきたてる、一種の強調の技法だといつてよからう。

とすれば、「傷愛子賦」のこの場面は、まさにその烘託法を賦に通用させたものとみなせよう。「江淹でなく」家族の哀悼ぶりを叙することによって、江淹本人の悲痛の情をひきたて、強調しているからである。その意味でこの場面、江淹が意図したものかどうかはわからぬが、結果的には、自身の悲しみを強調するという点で、ひじょうに効果的なものとなったのだった。

第三に、この「傷友人賦」では、結尾にも注目したい。この種の哀傷詩文の結尾では、「かなしい」「つらい」と連呼したり、「彼の蒼たる者は天」（『詩』秦風黃鳥）や「天道是か非か」（『史記』伯夷列伝）などと天にうたえたりして、一篇をとじることがおおい。

ところが、この賦の結尾では、

かくなれば、釈氏の果報を信じ、三世の報いに帰依することにしよう。そして胤卿とともに浄土に生まれかわり、世俗の苦しみから永遠にのがれたいものだ。

「信釈氏之靈果、願同升於淨刹、与塵習兮永棄。
歸三世之遠致。」

とある。つまり江淹は、釈氏の三世報応説をもちだして、それによって悲痛の情を昇華しようとしているのである（おかげでこの賦は、仏教論集『弘明集』巻二十九にも採録されることになった）。こうした結尾は、伝統的な哀傷の賦作のなかに、従前になかったあたらしい死生観がはいってきたわけであり、それはそれで興味ぶかく感じられる。

江淹がどれほど仏典をよみ、どれほど三世報応を信じていたのかはわからない。ただ彼は、「自序」で「天竺の因縁を説いた仏典を信じ、老子の清浄なる道をこのんできた」（原文は「深信天竺縁果之文、偏好老子清浄之術」といい、「与交友論隱書」でも「私は、まえから神農氏由来の服食の術を信じ、ずっと天竺の仏僧たちの説を固守しています」（原文は「既信神農服食之言、久固天竺道士之説」とのべるなど、しばしば仏と道とを並列している。そうしたことからかんがえると、排他的に仏教だけ信じていたというわけでもなさそうだ。おそらく仏でも道でも、なんでもいい。ただ、なんらかの教えにすがって、悲しみをいやし、また亡き息子の冥福をいのりたい、ということだったのだろう。

さて、哀傷三部作の最後に、「悼室人詩」十首の詩をみてみよう。

この詩は、江淹の妻だった劉氏の死をいたんだ作である。妻が死んだのが、第二子江亢（あざなは胤卿）の死の翌年だったとおもわれるので、この詩は元徽四年（四七六、江淹三十三歳）につくられたのだろう。この妻の

人となりや、死去の原因等については、旧時の中国のつねとして記録されておらず、詳細はわからない。あるいは、第二子が死んだことによって、江淹以上に気落ちしてしまったのが、原因だったのかもしれない。夫の江淹は、この妻が死んだときも、呉興に赴任していたはずだ。すると、やはりその死にもたちあえなかつたろう。その無念や、おもうべし。

この詩は十首よりなる連作であるが、ただ無作為にならべたのではなく、明確な意図をもつて十首を布置している。すなわち、

春・春／夏・夏／秋・秋／冬・冬／神女・神女

というふうには、前八首は二首ずつで四季を構成し、末二首に神女を登場させている。しかもその神女は、九首目は、高唐で楚王と契りをむすんだ神女（宋玉「高唐賦」）であり、十首目は、湘江で自沈した二妃（娥皇と女英）である。いずれの神女も、楚の地、ひいては『楚辞』とふかい関係を有しているのが注目される。

まず、第一首目の春にからめた詩をしめすと、

よき妻は とわに逝つてしまひ

佳人永暮矣

ふかき憂いは いまもおさまらぬ

隱憂遂歴茲

「閨房の」灯火は 夜もともることなく

宝燭夜無華

「閨房の」鏡は 昼もつつすものがない

金鏡昼恒微

桐葉には 緑の水玉がうかび

桐葉生緑水

空にただよう霧は 青々たる草におりてくる

霧天流碧滋

わかわかしい蕙草は まだ芳香をとどめており

蕙弱芳未空

蘭がおいしげり 鳥が仲間をしたってなく時節となった

蘭深鳥思時

「哀悼の思いをはらそうと」湘東の美酒をくんだが

湘醺徒有酌

心がふさいで 酒杯をもつこともできぬ

意塞不能持

というものである。江淹は、かぐわしい蕙草やおいしげる蘭という春景色のなかで、死んだ妻のおもかげをさがそうとしている。わかわかしい蕙草や蘭を、亡き妻と対比させることで、江淹の喪失感をつよくきわだたせているのも巧妙だ。憂いをはらそうと湘東の美酒をくんだものの、江淹、かなしくて酒杯をもつこともできなかったのである。

夏、秋、冬にからめた詩は引用を略するが、こうした四季にからめた構成は、おそらく潘岳「悼亡詩」連作を模したものである。そもそも、亡き妻をいたむ詩をつくろうとするや、江淹の脳裏にはすぐ、潘岳の詩が想起されてきたにちがいない。というより、「悼亡詩」をすればこそ、その形式を模した連作詩をつくろうとおもいたったのだろう。その意味で、江淹の「悼室人詩」連作はまちがいになく、その発想（妻をいたむ）や構想（四季にからめる連作）の点で、潘岳の詩のおかげをこうむっているといえる。

つづいて、最後第十首目の詩を紹介しよう。私見によれば、神女が登場する十首目の詩は、この連作の白眉だといつてよからう。

二妃（娥皇と女英）の霊が あでやかに瀟湘の水辺にたたずんでいる

二妃麗瀟湘

片方の妃がみえたとおもえば もう片方の妃がみえる

一有乍一無

亡き妻の霊も 雲にのつて水辺にあらわれた

佳人承雲氣

妻よ もう冥府にはゆかないでおくれ

無下此幽都

そなたは 二妃の後をおいかけながら

当追帝女迹

神車にのつて 水辺をゆききすればよい

出入泛靈輿

金色の江畔、二妃とともに光をあびながら

奄映金淵側

みどりこい山辺を散策しているね

遊豫碧山隅

そろそろくらいなり 日もくれてきたよ

曖然時將罷

夕暮れの風にふかれながら わが家にかえっておいで

臨風返故居

この詩では、二妃（娥皇と女英。舜帝の妻だったが、舜が蒼梧の地で死去したときと、ともに江湘の間で自沈した）の霊が瀟湘の水辺に出現し、亡き妻もその後につづいてあらわれた、という。これはおそらく、第一首と対応させたのだとおもわれる。第一首冒頭に「よき妻は とわに逝つてしまひ ふかき憂いは いまもおさまらぬ」（原文は「佳人永暮矣 隱憂遂歴茲」とあった。その逝つてしまった妻が、なぜか、江淹の眼前にあらわれたのである。そして、二妃とともに金色の江畔で光をあびながら、みどりこい山辺を散策している。

こうした場面、もちろん江淹がみた幻影だろう。だが、なんというすばらしい幻影であろうか。しかも江淹は、その幻影中の妻にむかつて、「もう冥府にはゆかないでおくれ」「わが家にかえっておいで」とよびかけているのである。こうした場面は、潘岳の「悼亡詩」にもなかった。おそらく、妻の死にたちあえず、遠地から哀惜するしかなかったたので、かえって幻想の翼がおおきくはばいたいのだろう。

亡き妻の幻影、そして幻影への哀切なよびかけ。これは、かずおおい六朝の詩文のなかでも、もつともうつしく、もつとも感動的な場面ではないかと私はおもふ。そうした意味で、この第十首は、悼亡（亡き妻をいたむ）の詩であるとともに、また妻恋いの詩でもあるといつてよいであろう。

以上、哀傷三部作をみてきた。呉興時代の前後は、左遷にくわえ、友の死、息子の死、そして妻の死と、彼をうちのめそうとする苦難が、いっきにおそいかかってきたのだった。かかる苦難の時期、江淹はおそらく、右のごとき詩文をつづることによって、精神の均衡をたもつことができたのだらう。その意味では、いわば人生の危機を、詩文をつくることでのりきったのである。あのころはオレ、ほんとにあぶなかった。でも詩文をつづることとで、なんとかのりきることができたな。後年、江淹はこうひとりごちたかもしれない（「十 江郎才尽」も参照）。

なんどかのべてきたが、江淹がこの「傷友人賦」「傷愛子賦」「悼室人詩」をかけた時期、すなわち宋末は、猜疑と相互不信にみちた険悪な時代であった。そうしたおそろしい世相のなか、江淹は自分の親友や妻子にむけて、こうしたすばらしい哀傷の名篇をつづったのである。周囲の世相が険悪であればあるほど、こうした身近な人びとへの哀傷の情は、よけいに現代の我われの胸をつつところがあるといつてよい。

高橋和巳氏は、「江淹の文学」（『作品集9 中国文学論集』河出書房新社 一九七二）という御論において、江淹を潘岳や郭璞の後をつぐ感傷主義の文人だと認定された。この感傷主義という認定は、おそらく「恨賦」「別賦」などの作や、江淹自身の「僕は本恨人にして」という自己規定に依拠したもので、たしかにそう称してもよからうとおもふ。しかし私は、どことなく作為的な感じのする「恨賦」「別賦」など（後述）よりも、ここで見えてきた「悼室人詩」や「傷愛子賦」の作こそ、せつなくもつつくしい感傷にみちた傑作であり、まさに「よい意味での」感傷主義の語にふさわしいとおもふのである。

さらに注目したいのは、江淹の感傷は、ただ妻子にだけむけられたのではない、ということだ。彼には、友の死を哀悼した「傷友人賦」という力作もあった。こうしたあつき友情をしめす作は、潘岳にはなかったものであ

る。その他、「齊故司徒右長史檀超墓誌文」は、恩人の檀超のための墓誌であるし、また「知己賦」は、やはり友人だった殷孚の死をいたんだ作である。これらも、周辺の知友へのつよい友愛や哀情をしめすものだろう。

こうした作の存在もかんがえると、江淹の場合は、潘岳よりも、感傷をささげる対象がひろかったと称してよい。つまり江淹には、知己や理解者がおおかったということだ。そしてそれは、ひとの生きかたとして、江淹のほうに誠実で、そしてしあわせだったことを意味している。それがけつきよく、潘岳の刑死、江淹の大往生という死にかたの違いに、つながっていったのだらう。

七 道教へのあこがれ

この江淹は、人生のおりおり、道家思想へのあこがれをかたっている。たとえば、本稿でしばしば引用してきた「自序」でも、

「呉興の地は」碧水や丹山があり、また珍木や靈草もはえていた。これらは、みな私が平生このんでいたものであり、辺地きたとはおもわなかった。山中ではなにもおこらず、ひたすら道書を友としつつ、悠然と山中へはいっていったものだった。

いつも夢みるのは、幽居に庵をむすんで俗世と縁をきること。庭には紅葉、池にはあおみがかった清水。左側には郊外がつづき、右側には沼地が帯のようにひろがる。春ともなれば平坦な岸辺を散歩し、すみきつた秋には家のなかでひとり酒をくもつ。侍姫は三四人、趙の美女は数人というところか。

とかたっていた（ともに再引）。寒門に生まれ、左遷や妻子の死という辛酸をなめてきた彼が、こうした道家の

思想に共感をよせようとするのは、わからなくはない心の動きだといえよう。

では、彼のこうした道家思想への傾倒は、本物だったのだろうか。一言で道家思想といっても、さまざまな要素をふくむが、まずは隠逸願望についてかんがえてみよう。

さいわいなことに、江淹は自分の隠逸願望を、まとまったかたちで説明してくれている。それは、呉興左遷をはじめ、その前後の時代にかいた、「報袁叔明書」「与交友論隱書」「無為論」の三篇である。とくに前二篇は、親友にむけて、真摯に、そして正面だって、自分の隠逸への考えをのべたものであり、内容も信頼してよいものだろう。そこで、本稿ではこの前二篇をよみながら、江淹の隠逸願望についてかんがえてみたい（「無為論」はつぎの章でとりあげる）。

はじめに、「報袁叔明書」をよんでみよう。

この書翰は、親友だった袁叔明こと袁炳にあてたものである。袁炳は、さきの「傷友人賦」でも哀悼されていたが、江淹の知己であり、なんでも相談できるあいだがらだった。江淹はその知己にむかって、自分の隠逸観をかたつたのである。

執筆された時期は、おそらく泰始五年（四六九）、江淹二十六歳の秋だったろう。前年、対策に合格した江淹は、巴陵王劉休若につかえて湘州にいたが、この年には建平王劉景素のもとにかえっていた。それゆえこの時期の江淹は、「さあこれから、尊敬する景素のもとでまたがんばろう」と、はりきっていたころであった。

僕はちゃんとおぼえています。叔明、きみと川辺で別れをつげ、手を取りあったけど、そのときはいつ再会できるともわからなかったよね。あれは空に浮雲がうかぶ、明けがたの時刻だった。せつなくて僕の魂はきえいりそうだったよ。

さて、きみからとどいた前便には、こうありました。「貴殿（江淹）は、天命をしまったなら、きっと越の地で心しずかに隠棲し、会稽の山で仙薬「の材料の仙草」をさがして隠棲するだろうね」と。「こうした好意的なことばをもらって」私は、友人とはほんとにありがたいな、とおもったものでした。

ところでこの私、昨年に事情あつて秀才に名をつらね「対策文を提出し」ましたが、冬の終わりになつても、「朝廷から」任官の知らせがありませんでした。まちくたびれ、焦燥にかられ、まったくやりきれませんでした。貴殿は私を「遁世の志をもつ」と評価してくださっておりますが、どうもそれは、私を知悉したものとはいえぬようですよ。

私は、狂士の行いには三通りがあると耳にし、つねに心中氣にかけております。

まず最上の行いは、天上をおのが家とし、四海をおのが池とすることです。そして裸身にて大笑し、蓬髪で吟行するのです。次善は、崖つぶちに端座したり、深窟に横たわったりすることです。そして朝に松脂をくらい、夜に仙經を誦するのです。その下は、街中にすんで栄爵を辞退したり、岩谷に隠棲して耕作したりすることです。そして交遊や客人と縁をきり、門をとじて外出しようとしません。

こうした狂士たちはだれも、西山に餓死した伯夷叔斉や東国で免官された柳下惠などの義人たちでさえ、「政治に多少ともかかわっているの」みならおうとはしません。かくすれば、田舎でくすぶ「って任官を心待ちにす」る私ごときは、狂士の風上にもおけぬ存在というべきです。

また、国家の重臣がいるということも、耳にしています。

彼らは仕官するや、帰郷するのかわずれます。そして南宮の前で議論して、主上を邪惡からまもろうとし、北門の下で忠勤にはげみ、主君を政治の道にしたがわせます。また「蘇秦のごとく」奇抜な弁舌をふるって

臣下どもを驚嘆せしめ、「曹沫のごとく」一劍の功をあげて、鄰国を戦慄させるのです。

ちよつと才のある者として、漢武のもとで談論をよくした「東方朔なる」者や、燕で怒髪した「荊軻なる」者がありますが、この二人は「小物すぎて」、国家の重臣のなかにはいりません。かくみれば、田舎でくすぶ「つて任官を心待ちにす」る私ごときは、重臣とはとてもいえません。

私のこれまでの進退については、いわずとも自明でしょう。

私は、資質に華やかさに欠けますし、内実も謹直がありません。ただ、弱冠のころ各地をたずねあるき、賢人たちの高論をお聞きしたことがあります。彼らは、「国につかえては忠であれ、家にいては孝をつくせ、金銭の扱いは廉潔であれ、交際にあつては信義をたもて」といつてくれました。そこで私は、「仕官すべく」意を決して梁斉の館をたずね、楚趙の門に仕官さがしにでかけ、いま、まさに十年なうとしています。

ですが、わが容貌は人びとを感服させられず、智謀も突出しておりませんでした。かくして、主君の恩にむくいられぬのを恥じ、飢寒にくるしむ始末（収賄の疑いで入獄したことをさすか）とあいなりました。いまは、近親はなにもいつてくれず、左右の者も相手にしてくれませんか。

この涼秋の陰陰とした一日、私は閑散とした部屋にひとりきりです。室内にはいつてくるのは塵ほこりだけ、鳥もやつてこないのので足跡もありません。琴書だけはきちんとそばにおき、妻子の生活をまもろうとしますが、それもできることやらという状況です。

いうまでもなく、史官の地位は、下役にすぎません。ですが司馬遷は、この役につきました。また執戟の職も、ほんの小官にすぎません。ですが揚雄は、この官になりました。私には、輕車將軍の李蔡や驃騎將軍の霍去病のごとき軍略や、辺地の交河や雲中を攻略するとき功業など、あるはずも、できるはずもありま

せん。ただ幸運にも、「司馬遷や揚雄のごとく」文史のごとき小官の末にくわり、ト祝のごとき卑官につくことができました。

このように私は「生活のため」ペコペコして衣をもとめ、「恥ずかしさに」顔をしかめつつ食をめぐんでもらっているのです。もし家族十人が、飢寒をさせられるほど「経済的基盤があるの」だったら、かりに病気で旧家にかえり、免職されて郷里にかえったとしても、あぐらをかいておおいばりし、酒をのんで周囲を睥睨していることでしょう。さらに五侯のごとき高官が召しふみをもつてやってき、三公が幣帛へいはくをおくってくれたとしても、私は「任官を拒否して」山林に隠棲することでしょう。こうした私の真情は、知者たる貴殿だけにもうしあげられることで、俗人たちにはかたつても無駄なことです。

いまは仲秋の時期、秋風がふきよせ、平原は蕭条としております。水鳥は孤洲にたち、蒼葭は河曲で黄色くなりました。これらの景色をしずかにみつめていると、憂いの情もしずまってきました。

賢人たちが早世し、花びらもしぼむことをおもえば、私だけが特別で、長生きできるはずがありまじょうか。「私が死んで」松柏が墓地をおおい、墳墓が天たかくもりあげられたら、いつ酒をくみあえるというのでしょうか。かくおもえばおろおろし、発狂するかのよう。貴殿のご自愛をお祈りするばかりです。

僕知之矣、高舉為別、執手末期。浮雲色暁、悵然魂飛。

前辱贈書、知命僕「息心越地、友人幸甚。

採藥稽山、

去歲迫名茂才、冬尽不獲有報、引領於邑、情詎可及。足下推僕者、不二談也。

僕聞狂士之行有三、窃嘗志之。其奇者則以「紫天為宇、裸身大笑、

「環海為池、被發行歌、

其次則「堅坐崩岸、朝餐松屑、其下則

「僵臥深窟、夜誦仙經、

「辭宋城市、塞逕絕實、退耕岩谷、杜牆不出、

然者皆羞為「西山之餓夫、而況其鄉党乎。

「東國之黜臣、

或有社稷之士、人而忘歸、則「爭論南宮之前、衛主於邪、至乃

「伏身北闕之下、納君於治、

「說之奇、驚畏左右、劍之功、震慄鄰國、

夫能者唯「橫議漢庭、且猶不數、而況於鄰里乎。

「怒髮燕路、

若僕之行止、已無可言矣。材不肖文、徒以結髮遊學、備聞士大夫言。

「質無所直、

曰、「在國忠、取與廉、故「拂衣於梁齊之館、且十年矣。

「処家孝、交友義、抗手於楚趙之門、

「容貌不能動人、竟慚君子之恩、近親不言、

「智謀不足自遠、卒離饑寒之禍、左右莫教、

涼秋陰陰、獨立閒館。輕塵入戶、命保琴書、而守妻子、其可得哉。

「飛鳥無跡、

故 国史小官也、而子長為之、僕非有 輕車驃騎之略、幸以 盜竊文史之末、
 執戟下位也、而子雲居之。 交河雲險之功、 因循卜祝之閒。
 故 俛首求衣、 若十口之隸、 去於饑寒、 從疾旧里、 箕坐高視、
 斂眉寄食耳。 斥歸故鄉、 拳酒極望。
 雖 五侯交書、 僕亦在南山之南矣。 此可為智者道、 難与俗士言也。
 群公走幣、

方今仲秋風飛、平原彩色、 水鳥立於孤洲、寂然淵視、憂心辞矣。
 蒼葭變於河曲、

独念 賢明蚤世、僕亦何人、以堪久長。
 英華殂落、

一旦 松柏被地、何時復能銜杯酒者乎。 忽忽若狂。 願足下自愛也。
 墳壟刺天、

この書翰で江淹は、自分の隱逸觀をかたっている。それは、私が隱逸するだろうなんて、君は私をかいかぶっているよ。私は狂士にも重臣にもなれぬ男だ。なんの才もないから、ただ文史や卜祝のごとき卑官について、口に糊しているだけ。ああ、わが家族が飢寒をさけられるほど、きちんとした経済的基盤があればなあ。そうすれば、こんな私も隱棲できるのだが——というものである。

ここでの江淹は、たいへん謙虚であり、また正直である。同時期の他文人の美文書翰とはちがって、気どりや虚飾でかざりたてることがない。たとえば、

昨年に事情あつて秀才に名をつらね「対策文を提出し」ましたが、冬の終わりになつても、「朝廷から」任官の知らせがありませんでした。まちくたびれ、焦燥にかられ、まったくやりきれませんでした。

わが容貌は人びとを感服させられず、智謀も突出しておりませんでした。かくして、主君の恩にむくいらぬのを恥じ、飢寒にくるしむ始末となりました。

このように私は「生活のため」ペコペコして衣をもとめ、「恥ずかしさに」顔をしかめつつ食をめぐんでもらっているのです。

などは、すこし自虐的な感じがするほどだ。

江淹はけっきょく、「家族を飢寒にさらさぬため、隠逸はできないよ」とかたっているのだが、これは、じつに率直な発言だといつてよい。このころ、六朝貴族たちに流行していた隠逸。江淹とて、それにひかれなくてはなない。だが彼の場合、それは「もし家族十人が、飢寒をさけられるほど」「経済的基盤があるの」だったら」という条件つきなのである。

こうした江淹のことは、現代の我われにも、じつにわかりやすいものといえよう。寒門に生まれ、経済的にめぐまれぬ彼だったら、たしかにこうした隠逸観をもつだろうな、とおもわれる。江淹は袁炳にだけは、こうした本音をもらすことができたわけであり、彼はよい友をもったといふべきだろう。

この「報袁叔明書」における隠逸観（実践したいが、経済的基盤がないので自分には無理）が、正直なものであることは、もうひとつの袁炳あて書翰「与交友論隱書」でも裏づけられる。そこで、つづけて「与交友論隱書」もみてみよう。

この書翰も、知己の袁炳にむけて隠逸観をつづつたものである。江淹はこの袁炳とは、なんども隠逸について

議論していたようだ。右の「報袁叔明書」をかけた四年後、三十歳（元徽元年、四七三）の江淹は、またこの書翰をかつて隠逸を論じた。この時期は、江淹が呉興に左遷させられる前年であり、拳兵の是非をめぐる、主君の景素とのあいだに、すこしすぎま風がふきだしたところである。

私は以前、海の浜辺や山の窟穴にすみ、漁獵ぎょりょうの民と仲間になっていました。自分でも、すぐれた資質をもちえず、諸侯にみいだされる才もありえないと、おもうしだいです。

むかし、梁伯鸞は会稽の田野に隠棲し、高伯達も華陰の山にかくれました。私はこうした隠者たちを敬慕しておりますが、自分では真似ができません。

かつて子路の「親をやしなうために仕官する」ということばに感銘をつけ、私も「立身でなく」生活のために仕官したものでした。ですから、青組や紫綬、龜紐、虎符をもった高官になる気はなかったのです。ただ史官や巫卜ふぼくのごとき下官となつて、世の賤事をおこなつ「て口に糊し」てきただけです。

こうして、たちまち十年すぎましたが、いまも私は、衣食もまかなえられぬ状況です。どうしてでしょう。それは、私に修正不能の欠点が五つあるからです。

一つめは、身体がよわくて、いったん横になると、なかなかおきれぬことです。二つめは、世間できちんと交際すべきところ、ものうくて手紙もかけぬことです。三つめは、客人と対したとき、ろくにしゃべれないことです。四つめは、なにことも億劫なたちで、危険なときでも、にげられないことです。五つめは、うまくつきがんで、つまらぬことをしゃべって、よく他人から苦情をもつたてられることです。

こうした欠点が五つもあるくせに、長所はひとつもなし。これでは世間にうけいれられるはずがありません。かかる欠点をしりながら、なおせられぬのは、生来の性格なのでしょう。それは、雞や鴨に、あの鸞鳳

のかがやかしい羽毛がはえてこないのと、おなじことなのです。

まして私は今年で、三十になってしまいました。白髪がまじり、夜も輾転反則してねむられず、おもいなやむことがしばしばです。きっと私は、空から隕石がおちるように、はかなくなることでしょう。みじかい寿命は半ばをすぎ、長寿などのぞめるはずもなく、ただごまかして日々をすごしています。じつさい、筋肉はおとろえ骨もひえかたまり、あちこち病氣だらけ。そのうえ気性はがんこで堅物、むすつとおしだまっています。

私は、まえから神農氏由来の服食の術を信じ、ずっと天竺の仏僧たちの説を固守してきました。ですから、「道家のいう」清浄な境地をまもったり、神丹の薬をつくったりするのは、たいへんすきですし、「仏家のいう」善事をおこない、現世を解脱することも、すばらしいこととおもっていました。

ですが、いまはただ野菜をつみ、詩書を誦する日々をねがうだけです。そして、天命にやすんじ本性をつくし、日々を用心ぶかく謙虚にすごし、けっして紛糾をおこさぬよう心がけています。

それは、妻子が私に生活の資をたより、庇護を必要としているからです。私がのぞむのは、五畝の宅と半頃の田、そこに鳥が檐ひさしにとんで、水が階下をながれてゆく。こうした生活ができれば、私は隠棲の日々をおくり、友人たちと顔をあわせることもしないことでしよう。

かつて神仙が峨眉山にのぼり、流沙をこえ、金石をねった仙薬を服食し、仙經をよんだことなどは、たしかに効験があったそうです。ですがそうしたことは、「妻子をかかえる私が」現在かたるべきことではありません。こうした私の隠逸志向、理解できぬなどとだれがいいでしょう。とくに青鳥のごとき貴殿は、きつとわかってくれるはずです。こうした私の思い、字句にかくべきかもしれませんが、でもわざわざ口にする

ほどのことではないですね。

淹者海濱窟穴、弋釣為伍、自度非奇力異才、不足聞見於諸侯。

每承「梁伯鸞臥於会稽之墅、心嘗慕之、而未能及也。

「高伯達坐於華陰之山、

嘗感子路之言、不拜官而仕。無青組紫紱龜紐虎符之志、

但欲史歷巫卜、為世俗賤事耳。而彰然十載、竟不免衣食之敗。何則性有所短、不可韋弦者有五。

一則体本疲緩、臥不肯起。二則人間心修、酷懶作書。三則賓客相對、口不能言。四則性甚畏動、事絕不行。

五則愚婞妄癡、輒被口語。有五短而無一長、豈可処人間耶。知短而不可易者、所謂輪椎分定也。

猶如雞鷺之有毛、不能得鸞鳳之光采矣。

況今年己三十、白髮維生。長夜輾轉、乱憂非一。以溘至之命、如星殞天。

促光半路、不攀長意、徒自欺取。筋驚髓冷、殊多災恙。心頑質堅、偏好冥默。

既信神農服食之言、守清淨、煉神丹、心甚愛之、

久固天竺道士之說。行善業、度一世、意甚美之。

今但願「拾薇藿、樂天理性、不踐過失之地耳。

誦詩書、斂骨折步、

猶以「妻孥未奪、望在「五畝之宅、鳥赴檐上、則請從此隱、長謝故人。

「桃李須陰、半頃之田、水幣階下、

若乃「登峨眉、餐金石、嘗聞其驗、非今日之所言也。

度流沙、讀仙經、

誰謂難知、青鳥明之。貴布筆墨、然亦焉足道哉。

この「与交友論隱書」では、「詣建平王上書」とおなじく模擬の手法（嵇康「与山巨源絶交書」に模する）をもちいている。そのため、モデルたる嵇康書翰の文体にあわせ、文章も、江淹にしては散体のおおいい行文になっている。

ところで、江淹の隱逸觀に注目すると、この書翰においても、江淹はやはり、隱逸を志望してはいるものの、妻子をやしなうために実行はできない、とたたっているのに注目しよう。江淹にとっては、妻子との平穩で安定した生活が、なによりも大切だった。それは、「五畝の宅と半頃の田、そこに鳥が檐にとんで、水が階下をながれてゆく」ような日々である。こつした日々をおくるためには、経済的な基盤が必要になる。だから、その基盤がとこのうまで、自分は隱逸などせず、仕官をしつづけるつもりだ、ということだろう。

これと同種の発言は、四年前の「報袁叔明書」でもかたっていた。要するに、両書翰に共通するのは、「経済的安定が第一、隱逸は第二」という考えかたである。

江淹にとって、隱逸するというのは、仕官をやめるということであり、それは、大切な経済的安定をすてさることにつながる。先祖代々の莊園を有し、秩禄など齒牙にもかけぬ門閥貴族ならともかく、自分ごとき寒門出の男などが、軽々に実行にうつせるようなことではない。江淹はこつおもっていたのだらう。こつした堅実な考えかたは、江淹のごとき寒門出身者には、とつぜんありえるものであり、ぶれることのない江淹の本音だったといつてよい。

しかしながら、六朝の文人では、ここまで率直な発言をするひとは、ほとんどいなかった。当時であつては、「安んぞ久しく「俗世に」留滞するを得ん」「四皓が隠棲した」商山に白薇饒おほからん」(呉均「堯湘州贈親故別詩」)などと隠逸ふう詩句をつつておきながら、貴顕から声をかけられると、さっと食言し、出仕してしまうような連中が、すくなくなつたのである。そうした連中にくらべると、江淹書翰の発言は、じつに正直なものいいだといつてよい。

これを要するに、江淹の隠逸観は、生涯ずっと山林にこもろうとか、世俗がきらいだとかいう、社会に背をむけた高踏的なものではなく、ある程度立身して経済的基盤をかため、それから仕官をやめて気らくにすごそう、というものだったのだらう。現在ふうにいえば、まずはがっちり貯蓄をふやし、それから、田舎で悠々自適の日々をおくろう、というものだらうか。

こうした考えかたが、隠逸願望といえるかどうかは、隠逸の定義のしかたにもよるので、なんともいえない。ただ南朝の隠者の伝記を見ると、しばしば、

亦た山沢を好んで、徵辟せられるも一として就く所無し。壽を以て終えたり。

跡を幽深のびに遁れ、巖石いしの間に卒せり。

時に之を謫仙なりと謂い、終わる所を知らず。

などの語句がみえるところからすると、江淹のほうは、かなりゆるい隠逸願望だったといつてよいだらう。

では、江淹の道家思想のなから、隠逸以外の志向についてもみてみよう。もし「経済的安定が第一、隠逸は第二」というのが彼の隠逸観だったとすれば、隠逸以外の志向もどれほど本気だったのか、疑念がでてくるのだが、どうであらうか。

江淹は彼の詩文のなかで、また遊仙へのあこがれをも、随所でかたっている。そこでこんどは、彼の遊仙志向をみてみよう。まず神仙それ自体へのあこがれを叙したものと、**「雲山賛」**という賛**「の連作」**がある。そのなかから、**「王太子喬」**の篇を紹介すれば、

王子喬は登仙の術をこのみ

仙薬が完成するのをまたなかつた

さつと鶴にのつて　とおい天空にとびさり

笙で鳳凰の鳴き声をまね　高山にたたずんでいる

その高山には　春草ははえておらぬが

谷には千年の幽蘭が　ひろがっているだろう

喬は雲の衣を身にまとい　さつととびさつたが

彼の龍駕はいつ　現世へかえってくるのだらうか

というものである。古伝説では、この王子喬は周の靈王の太子だったとされる。仙道をまなび、白鶴にのり、吹笙しながら空中をとびかうことができたという。その王子喬へのあこがれが、率直に叙された詩である。同種のものとして、**「清思詩」** **「采石上菖蒲」** **「游黄檗山」** **「雜三言五首」**などもあげられよう。

つづいて遊仙、つまりじっさいに仙界へたどりつき（もちろん空想だろう）、そのようすを叙した賦を紹介してみよう。それは、**「金丹、すなわち仙薬は、まなべば、きちんと作製できるはず」**という意の標題をもつ、**「丹砂可学賦」**という作である。ここで江淹は、仙界への行きかたやそのすばらしさを、詳細に叙してくれている。きらびやかな修辭と語彙とでくみだてられた、幻想味ゆたかな作品である。

子喬好輕拳

不待煉銀丹

控鶴去窈窕

学鳳对嶢峴

山無一春草

谷有千年蘭

雲衣不躑躅

龍駕何時還

全体はながいので、ここでは仙界にたどりつき、そこにそびえているという、豪華な宮殿のようすを叙した一節を紹介しよう。それは、

「神仙たちがすむ世界では」高低さまざまな碧台が、暗がりになつていかとおもえば、すみきつた金宮が、煌々とかがやいている。刺繍をほどこした小門では、蓮花が幻惑するかのようにであり、錦でできた垣根では、蒲萄が見えかくれるかのようだ。赤光が稲妻のようにパツとひかり、翠霧がただよいつつ上空にのぼってゆく。軒檻は曲虹のおおきくまがり、階段は鯨魚かとおもわれるほどながい。

こうした、神仙たちがすむ豪華な宮殿たるや、龍宮とよべばよいのだろうか。それとも切利（きり）と名づけられようののだろうか。

「曖碧台之錯落、幻蓮花於繡闥、」 葩丹光而電燐、軒憊惘於冤虹、惑龍宮之殿称、
「耀金宮之瓊玲、」 化蒲萄於錦屏、」 颯翠氛而杳冥、」 階侘傺於奔鯨、」 迷切利之宮名、

というものである。豪華にして絢爛な神仙世界の宮殿が、対偶や華麗な語彙を多用して活写されている。ふしぎな描写がおおいが、ここには江淹がみた幻想も混入しているのだろう。

さらに、煉丹それ自体をテーマにした詩も、つたわっている。あるとき江淹は、親友だった殷孚という人物に、煉丹の精製法をしるした書物を寄贈したらしい。そして煉丹の法をめぐって、殷孚と詩を唱和したようだ。それが、この「贈煉丹法和殷長史」（煉丹法を叙した書をおくり、煉丹について殷長史と詩を唱和した、の意）であり、ここの「殷長史」は殷孚をさす。

ここでは、この詩の後半を紹介しよう。

「君に寄贈する」煉丹の書物はクルツとまいて

竹箱に悠々といれられるほど「の小卷子」だよ

「でもこの書物は」明月のごとくあざやかで

歳末の寒冷のなかでも光輝をはなっている

「この書物によつて」仙薬が完成できたなら

神仙となつて神鳥がとんでくるのをまつことにしよう

この詩でも、煉丹精製法を叙した書物（この詩の前半にでくる『周易参同契』か）のことを話題にし、二人で仙薬をつくつて、「神仙となつて神鳥がとんでくるのをまつ」とかたっている。江淹と殷孚とは、煉丹の研究をしていたのだろうか。

後のことであるが、江淹はこの殷孚が死んだとき、「知己賦」をつくつてその死をいたんだ。その序文で江淹は殷孚のことを、

陳郡の華というべきは、もと吏部郎だった殷孚そのひとに指を屈しよう。彼は博学で、なに「ことにも通じており、よまない書物はなかった。詩文をよくたしなんだが、とりわけ奇抜な作をこのんだ。彼は隠逸しよう」と念じていたが、その名声はすでに京師をふるわせていた。才識はじつに奥ぶかく、氣宇も遠大だった。あの安期生や魯仲連でも、この殷孚にはかなわないほどだ。

とかたっている。「彼は隠逸しよう」と念じていた」（原文は「志隱岩石」とあり、また隠者ふう人物たる安期生や魯仲連と比擬されるからには、この殷孚も、隠逸や煉丹の術に関心があったのだろう）。

こうした詩文をみるかぎり、江淹は遊仙や煉丹に対して、たいへん傾倒していたと断じてよさそうだ。じつさい、右にひいたのは、ほんの一部にすぎない。江淹には遊仙や煉丹以外にも、「それに関連した」珍奇な本草や

珠藥不盈簞

譬如明月色

流采映歲寒

一待黃冶就

青芬遲孤鸞

鉱物、色彩に言及した詩文がすくなくない。江淹は、自分でも「奇抜なものや異物をこのみ」（原文は「愛奇尚異」、「自序」の一節）とかたっていたが、この種の珍奇な本草や鉱物、色彩への関心が、それに該当するのだろう。かくみてくれば江淹は、現代ふうにいえば、理系の知識ももった博学の知識人だったようである。

松浦史子『漢魏六朝における山海経の受容とその展開』は、江淹のそうした方面への関心を精力的に調査したものだ。とくにその第一部では、じゅうらい注目されてこなかった「赤虹賦」や、「丹砂可学賦」「銅劍贊」「遂古篇」「遷陽亭」「空青賦」「草木頌」などの詩文をとりあげ、煉丹や珍奇な事物に対する、江淹の執着ぶりを指摘されている。ただ注意したいのは、これらは子類の書でなく、集類つまり「韻をふんだ」詩文として、かかれているということだ。つまり、彼は博学の知識人であったが、それ以上に、才腕すぐれし文人でもあった。それゆえ、彼の「奇を愛し異を尚ぶ^{たつと}」執着は、学術的著作としてでなく、こうした詩文として昇華されたのだろう。ところで、江淹の遊仙や煉丹へのあこがれは本気だったかどうか、の問題にかえろう。結論的にいえば、隠逸とおなじく、一時的に傾倒はしても、本気でうちこむようなものではなかった、といってよからう。

私見によれば、こうした遊仙等へのあこがれは、いわば学術的、趣味的関心というべきものにすぎない。なにもの（たとえば、妻子やおのが立身）を犠牲にはらっても、この道につきすんでゆこう、というようなものはなかった。そのためだろう、江淹は道教へのあこがれに言及しながらも、じっさいは官位をすてて隠遁したり、山林にはいつて煉丹にはげんだりするようなことは、けっきょくしなかった。いくら詩文で熱心そうにかたっはいても、江淹の遊仙等への志向は、けっきょくは、趣味や関心程度のままでおわってしまったのである。

江淹にかぎらぬが、当時の文人が、一族や家族の浮沈にかかわる自己の立身と、個人的な趣味とのどちらが大事かといえ、答えはいわずともあきらかだろう。だから彼らは、いくら遊仙や煉丹に熱意をもったとしても、

官を辞して仙道修行に猛進することはなかった。

茅山派道教を大成した陶弘景がいるではないか、というかもしれない。だが、彼は例外中の例外にすぎない。

江淹もふくめ、一般の人びとは、おそらく趣味レベルの関心でおわったとおもわれる。それは、金秀雄『中国神仙詩の研究』が、

六朝詩人は、概ねことばだけの鍊金術を歌ったのである。その理由は、彼らにはまだそれを実行に移すだけの十分な気概や情熱に乏しかったからだろう。封建制の世襲的身分を捨て去ってまで入山し、入手困難な薬剤を求める鍊丹道の行為は、大変な勇気を要するものだったのである。

というとおりだったろう（九二頁）。

じつさい、江淹はさきの『与交友論隱書』でも、遊仙や煉丹の「彼にとつての」軽さについて、

私は、まえから神農氏由来の服食の術を信じ、ずっと天竺の仏僧たちの説を固守しています。ですから、「道家のいう」清浄な境地をまもったり、神丹の薬をつくったりするのは、たいへんすきですし、「仏家のいう」善事をおこない、現世を解脱することも、すばらしいこととおもっていました。

ですが、いまはただ野菜をつみ、詩書を誦する日々をねがうだけです。そして、天命にやすんじ本性をつくし、日々を用心ぶかく謙虚にすごし、けっして紛糾をおこさぬよう心がけています。

それは、妻子が私に生活の資をたより、庇護を必要としているからです。私のがぞむのは、五畝の宅と半頃の水、そこに鳥が檐にとんで、水が階下をながれてゆく。こうした生活ができれば、私は隠棲の日々をおくり、友人たちと顔をあわせることもしないことでしょう。

とかたつていた（前引）。江淹にとって、なにより優先すべきことは、家族を飢寒にさらさぬことだった。その

ためには、仙道や煉丹のときに、いつまでもかかずらうわけにはゆかない。それらはしよせん、趣味程度のものにすぎないからである。だから彼は、山林にこもったりせず、家族との平穏な生活、そしてそれを保証してくれる官爵に、ずっと執着しつづけたのだった。江淹というひとは「いや彼だけではなく、当時の人びとは」、仙道修行に専念するには、家族や官爵への執着がつよすぎたのである。

その意味で、もし実践にうつすときがあったとすれば、呉興へ左遷された失意のときと、最晩年、梁朝下で金紫光祿大夫となり、また醴陵伯に改封されたときだろう。

前者の時期は、左遷「や妻子の死」の憂さばらしとして、遊仙や煉丹に没頭しえる可能性があった。また後者の時期は、経済的に安定していたので、致仕して隠逸にすむチャンスだったろう。だが、彼はこうした時期であつても、入山して煉丹に専念したり、武帝に骸骨を乞うたりすることはなかった。失意のときであろうと、得意のときであろうと、けっきょく彼は現世をさることはなかったのである。かく最後まで俗世にしがみついていた生涯こそ、彼の道教願望の軽さや付けやき刃ぶりを、ものがたっているといえよう。

ただ、そうだったとしても、私は、江淹の道教願望など研究しなくてもよい、といっているわけではない。彼が道教へあこがれていたのは、彼の詩文をみれば明白なことである。とくに、詩文中に頻出する遊仙への志向や煉丹の知識は、同時代の文人たちを凌駕するものであり、そうとうレベルがたかいものというべきだろう。とすれば、「かるく、また一時的なものだったとはいえ」そうした志向は、彼の文学にふかい影響をあたえているはずであり、その影響ぐあいを解明することは、彼の文学研究における重要なトピックになることだろう。

くわえて、この種の道教へのあこがれは、江淹だけにかぎられるものでなく、当時の士人たちに共通する心性でもあった。隠逸や遊仙への志向をかたることは、当時の流行でもあったのである。じつさい、人生不如意のと

きは、おおくのひとが「俗世にいたくない。山林にこもって自由にすごそう」と口にしている（拙著『六朝書翰文の研究』第十章参照）。とくに江淹の場合は、左遷や妻子の死など、実生活で辛酸をなめたので、心中に隠逸願望をもつことがおおかつたに相違ない。その意味で、南朝における隠逸願望や遊仙文学を解明するためには、江淹の「丹砂可学賦」や「赤虹賦」などは、重要な資料になることはまちがいない。

しかし、そうであっても、江淹はわかいとき、内心は立身をのぞみながらも、おもてむき、「松柏のしたにすむ隠者をみならおうとしますが、世俗の利得をおいかける自分はずかしくおもわれます」（『從冠軍王建平王登廬山香爐峯詩』）と叙していたことは、わすれるべきではなからう。「三 下獄による教訓」でものべたように、ここでの隠者言及は、ただ主君に調子をあわせてただけにすぎない。当時の文人たち、とくに寒門出身者は、主君におもねろうとして、ときに心にもない隠逸願望をかたることもあったのである。

ただ、他のひとの場合は、せいぜい口にしたなり、心でもったりするだけであわっていた。ところが、江淹は詩文の才にめぐまれていたので、そうした思いをさつと詩文につづり、しかも憧憬や幻想にみちた、かがやかしい名篇にしたててしまったのである。そのため、彼の道教志向がとくにめだってしまった、ということもあっただろう。

いずれにしても、江淹は人生のおりおりに、隠逸や遊仙に言及したけれども、実生活では終生、「山林にはこもらず」官にしがみついていたひとだということは、つねに念頭においておくべきだろう。ただ表面上の字句だけみて、その道教志向を真にうけてはならないのである。

八 宋から斉へ

江淹の左遷から二年たった元徽四年（四七六、江淹三十三歳）の秋七月、ついに劉景素は挙兵した。ところが、この景素の軍、宋廷がつかわした軍勢にあえなくやぶれてしまった。ながく謀議をこらしたわりには、あっけない敗戦であつた。

この挙兵、じつは綿密な計略にもとづいた蹶起、というものではなかった。ある日、景素の取りまきのひとりだつた垣祗祖が、とつぜんわずか数百の軍をひきいて、京口にいる景素のもとへかけつけてきた。そして「建康は騒乱状態ですので、いま進攻すべきです」といったのだつた。じつは、これはなにかば虚言だつたのだが、景素はこれを信じ、うかうかと挙兵してしまつたのである。

つまり、景素の挙兵は、満を持しての一斉蜂起などではなく、なしくずしに挙兵させられてしまつたのだつた。いっぽう、宋廷ではこの挙兵を予想しており、対応策もすっかりととのつていた。廷臣の楊運長らは、すぐさま段仏榮や任農夫らを中心とした鎮圧の軍勢を展開させ（蕭道成もこれに協力した）、あつというまに景素の軍を潰滅させたのだつた。かくして景素は乱戦のなかで斬殺され、その死体は京口にほうむられた。享年はわずか二十五であつた。

この挙兵が失敗したのは、慎重にしすぎて時機を逸してしまつた、ということにつきる。泰豫元年（四七二）に異図をいだいた（丁氏『江淹年譜』による）とすれば、挙兵するまであしかけ五年もたつてゐる。これだけ時間をかければ、いくら密議だといつても、やがては計画がもれるはずだ。じつさい、宋廷はとつくに景素の異図に気づいていて、しばしば偵察をもぐりこませたり、逆に蹶起をそのかせたりしていたほどである。挙兵とい

うものは、相手の虚をつく奇襲でないと、うまくゆかない。これほど異図がよまれていたならば、とうてい成功はおぼつかなかったといわねばならない。

その意味で、景素にとつて最大の好機は、これより二年前（元徽二年、四七四）におこった、桂陽王の乱のときだったろう。桂陽王の劉休範（江淹を秀才に推挙してくれた人物だった）が尋陽で反したとき、景素は、宋廷をまもるという名分で、大軍を擁して建康に軍をすすめた。このとき、宋廷の権柄をにぎるべく決断しておれば、あるいは景素の異図は、成功していたかもしれない。

だが、そのときも景素は、優柔不断なままであった。けっきょく彼は両端を持したままで、政権を奪取する行動をおこなうことができなかったのである。彼はたしかに慎重で、頭脳明晰でもあったかもしれない。しかし慎重の度がすぎて、ここぞというときの決断力に欠けていたのだった。

いっぽう、江淹にとつては、左遷されていたことがさいわいした。遠方の呉興令に左遷されていたので、とつぜんのことながら、この反乱には無関係だとみなされ、いっさいのおとがめはなかったのである。

この江淹、自分を呉興令に命じた劉景素が死んだわけだから、もう辺鄙な呉興などにいる必要はない。景素がやぶれたあと、江淹は建康へかえってきた。そのことを「自序」では、

この呉興にいること三年、建平王さまは朱方（京口）の地で、ついに敗亡されたのである。そこで、私は建康にかえつたのだが、時勢が剣呑であつたので、志をまもつて故郷で閑居し、高位のひとは交際しなかつた。

とかたつてゐる。これによると、景素がごろされた年か、その翌年あたりに建康へかえってきたのだらう。さらに彼が京口に帰郷したときにつくつたとおもわれる、「還故国」という詩をみてみよう。

漢の賈誼は長沙に配流されて落涙し

楚の屈原は辰陽に流浪してかなしんだ

古と今とを比較すべきではないが

遠地への左遷は私にとつても悲痛だった

呉興での山中は寂寥そのもの

たつたひとり空堂で不遇をかこつていたものだ

北の郷里では三度も露がおり

南の呉興では二度も霜がおりた

ところが海内で新風潮があらわれて

国運もようやく隆盛にむかいはじめた

浮雲は山川をだきかかえ

遊子たる私も故郷をこいしくおもふ

いそぎ桃花の渚を出立し

春風のふく地へ宿をとつた

紅草は電のようにきらめき

緑樹は煙霧のなかでがやく

声高にうたいながら故郷へむかい

ひくく嘆声をあげつつ笙の音にあわせる

漢臣泣長沙

楚客悲辰陽

古今雖不挙

茲理亦宜傷

山中信寂寥

孤景吟空堂

北地三変露

南簷再逢霜

窃値竇海關

仄見圭緯昌

浮雲抱山川

遊子御故郷

遽発桃花渚

適宿春風場

紅草涵電色

緑樹鑠煙光

高歌傔閑国

微歎依笙篁

あの不死の靈芝の草のように

請字碧靈蓀

ずっとこのまま芳香をはなつてほしいものだ

終歳自芬芳

江淹にはめずらしい、あかるく軽快な気分で作である。この詩は、標題が「還故国」なので、建康帰還後、さらに故郷の京口にもどったのだらう。詩中に「桃花渚」「春風場」などがあるので、このときの季節は春。するとこの詩は、景素敗亡の翌年、すなわち元徽五年（四七七）の春につくったものと推測される。この詩では、後半の「声高にうたいながら故郷へむかい ひくく嘆声をあげつつ笙の音にあわせる」あたりに、ひさしぶりに帰郷できた江淹の喜びの気もちが、よくうかがえる。京口へかえった江淹、もはや母や妻はいなかったとしても、なつかしい親族や知友たちと、再会をよろこびあったことだらう。

注意したいのは、この詩では、景素の敗死をいたむとか、その仇をうとうとかの心情は、いっさいうかがえないということである。それどころか、「海内で新風潮があらわれて 国運もようやく隆盛にむかいはじめた」というのは、景素が宋廷にころされたことをさすのだらう。とすれば、このときの江淹にとっては、敗死した景素など、すっかり過去のひとになっていたのである。呉興に左遷されていたときは、景素を綿々としたっていたのだが、彼がころされるや、その種の未練はすっかりきえてしまったかのようだ。こつした豹変ぶりは、「過去のしがらみをすてさつて、いさぎよいなあ」とも評せるし、また「あれほど敬慕していたのに、あまり節義のひとではなかったんだなあ」もいえなくもない。

ただ、六朝の当時では、こつした出処進退をとるのは、めずらしいことではない。とくに江淹のごとき、寒門出身の人物の場合は、行動が露骨なほどドライである。彼らにとつて主君なるものは、ただ忠誠をささげる対象というだけでなく、自分を立身させてくれる存在でなければならない。立身させてくれ、禄利をあたえてくれる

存在なら、恩にきて忠誠をつくすが、そうした利益が提供してもらえないとなれば、それで関係はきれてしまうのである。門閥貴族だった場合は、「先祖代々の……」という意識がつよいので、すこし進退のしかたが複雑になるが、それでも基本的には似たようなものだ。節義に殉じて自害するとか、豫讓のごとく主君の仇^{あた}をうつとかは、この時代の人びとに期待してはいけないのである。

帰還後、江淹は故郷で「けつきよくは短期間で終わったのだが」浪人生活をしていた。このとき江淹は、どんなことをかんがえていたのだろうか。それをおしえてくれるのが、この時期につくった「無為論」という作である。「還故国詩」と同年につくられたとおぼしきこの作には、仕官と隠棲のあいだ、そして儒、道、仏のあいだをゆれつぐ、彼の心情がよく表現されている。そこで、この「無為論」の内容を概観しよう。

私はかつて、正覚にいたらんと祈念し、善行に帰依したのだった。友人らは、私に出仕するようすすめた

が、私は、仏道帰依をあらためなかつた。そこで「無為論」をつづつたのである。

奕葉公子という者がいた。彼は七代にもわたって、ずっと高官をだした名族の出身で、いつも絹の黼裳を身にまとっている。そして、背に煌々たる長剣をおり、腰にそうそうとなる佩玉をつけていた。ときに斉の稷下にあそび、ときに梁王の梁苑をおとずれ、英雄がいるときいてはすがりつき、利害がからむとすれば、こ相伴にあずかるうとした。かくして、この奕葉公子、朱履をはき、宝馬にのり、玉勒をとって金羈をかがやかせ、無為先生の門前までやってきたのである。そして無為先生に、つぎのようにいった。

先生は知徳ががやき、嵩山や華山とてその高さをきそえず、また道義も高遠で、大海とてその深さをたとえられませぬ。どんな学問もまなばぬものなく、どんな事象にも通じないものがないほどです。姿容は閑静で、談笑ぶりも温雅でいらつしやる。釈迦三蔵の仏典、老子道德の書物、孔子六芸の文、諸子

百家の術など、すべて奥義をさとり、妙味を体得しています。それは、あたかも明鏡のなかで検分し、掌のうえでつかむがごとしです。

ですが私は、つぎのようにきております。「天地の偉大な徳とは、生々してやまぬ ことである。いかにして人びとをあつめるかといえば、財 によつてである」と。ですから、老聃は柱史となり、莊周は漆園の吏となり、また東方朔は執戟の衛士となつて勤勞し、孔子も御者にな「つて財をえ」ることをいけませんでした。彼らはまことに万古の範というべく、また当時の高士と称すべきかたがたでございました。

それなのに、無為先生は隠遁して世から姿をかくし、徳をみがくばかりで仕官しようとしません。これは、あの列子の徒が目標とすることですが、天下の公理とすべきものではありません。江海にかくれる隠者が尊しとするものではありませんが、士人たちはいやしむことでありますぞ」。

すると無為先生は、すぐに一笑し、つぎのようにお答えになつた。

富貴、これをほしがらぬものがいようか。とはいえ、それらは運しだいで、自在に手にいれられるものではない。また忠孝の義は、国家にとって重要なことである。だが「その忠孝を実践した」伍子胥は、志をえることができなかった。道と徳を修得することは、玄学では重視されることだらう。だが「その道と徳を修得した」揚雄や東方朔らは、高位につけなかった。重要な学問としては、儒家と墨家以上のものはない。だがそれを創始した孔子や墨子は、あわただしい日々をすごしただけで、けつきよく志を上げられなかった。

貴殿が例にあげた老聃や莊周らも、自己の志をとげようとしたが、うまくゆかなかつた。だが彼らは、

その結果に一喜一憂しなかった。だから彼らも、道をえた人びとすべきだろう。彼ら以後においては、もうかたるにたる者どもはいない。

私はつぎのようにきいている。大人が現世にあらわれるや、ひろく慈悲をほどこされる。生死のしがらみをときはなち、涅槃の彼岸に手引きしてくださる。三乗の教えをもって衆生をみちびき、外形にまどわされず真理にせまってゆかれる。だが、有智者であつても、「大人がなされた」経緯に気づかないし、有心者であつても、その始終がわからない。ただそれによつて、ひとはしずかに心をおちつけ、道をあやまることもなくなる。そして、想念は不動さをたもち、なんの惑いもなくなり、恬然と精神をおちつけ、やすらかな心を本態となすことができるのである——と。

それゆえ、もし天祐をえて、物を都合よくはこびたければ、心のもちようを自然にたもち、出処進退も強引なことをしないことだ。そして隠逸し、なんの心配もなく、幽居して心おだやかにするがよい。かくすれば、なにも榮譽とおもわぬし、なにも恥辱と感じなくなるだろう。貴殿がなにかをえたとしても、自分がそれをなくしたことはない。俗世と方外との違いは、このようにして歴然としてくるのである。

これをきいた奕葉公子は、はずかしそうな表情をうかべ、みずから恥じいつてしまった。そして後しざりしながら、こそこそと退散していったのだった。

吾曾回向正覺、歸依福田。友人勸吾仕、吾志不改。故著無為論焉。

有奕葉公子者、聯蟬七代、冠冕組望、多素紉黼衣繡裳。

負長劍而耿耿、時游樓下、
佩鳴玉而鏘鏘、或客於梁、

「聞英雄而豹變、乃動朱履而馳寶馬、之無為先生之門。」

「聽利害以龍驤、振玉勒而曜金羈、

問曰、

先生

「智德光融、嵩華無得以方其峻、

「無學不窺、

「容儀閒靜、

「道義清遠、溟海不足以喻其深、

「無事不達、

「言笑溫雅、

至如

「釈迦三藏之典、

「宣尼六芸之文、

「靡不詳其津要、而採摭沖玄、

「煥乎若睹於鏡中、

「李君道德之書、

「百氏兼該之術、

「炳乎若明於掌內、

余聞、天地之大德曰生、何以聚人曰財。是故

「老聃以為柱史、

「東方持戟而不倦、寔

「萬古之師範、

「莊周以為園吏、

「尼父執鞭而不恥、

「一時之高士、

先生嘉遁卷跡、養德不仕。乃列子之所待、非通天下之至理。雖江海以為采、實縉紳之所鄙。

先生倏爾笑而応之曰、

富之與貴、誰不欲哉、乃運而不通也。夫忠孝者、國家之急務也。申生伍員、不得志也。

懷道抱德、玄風之所尚。楊雄東方、其職未高也。其大學者、不過儒墨。亦棲棲遑遑、多有不遂也。

子所引之士者、情雖欲之、志不行也。憂喜不移其情、故可為道者也。過此已往、焉足言哉。

吾聞、大人降跡、広樹慈悲。

「破生死之樊籠、

「闡三乘以誘物、

「登涅槃之彼岸、

「去一相以歸真、

「有智者不見其去來、使得湛然常住、永絕殊塗、無變無遷、長祛百慮、恬然養神、以安志為業、

「有心者莫知其終始。」

欲使自天祐之、吉無不利、
「舒捲隨取、遁逸無悶、幽居永貞。」

進退自然。

「亦何榮乎、子其得之、塵内方外、於是乎著。」

「亦何鄙乎、吾何失之。」

公子慙然而有慚德、逡巡而退。

この「無為論」の文章、主客の対話によった形式や、出処の是非を論じる内容は、漢晋に流行した設論ジャンルをおもわせるものである。すると奕葉公子は出仕をよしとする俗人、無為先生は隱棲をこととする隱者ということになる。こうした場合、無為先生の側（＝江淹）は道家ふう主張をするのがふつつである。

じつさい、この文では、奕葉公子がさきに登場し、なぜ仕官して祿利をもとめないのかとたずねる。すると無為先生は、「隱逸し、なんの心配もなく、幽居して心おだやかにするがよい」（原文は「遁逸無悶、幽居永貞」と道家ふうの主張をし、静謐な日々をすすべきであると反論する。すると公子は、「はずかしそうな表情を浮かべ、みずから恥じいつてしまった。そして後しざりしながら、こそこそと退散していったのだった」とおわっている。するとこの「無為論」は、いわば江淹の隱遁宣言というべき作であり、このときの江淹は、もう仕官などせず、隱棲の日々をおくろうとおもっていた、としてよからう。

ただこの文章、思想的にはやや混乱しているようだ。冒頭の「私はかつて、正覚にいたらんと祈念し、善行に帰依したのだった」や、無為先生の「大人が現世にあらわれるや、ひろく慈悲をほどこされる。生死のしがらみをときはなち、涅槃の彼岸に手引きしてくださる」云々の発言は、あきらかに仏教ふう発言である。いつぱう、「もし天祐をえて、物事を都合よくはこびたければ」（『易』大有の典拠）や、「隱逸し、なんの心配もなく」（『易』

乾の典拠）のことばのほうは、儒教の語彙を利用したものだ。要するに、この文では、道家ふう隠遁宣言のなかに、儒や仏の思想が混入してきているのである（「傷愛子賦」や「与交友論隱書」でもおなじだった）。

もっとも、これが当時の人びとの実態だったろう。当時では、百パーセント道家（あるいは儒仏）思想にそまつたようなひとは、むしろ少数だったといつてよい。おおくのひとは、思想的に儒仏道がこちゃこちゃしており（しかもそれを自覚しておらず）、ときと場合に応じて、適宜つかいわけていたのだろう。いいかげんだったのでなく、かく儒仏道を並綜するのが、当時ではふつうだったのである。

ところで、このとき江淹は、まだ三十四歳。あとからみると、彼の人生はまだ前半がおわったばかりだった。これからの後半に、かがやかしい立身と栄光の日々がひかえていたのだが、そんなことは江淹、しるよしもない。ただ後代からみれば、このときの江淹、無為先生のように枯淡の境地にはいるには、まだわかすぎたといつてよい。そのため結果的に、「無為論」の隠遁宣言を裏ざることになったのだった。

江淹のかがやかしい後半生は、「無為論」をかきあげた直後にはじまる。

江淹は、蕭道成（四二七―四八二）という男から、とつぜん「自分につかえぬか」と声をかけられたのだった。この道成は、景素の乱を平定するのに一役かった軍人である。その意味では、いわば景素の仇でもあった。ただ、このとき（元徽五年七月）の道成は、後廢帝を廢したばかりであり、旭日昇天の勢いを有していたのである。

このとき、江淹はどうしたか。彼は躊躇なく、この招請にのつたのだった。

江淹は、この蕭道成こそ、次代の「つよい側」の人間だと、敏感にさつたのだろう。とすれば、こんなよい話をこつとわる手はない。江淹はこつとおもつたにちがいない。だから、「無為論」で隠遁宣言をしていた江淹だったが、その舌の根もかわかぬうちに、さつと道成の幕府にはいったのである。そして彼が輔政する宋廷につかえ、

尚書駕部郎、驃騎參軍事として任官したのだった。かくして、隱棲の志をまもって閑居し、高位のひとと交際しなかった期間は、けっきょく半年もつかなかったのである。

ただ、このみずからの豹変、いささか具合がわるいとおもったのだらう。彼の「自序」では、「無為論」をかいたことにはいっさいふれず、「高位のひとと交際しなかった」につづけて、

そうしたとき、にわかには先帝（蕭道成）さまは、四海で大功をあげられた。そして私の評判をおききになつて、お召しくださったのである。そこで私は、出仕して尚書駕部郎となり、また驃騎竟陵公（道成）参軍事となつたのだつた。

というだけである。右にいう「先帝さまは、四海で大功をあげられた」というのは、道成が後廢帝を殺害して、安成王だった劉準を、順帝として踐祚せしめたことをさそう。元徽五年（四七七）七月、道成は、配下の王敬則らに命じて、酒をのんで寝こんでいた後廢帝を、絞殺させたのである。

かつて蕭道成自身も、暴虐な後廢帝からにらまれ、一時は弓に矢をつがえて、腹をねらわれたこともあった。劉休範や劉景素の乱の鎮定に大功をあげたので、危険視されたのだらう。このときは、たわむれということである。それゆえ蕭道成がおさまったが、後廢帝の場合は、そのたわむれで臣下を殺害することもおおかつたのである。それゆえ蕭道成にとっては、この後廢帝の殺害は、野心の結果であるとともに、わが身をまもるためでもあったらう。

この後廢帝、あまりにも暴戾だったので、死後は帝号をあたえられなかった。それゆえ歴史上では、「廢帝」と称されている（二代まえの劉子業も帝号をあたえられなかった。これと区別するため、劉子業を前廢帝、劉昱を後廢帝とよぶ）。蒼梧王とよばれることもあるが、それは死後に太後の命で、蒼梧郡の王に降封されたからである。享年はわずか十五（満年齢では十四歳、現代だったら中学二年生にあたる）だったが、それでもじゅうぶ

んすぎるほど、修羅の道をあゆんだ人生だった。彼が死んで、やれやれとホッとした廷臣はいても、心から哀悼した者はひとりもいなかったろう。

また江淹は右で、「私の評判をおききになって、お召しくださった」ともかいている。ここの評判とは、おそらく、文辞をつづる能力をさすのだろう。ただ蕭道成は、このときはじめて、江淹の能力をしったわけではない。これより三年前の元徽二年（四七四）江淹三十一歳、桂陽王の劉休範が宋廷にむかって弓をひいたとき、二人のあいだで、こんなことがあった。

休範が乱をおこすや、宋廷は周章狼狽して、乱討伐の詔檄もかきあげられなかった。そこで蕭道成は、江淹を中書省によんで執筆させようとした。彼はまず、江淹に酒食をすすめた。江淹は健啖家だったので、あぶつた鵝鳥をたいらげ、さらに酒数升をのみほした。そして飲食がかわったときには、もう布告の文はできあがっていたという（『南史』江淹伝）。要するに、操筆立成の早業を披露した、ということだろう。とすれば、蕭道成はそのころから、江淹の資質をみぬいていたに相違ない。そして、自分が宋廷を輔政するにあたって、「よし、この男をつかおう」と即決したのだろう。

ただ、この時点（蕭道成が後廢帝をころした時点）では、天下の帰趨はだれの手におちるとも、わかっていなかった。後廢帝亡きあと、有力な廷臣としては、蕭道成のほかに、袁粲、褚淵たちがいたし、また軍人の沈攸之も、荊州刺史として、地方からじつと建康のようすをつががっていた。

そうしたなかで江淹は、敢然として蕭道成につかえたのである。「自序」がいうごとく蕭道成が声をかけたのか、それとも江淹のほうから、道成にちかづいていったのか、じっさいのところはわからない。だが、そんなことは、どうでもよいことだ。どうであれ、江淹はこのときも、崔慧景の乱や蕭衍の東下のときとどうよう、みこ

とな先見の明を發揮し、まちがいなく「つよい側につけ」を実践したのである。

江淹の見たては、例によってただしかった。後廢帝を殺害して順帝を擁立するや、蕭道成は、緒淵を味方につけ、袁粲や劉秉らのライバルを圧倒して、勢威をますますたかめた。そして沈攸之の乱もあっさり鎮圧して、あっというまに第一人者にのぼりつめたのである。

このときの江淹は、ただ公用文の書記役というだけではなかった。「自序」中のつぎのような話柄は、道成のそばにいて、激励もしていたことをしめす。

沈攸之が反道成の兵を西楚の地であげるや、建康の人びとは恐れをいだいた。そこで高帝（蕭道成）は、この私にお尋ねになったものだ。「天下は混迷の極にある状況だ。君はどうなるとおもつか」。そこで私はいった。

むかし、項羽は強盛で劉邦は劣弱、袁紹は大軍を擁し、曹操はすくない軍勢でした。ところが項羽は諸侯に命令をくだしても、けっきょく自尽させられるという辱めをつけ、袁紹も四州の兵をあつめながら、ついに北方で敗亡するというき目にありました。

これが、古書にいう 大事なのは、徳の多少であり、鼎の軽重ではない というものです。公はどうして、心配される必要などありませんようか。

高帝はいった。「そうしたことは、よく耳にしてきたことじゃ。もっと具体的に説明してほしい」。そこで私はもうしあげた。

公は雄武であり、また奇略もお持ちです。これがすぐれし第一です。公は寛容にして仁恕がおありです。これがすぐれし第二です。公は賢能にして努力されます。これがすぐれし第三です。民衆が公をし

たっております。これがすぐれし第四です。天子を奉じて逆賊をつととされております。これがすぐれし第五です。

沈攸之のほうですが、彼は志はすぐれておりますが、器量がちいさい。これがおとることの第一です。勢威はありますが、恩情がない。これがおとることの第二です。兵士の団結心がなく、バラバラです。これがおとることの第三です。士人たちが彼になつておりません。これがおとることの第四です。孤軍でわがほうに深入しても、協力する仲間がありません。これがおとることの第五です。

それゆえ豺狼十万がいたとしても、けっきょくはわが軍のとりこになるだけです。

高帝はわらっていった。「君はほめすぎだよ」。

この話（『梁書』や『南史』もひく）、いささか自慢ばなしという趣があり、額面どおりには、うけとらないほうがよいのかもしれない。ただ、このままではないにしても、たぶん、蕭道成と江淹のあいだで、これと似たような会話はかわされていたのだろう。

この話で注目したいのは、蕭道成の長所を五点、沈攸之の短所を五点と、江淹なりに分析し、かぞえあげていることだ。さきにも、江淹の情勢分析的確さを指摘しておいたが（「四 呉興令への左遷」を参照）、ここでの分析も、そのひとつだといえよう。江淹はこのときだけでなく、おそらくどのような場面でも、こうやって樂觀バイアスなしに、敵対する両勢力の長短を箇条的にあげてゆき、その強弱を慎重に考量していたにちがいない。そしてその結果、つよい側はどちらだと判断し、そちらのほうについたのだろう。

そうだとすれば、こうした考量の結果、もし蕭道成がおとるという結論がでたなら、江淹は「苻梁交替のとき、しのび姿となつて蕭衍の軍に身を投じたときのように」さつと沈攸之のほうに寝がえっていたにちがいない。江

淹はこうした出処進退を、風見鶏のように正確に、そして躊躇なくおこなうことができた。そうしたところが、他人には「深沈にして遠識有」る人物とみえ、また「先見の明がある」と評されたのだろう。

かくして沈攸之の軍を圧倒した蕭道成は、昇明三年（四七九）四月、自分がたてた順帝から禅りをつけたかたちで、斉朝を樹立したのだった。

とうぜんのことながら、宋からの禅譲といっても、ただ形式をととのえたにすぎない。じつさいは王朝を強奪したのである。帝位を禅譲させられた宋の順帝は、このとき十一歳。彼が王座からおいだされる場面を、『資治通鑑』巻百三十五はつぎのようにえがいている。

正座からおりる段となった。

だが順帝は、おりるのをいやがって、仏像の覆いのしたにかくれた。そこで「蕭道成の意をつけた」王敬則は兵を殿庭にひかえさせ、板輿をもって帝を迎えにきた。太后はおそれ、自身で宦官に命じて帝をさがしださせた。すると敬則は、帝をなだめて仏像のしたからひきずりだし、馬車にのせよつとした。

帝は涙をぬぐって、敬則に「おまえはボクをころすつもりなのか」といった。すると、敬則はこたえた。「宮中からでて、別宮にお移りいただくだけです。帝の先祖さまが、『東晋の』司馬家から禅譲をうけられたときも、そのようになさったのです。帝は涙をこぼし、指をはじいていった。「後世、転生することがあつたとしても、ふたたび天子の家に生まれたくない」。

これをきくや、宮中の人びとはみな泣きごえをあげたのだった。

天子といつても、まだ子ども。現在ふうにいえば小学四年生である。王朝とか禅譲とかの意も、よくはわかっていなかったろう。ただ、ぬつとやってきた軍人の王敬則がおそろしく、ころされるとおもったのだろう。王敬

則は、ただ居所をかえるだけですといいつくらっているが、彼も、そして順帝も、その後のなりゆきは、うすうすわかっていたはずだ。だから順帝は、「後世で転生したとしても、ふたたび天子の家に生まれたくない」といったのだろう。じっさい順帝は、これより一か月後の五月、殺害されたのだった。

江淹は、この宋齊交替の禅譲劇を、どのような思いでみもっていたのだろうか。彼はわかいころ、つかえていた幼君の劉子真と劉子鸞が殺害されたのを、ちかくで見聞していたはずだ。そして、十歳の子鸞が「願わくば身の復た王家に生まれざるを」となげいたことも、おそらくしていただろう。ところが十年後のいまは、殺害する蕭道成の側にたち、十一歳の順帝に「転生することがあったとしても、ふたたび天子の家に生まれたくない」ということばを、発せさせる立場にたっているのだった。

江淹は、収賄の罪で下獄を余儀なくされた二十四歳のとき、「つよい側につく」ことの大切さをまなんだ。今回は、そうした経験をよくいかし、首尾よく殺害する側にたつことができたのである。こうした自分の転進、彼は「してやったり」とおもったのだろうか。すくなくとも、順帝の死やその最期のことばをつたえきいて、悔恨や憐憫の情を發したという記録はのこっていない。

九 齊朝下の高官

かくして三十六歳の江淹は、宋齊交替の時期をつまくのりきった。この期の変わり身の早さでは、よく褚淵や王侯の名が言あげられるが、この江淹もなかなかどうして、巧妙な世渡りをおこなったのだった。このときの江淹の蕭道成への密着ぶりは、かつての劉景素との関係以上のものだったかもしれない。

この時期の自分について、江淹は「自序」において、

この時期、蕭（道成）どのの名で発した軍書や公用文は、すべて私が起草した。蕭どのが東霸城府にうつってからも、私が公用文をかいていた。相府が正式におかれるや、私は記室参軍事となった。齊王や九錫文辞退の文書をはじめとする公用文の類も、すべて私が草したのだった。

蕭どのが宋の禪りをうけたのち、私はまた驃騎豫章王（蕭疑、蕭道成の次男）の記室参軍となった。さらに東武令となり、詔冊をつかさどり、国史も担当した。こうした栄誉は、私のこのものではなかったが、辞退はできなかった。ついで正員散騎侍郎、中書侍郎にうつった。

とふりかえっている。「齊王や九錫文辞退の文書をはじめとする公用文の類も、すべて私が草した」などというのは、かなり自慢めいた口ぶりだといってよい。じっさい、江淹は蕭道成のもので、おおくの公用文を代作し、さらに齊朝成立後は中書侍郎（五品）等に就任して、順調に立身していったようである。

いっぽう、江淹は「こうした栄誉は、私のこのものではなかったが、辞退はできなかった」ともかたっているのに注意しよう。このことばは、「無為論」などで「隠逸を口にしていたのに、かく高位にのぼり栄誉をえたことへの、弁明であり、また照れかくしでもあるように感じられなくもない。

この時期に江淹が代作した公用文は、おびただしい量にのぼったはずだ。そのうちのごく一部にすぎぬだろうが、いまでも彼の集のなかにおさめられている。それらの公用文の標題を、いくつかあげてみよう。

まず、宋末のものとしては、

蕭驃騎謝甲仗入殿表　蕭驃騎讓封第二表　蕭驃騎讓封第三表　蕭驃騎讓豫司二州表　蕭驃騎讓祭石頭戰亡文

蕭驃騎上頓表　蕭驃騎謝被侍中慰勞表　慰勞雍州文　蕭太尉上便宜表　讓太傅揚州牧表　蕭拜太尉揚州牧

表 蕭讓太傅相国齊公十郡九錫表 被百僚敦勸受表 蕭拜相国齊公十郡九錫章 蕭相国拜齊王表 齊王謝冕
旒諸法物表 齊王讓禪表

などがあげられる。この標題中の「蕭」「蕭驃騎」「齊王」などは、蕭道成をさす。この時期では、蕭道成はまだ宋の廷臣の立場だったので、「表」ジャンルのものがほとんどである。また「蕭讓太傅相国齊公十郡九錫表」や「齊王讓禪表」などは、宋齊の禪讓にからむ文書である。

つづいて、齊朝樹立後になると、とうぜんのことながら、表ジャンルでなく、詔勅の文がおおくなる。つまり江淹は、蕭道成こと高帝のために、詔勅の代作もおこなったのである。それらのなかの幾篇かの標題をあげてみる。

断募士詔 遣大使巡詔 賜赦交州詔 封江冠軍等詔 大赦詔 北伐詔 王僕射為左僕射詔 王僕射領太子詹事詔 王撫軍為安東吳興詔 曲赦丹陽等四郡詔 何詹事為吏部尚書詔 王侍中為南蠻校尉詔 王光祿為征南湘州詔 柳朴射為南兗州詔 王僕射加兵詔 立学詔
などである。表、詔とも、他にもあるが一部のみあげた。

こうした高帝との密着ぶりは、彼の崩御までつづいた。江淹と高帝とは、ともに齊朝を樹立した同志として、おそらく気心がしれた仲だったのだろう。建元二年（四八〇）、江淹が高帝から中書侍郎を拝したとき、尚書僕射だった王儉は、

きみはまだ三十五歳なのに（ただしくは三十七歳）、もつ中書侍郎になれたんだな。これほど優秀であれば、そのうち尚書や金紫の地位にも、問題なくつけるだろうよ」（『南史』本伝）。

といったという。王儉からこういわれるほど、江淹は高帝から厚遇されていたのである。

その高帝が崩じたのは建元四年（四八二）、享年五十六。天子として帝位にあったのは、実質は三年間だった。その崩御にあたって、江淹は「齊太祖高帝誄」を執筆し、さらに彼の遺文を編次したという。この「齊太祖高帝誄」、四百三十六句におよぶ超大作なので、ここでの引用はさけるが、華麗な修辭で修飾された極度の美文である。清の李兆洛は、この作を彼の『駢体文鈔』に採録したうえで、

華縟已に極まりて敘次は嚴整なり。唐人は「高帝誄を」^{たが}遍いに相掇襲す。「唐人の作たるや」富なるは或いは之に過ぐるも、鮮彩なるは終に及ばざるなり。

と評している。たしかにこの江淹の「齊太祖高帝誄」、「華縟」「鮮彩」という評語がぶさわしい、豪華絢爛な行文でつづられている。これを諛辭にすぎぬとみなすか、敬意や哀情のあらわれと解するか、意見がわかれるところだろう。

また、本稿ではしばしば引用してきた「自序」をつづったのも、この時期、すなわち高帝が崩御した翌年（永明元年、四八三）である。ということは、江淹はこの時期に、これまでかいてきた詩文を一集にまとめたわけだ（「自序」は自分の文集への自序である）。親近してきた高帝が死んだので、江淹の心中にも、ここでひとくぎりという気分が生じてきたのだろうか。じっさい、江淹はこのとき四十歳。当時ではかなりの年齢であった（江淹より八歳わかい王儉は、永明七年 四八九 に三十八歳で死んだ）。右につづく「自序」の末尾の部分で、再引ではあるが、引用してみよう。

私はつねづね、こついつてきた。

「この世にうまれては、身の丈にあつた暮らしをするのが、いちばんたのしい。どうして必死に努力して、死後の名声をもとめたりしようか」と。それゆえ、私は幼時からいまにいたるまで、ぶあつい書物などかい

たこともない。ただ文集十巻が編纂できたのだが、これでじゅうぶん満足している。

さらに私は、学問をして、ひとにしられようとおもわず、気にいらぬ者とも交際しないよう心がけてきた。また天竺の因縁を説いた仏典を信じ、老子の清浄なる道をこのんできた。仕官しても、ただ卿の地位と二千石の禄があればよく、もし日々の暮らしをたて、夏冬の祭ができるほどの蓄えがあれば、すぐにでも隠遁したいとおもっていた。

いつも夢みるのは、幽居に庵をむすんで俗世と縁をきること。庭には紅葉、池にはあおみがかった清水。左側には郊外がつづき、右側には沼地が帯のようにひろがる。春ともなれば、平坦な岸辺を散歩し、すみきった秋には、家のなかでひとり酒をくもつ。侍姫は三四人、趙の美女は数人というところか。

これがだめなら、気ままに行商の旅でもし、琴を弾じ詩を詠じることしよう。そうすれば朝露ほどのかなき命だろうと、老のちがづいたこともわすれてしまふにちがいない。私が到達した結論は、こうした生きかたをするにつきる。

「自序」はこれでおわっている。この末尾の部分で注意したのは、「ただ文集十巻が編纂できたのだが、これでじゅうぶん満足している」ということばである。これをみると江淹は、詩文の創作で、かくべきものは、もうかいてきた、という充足感をおぼえていたようだ。じっさい、彼はこの「自序」を境とし、これ以後は、公用の文書もふくめ、ほとんど著述することはなくなってしまった。

この江淹、蕭道成のもとでは、詩賦の類はほとんどかいていない。ただ、表章や詔勅のたぐいは、大量につづっている。つまり齊廷でも、「詩賦はつくらなくても」広義の著述活動は、なおおこなっていたのだ。ところが、蕭道成が死に、「自序」をかいてからは、そうした公用文の執筆も激減し、ほとんど著述活動から足をあらった

ふうになってしまった。その意味では、江淹は四十歳の「自序」執筆を境として、文人から政治家へきりかわった、といってもよいかもしれない。

どうして、著述活動から足をあらってしまったのか。それは、以前にみたように、江淹にとって詩文は、それによって立身してゆくために、つづるものであった（二一 剣呑な日々」を参照）。その立身がなかったので、これ以上つづる必要性を感じなくなったのだろうし、またじつさい政務に多忙になったのだろう。現在においてもわかいころは著述に熱心であっても、年齢をかさねて組織のトップや理事になったりすると、ほとんど著述をしなくなる、いや、できなくなってしまうことは、よくみることである。四十歳の江淹の場合も、それとおなじような事情だったのだろう。

高帝の死後、江淹は、つづく斉朝の諸帝のしたでも信任されつづけた。高帝につかえたときは、「いわば書記役だったので」命ぜられるままに、詔勅を代筆すればよかった。しかしこれ以後は、斉朝の廷臣として、多忙な政務をこなしてゆかねばならない。江淹は、そうした激務にたえる有能な男だった。おそらく諸帝からみれば、主君に忠実で、実務にも堪能な、便利な男だったのだろう。

斉の武帝以後における政界での活躍ぶりを、江淹の官位で確認してゆこう。史書の記述で判明した範囲で、江淹がついた官位や職務をしめせば、つぎのとおりである。

武帝のとき（江淹三十九〜五十歳）

驍騎將軍、掌国史（「斉史」を続成した）

建武將軍、廬陵内史

尚書左丞、国子博士

鬱林王のとき（五十―五十一歳）

御史中丞

明帝のとき（五十一―五十五歳）

車騎將軍臨海王蕭昭秀の長史

廷尉卿、給事中

冠軍長史、輔國將軍

宣城太守

東昏侯のとき（五十五―五十八歳）

黃門侍郎、歩兵校尉

秘書監、侍中

衛尉、守宮城

和帝のとき（五十八―五十九歳）

冠軍將軍、秘書監、司徒左長史

吏部尚書

これらの官位や職務は、就任したことは明記されているが、やめたときはかかれておらぬので、じつさいの在任期間はよくわからない。昇降に注目してみると、高帝のときの正員散騎侍郎や中書侍郎などは、五品であった。ところが、明帝のときの廷尉卿、東昏侯のときの秘書監と侍中（侍中は少年時、江淹母子がねがった官位だった。二一 剣呑な日々」を参照）などは、ともに三品であり、着実に立身しているといつてよい。このように齊朝下

の江淹は、天子がかわっても官位にあぶれることは、いちどもなかった。寒門出身の江淹だったが、宋末に蕭道成にみいだされて以降、齊室とは安定的に友好関係にあったといつてよからう。

こうしたなかで注目すべきは、鬱林王の永明十一年（四九三、江淹五十歳）に就任した御史中丞の官である。この官は、官吏の不正を糾弾する職務で、現在ふうにいえば検察官にちかい。江淹は、鬱林王が天子となったとき、宰相となっていた蕭鸞（のちの明帝）の命によって、この官についた。そして、やはり蕭鸞の意をくんで、おおくの官僚や高官を弾劾したのである。そのときの江淹は、満天下をふるえあがらせるほど、辣腕をふるったらしい。つぎのような話柄が、『南史』本伝にしろされている。

鬱林王のはじめ、「驍騎將軍のまま」御史中丞を兼任した。

ときに、蕭鸞（のちの明帝）は宰相となっていたが、江淹にいった。「そなたは以前、尚書で左丞だった折りには、公事でなければみだりにおこなわず、寛と猛とをうまく折衷させていた。いまや御史中丞となつたが、きつと百僚をふるえあがらせるだろうな」。すると江淹は、「このたびの職務、ただ官としての役目はたすだけです。聖旨にかなえられるかどうかだけ、心配しております」とお答えした。

御史中丞となるや、中書令の謝朏、司徒左長史の王績、護軍長史の庾弘遠らを弾劾した。彼らはいずれも疾と称して、先帝の葬儀に参加しなかったからである。また、前益州刺史の劉俊と梁州刺史の陰智伯を収監するよう、奏上した。いずれも、巨万の財貨を収賄したとして、廷尉にひきわたしたのである。さらに臨海太守の沈昭略、永嘉太守の庾曇隆、および諸郡の太守や県令たちも、おおくが弾劾されたので、朝廷の内外は肅然としたのだった。

そこで、蕭鸞は江淹にいった。「宋よりこのかた、こんなに厳格かつ明断な御史中丞はいなかった。貴殿

はいまや近來、拔群の御史中丞といふべきだな」。

まえにものべたように、江淹は「つよい側」について、篤実に奉仕するタイプだった。このときの江淹、まさに「つよい側」（鬱林王。じっさいは蕭鸞）の期待にこたえ、果敢に御史中丞の職務を実践したのだった。このように、「つよい側」につき、その下で篤実につくす姿勢こそ、寒門出身の江淹がいきぬいてゆく道だった。門閥の庇護を期待できぬ彼は、へたに正邪や憐憫の情にかまけていては、廷臣としていきてゆけぬと自覚していたのだろう。

かかる順調な廷臣としての日々のなか、いちどだけ、危機らしいものがあつた。それは江淹五十三歳、明帝の建武三年（四九六）のとき、とつぜん建康から宣城太守に左遷させられたときである（都から地方へ、三品の廷尉卿から五品の太守への異動は、当時の常識からすれば、左遷だとみなさねばならない）。この斉朝下でのとつぜんの左遷、詳細はよくわからないのだが、どうやら近時の研究によれば、娘の縁戚がおこした事件と関連したものだったようだ。

すなわち、江淹には才君という娘がおり、蕭誕（齊室の縁戚）の息子の蕭稜の妻となっていた。ところが、義父蕭誕の弟の蕭謨が斉明帝の勸気をこつむって、誕と謨の兄弟ともども殺害されてしまった。つまり才君の義父まで連座して、ころされてしまったのである。おそらく、その関連で才君の夫だった蕭稜も、害されたのだろう（ただし、史書には記載なし）。この事件にショックをつけた才君は、「蕭氏皆な尽きたり。妾は何を用て生きん」といってなげいた。そして「慟哭して絶^たてり」、悲痛のあまり憤死したのか、自害したのかはわからぬが、彼女も死んでしまったのだった。

江淹の宣城太守への左遷は、この事件に連座したものだともわれる。明帝は、猜疑心のつよい人物だったの

で、才君の父たる江淹まで疑惑が波及し、かかる左遷をこうむってしまったのだらう（以上は、丁氏『江淹年譜』一八六―一八七頁）。

だが、さいわいなことに、娘の才君に関するこの事件は、これ以上は拡大せず、江淹も、宣城太守へ左遷されただけでおわった。そして三年後、明帝が崩じて東昏侯が即位するや、その翌永元元年（四九九）、江淹は黃門侍郎、歩兵校尉、秘書監、侍中となつて、ふたたび建康にかえってきたのだった。

それにしても、この蕭詵の事件、わが娘まで横死してしまつたわけだから、「恨人」である江淹にとつても、おおきな衝撃だつたに相違ない。だが、その衝撃を暗示するような詩文は、いまにのこっていない。江淹はもうかなり以前から、詩文の筆は事実上おつてしまつていたからである。かりに著述活動から足をあらつた年を、四十歳だつたとすれば、この時点では、それからもう十三年もたつてゐる。家族おもいの江淹、娘の死をいたみ、慟哭した「にはちがいない」としても、その悲しみを詩文に昇華する詩囊は、もう枯渇してしまつていた（つぎの「十 江郎才尽」も参照）。いまさら呉興左遷のときのような、「傷愛子賦」や「悼室人詩」十首のごとき作はつくれなかつたのだらう。

この時期、時勢の変化はたいへんげしい。永元元年（四九九）、五十六歳の江淹が宣城から建康にかえつてきたとき、斉の屋台骨はもうかたむきかけていた。明帝の死後に十六歳で即位した東昏侯こと蕭宝卷が、例によつて、宋末の後廢帝にも似た、残虐きわまりない天子だつたからである。そのため、たちどころに混沌とした政治状況におちいり、斉朝滅亡の前夜という状況になってしまつていた。

かくして、江淹の宣城帰還の翌年（永元二年、五〇〇）の三月、まず反東昏侯の旗じるしをかけた、大規模な反乱がおこつた。それが、崔慧景の乱である。この慧景の軍はたいへん強盛であり、建康を包圍して台城も一

時はあやうかった。こうした状況をみるや、斉の高官や廷臣たちはおおく、慧景のもとへ名刺をさしだして、渡りをつけておこうとしたのだった。このあわやというとき、江淹がすばらしい先見の明を發揮したことは、冒頭でのべておいた。

そしてさらに同年の十一月に、雍州刺史の蕭衍が襄陽で挙兵し、翌中興元年（五〇一）には、建康にむかつて東征を開始した。そしてその年の九月には、もう蕭衍軍が建康の近郊にせまってきた。このとき江淹は、宮城を防御する衛尉の官だったが、またもや「深沈にして遠識有」るところをみせつけた。すなわち、さつと斉朝の官服をぬいでしのび姿となり、蕭衍の軍に投じたのだった。このとき發揮した先見の明が、江淹の晩年をおだやかなものにしたことについては、これまた冒頭でのべたとおりである。

十 江郎才尽

以上、江淹の後半年（斉朝下の日々）の動向を、かけ足でみわたしてきた。では、この時期の詩文創作についても、みていこう。

この時期、つまり江淹の後半年、彼が詩文をつくらない、もしくはつくれなくなったことは、当時の人びとにたいへん不可解にうつったらしい。そのためだろつ、「江郎才尽」^{江郎才尽}（江淹の詩文の才が尽きた）という小説めいた話がつくられたのだった。この有名な話、類似のストーリーがいくつかあったわっているが、ここでは彼の「南史」本伝からひこつ。

江淹はわかいころ詩文で名をしられたが、晩年になると、文才がおとろえた。そこでつぎのように噂され

た。

江淹が宣城太守の任をやめて、「船で建康に」かえる途中、禅靈寺の岸边に一泊した。その夜、夢に張協と名のる男があらわれ、「私は以前に一匹の錦をあずけた。いまかえてほしい」といった。江淹が自分の懷中をさぐると、数尺の錦がでてきたので、それをかえした。するとその男、すぐおこって、「どうしてこんなにきりとして、つかってしまったのか」といい、丘遲のほうをふりかえって、「こんな数尺では役にたたないから、君にあげよう」といった。このうち、江淹の詩文はおとろえた——と。

ここでの「一匹の錦」はもちろん、詩賦をつくる才能を象徴している。それを張協に返却したので、江淹の才能はなくなってしまったという話である（ただし『南史』はもうひとつ、類似の話も引用している。その話では夢中に登場するのは郭璞であり、江淹は「五色の筆」をかえたことになっている）。この話、江淹晩年の「才尽」を説明するのにふさわしいし、また当時、格段の立身をとげた江淹が、人びとの嫉視の対象にもなっていたことも示唆するのだろう。そうした意味で、この話はなし半分に解するとしても、なかなかよくできたエピソードだといつてよい。

この江淹の才尽については、否定するひともいる。たとえば、ほんとうは才能がつきていなかったが、文学好きな主君（梁武帝）に遠慮して、わざと才尽をよそおったのだ、という見かたなどである（「才尽」への各様の見かたについては、陸岩軍「江郎才尽 研究述評」重慶郵電学院学報 二〇〇六 三を参照）。ただ、右でみたように、そして本稿のあとでもみるように、人生の後半期には、じつさに詩賦の創作は激減しており、才尽はたしかな事実であつたらうと、私はおもう。

だが、すこしいただけないのは、才尽した時期の設定である。この話によると、宣城太守をやめて建康にかえ

るときだから、江淹五十六歳、永元元年（四九九）のときだったことになる。だがじっさいのところ、江淹はもっとはやい昇明元年（四七七、三十四歳）に、創作の主力を詩賦から公用文につつし、さらに建元四年（四八二、三十九歳）にはその公用文の執筆さえやめてしまった。それゆえ「才尽」の話をつくるのだったら、この昇明元年か、もしくは、建元四年あたりに設定すれば（または、「自序」や「齊史」をかけた翌永明元年 四八三でも可）、もっとよかつただろう。

では、才尽が事実だったとすれば、その原因はなにか。

「江郎才尽」の原因として、このころ沈約や謝朓、王融らによる新興の永明体が流行してきたが、それと江淹の作風とはあいいれなかった。おかげで、江淹の文学は時代遅れなものとして、かえりみられなくなった。そのため江淹は、詩の創作をやめてしまった——という見かたがある（独孤嬋覚「六朝文人の政治と文学」魏、斉、梁文壇人物の政治的焦燥感を中心に「横浜国立大学博士論文 二〇一四」）。じっさい、江淹の作風は、韻律を重視し、洗練さを追求した永明体の技巧的スタイルにくらべると、やや古風な印象をあたえるものだといつてよい。

そうした江淹、彼も蕭子良が主催した鷄籠山西邸の集いに、なんとか参加したことがあったらしい（丁氏『江淹年譜』一七四頁）。すると彼は、のちに梁を樹立する蕭衍や沈約、范雲らとは、もうこの時期に知友になっていたのだろう。とすれば、ある日の西邸で、蕭衍らから「私たちと詩を唱和しませんか」と、声をかけられたこともあったかもしれない。すると江淹、いやいやわしなんぞ、貴殿らのあたらしい詩風には、とてもついていきません、と遠慮したことだろう。

しかし、江淹の「才尽」と永明体の興起とを関係づけるのは、すこし具合がわるい点もないではない。という

のは、現実的には、江淹の創作は、永明体が盛行してくる以前から、すでに停滞をきたしていたからだ。永明体の興起を永明元年（四八三）とするならば、江淹は、それより六年前の昇明元年、彼三十四歳のころから、もう実質的に「才尽」となってしまうていたのである。

では、なぜこのころから、詩文をつくらなく（つくれなく）なってしまったのか。

それは、江淹の文学創作のありかたに、原因があつたといふべきだろう。まえ（二）「劍呑な日々」や「五望郷の日々」など）にものべたように、江淹にとつて、詩文とは、基本的になんらかの感情、たとえば立身意欲、熱望、負けん気、悲痛等が心中に渦まき、それにかられるようにして、創作するものであつた。そうした感情や情念が、恨人たる彼の詩囊を刺激し、ゆりうごかして、その結果、詩文がうまれおちてくるのである。その意味で、彼の詩文は、いわば心中から噴出してくる感情や情念の、受けぐちみたいなものであつたといつてよいであろう。

それゆえ若年期の詩文は、「ああ、 したい」「オレはかなしい」「まけてたまるか」等の感情や情念が、そのまま結晶したような、みずみずしさを有していた。たとえば「詣建平王上書」「去故郷賦」「悼室人詩」などは、すべてそうした感情の結晶体のような作品だ。それが彼の作品に、作りものでない「心のさけび」という印象をおびさせたのである。作り手の江淹は、かく感情や情念をぶちまける（＝創作する）ことによって、精神的な力タルシスを獲得し、読者のほうは、詩文に充滿する「心のさけび」に心をうたれ、琴線をふるわせたのだろう。

ところが、江淹は蕭道成にみいだされ、立身してしまった。おかげで、心中から発する「心のさけび」がよくなつてしまったのである。自己を創作にかりたてるはげしい感情や情念、それがうしなわれたら、詩文のつくりようがない。しいてつくつたとしても、気のぬけたようなものしかできない。江淹は、それがわかつていたの

だろう。だから立身以後の江淹は、詩文をつづる意欲がなくなってきたし、じつさいつくれなくなってしまうのだった。

ただ、彼は寒門の出身である。文才で立身してきた男である。なにもできない、なにもかけないとすれば、いまの地位を、たもつてゆけそうにない。さいわい、詩文はだめになっても、公用文を執筆するのだったら、まだ他の者にひけはとらぬ。公用文の執筆では、詩文とちがって、はげしい感情などなくてもかけろし、むしろないほうがいいぐらいのものだ。蕭道成などは、私のそうした書記能力をみこんでくれている。これからは、道成のものもとで、表章などの公用文をしっかりかいてゆこう。江淹はこうおもったのだろう。かくして江淹は、昇明元年ころから道成のもとで、公用文の代作に従事するようになったのだった。

では、右ではあつさりとおりすぎてしまったが、すこし時間をさかのぼり、蕭道成のもとでつづった公用文に焦点をあててみよう。詩文から重点をおきかえ、どのような公用文をかいていたのだろうか。

ここでいう公用文とは、政治的実用に供せられる文のことである。具体的には表章や詔令のジャンルをさし、書記や記室の官が代作することが多い。ただ六朝期では、そうした政治的実用の文であっても、一流の文人が辛苦してかいたものがすくなくない。『文選』のような選集にも、任昉や傅亮らの作が採録されている。では、江淹のものは、それらに伍するほどの名篇なのだろうか。ここでは一例として、宋順帝の昇明二年（四七八）九月にかかれた、『為蕭拝太尉（傳）揚州牧表』という表の文をよんでみよう。

この昇明二年は、宋齊交替（建元元年）の前年にあたる。蕭道成は、順帝からつぎつぎと官爵をたまわり（もちろん、お手もりである）、篡奪の準備を着々ととのえていた。そうした官爵授与の一環として、道成は太傅と揚州牧とをさすられ、それをありがたく拝領することになった。この表は、そのときにかかれた礼状である。

この表をかいたとき、江淹は三十五歳。前年の三十四歳のときは、「無為論」をかいて「自分は仕官せぬ」とかたっていた。しかし、舌の根もかわかぬうちに蕭道成につかえ、こんな表を代作しているのである。

奥ぶかい「臣への」詔勅がくだされ、うつくしい辞令はかがやいています。臣（蕭道成）を遇する儀礼は、過去の英賢に対するものより華麗であり、臣への恩寵は、古籍にかかれた前例より盛大なものです。臣は、あおいでは陛下（順帝）のご威光にふるえ、ふしては自分の愚鈍さに恥じ、「陛下のご厚意に」恐縮してたえいらんほどです。

臣は、己の能力や才能を判断するときは、他人の眼によることなく、みずからの節操をきたえるさいも、おのが本分をみきわめてきました。ですから、官位をゆずるのは、評判をたかめるためではありませんし、辞退するのは、謙遜のためでもありません（真に不適だとおもうからです）。かくして寸心を叙した臣の「辞退の」書簡が、廷臣たちの衣装にふれ、赤心をこめた「固辞の」ことばは、貴人の冠冕をけがしてきたものでした。

ところが、禁裏は肅然として、九重はおごそかです。臣は、むなしく後漢の竇融の誠忠ぶりをおもうだけで、魯陽公が太陽をおしもどしたような真似はできませんでした。こうして陛下の威厳に恐縮しつつ、格別の辞令を拝受させていただくことになりました。

あの隆盛した魏をみならい、偉大な晋をかんがえますに、国の大政の基幹は、ただしき論功と授位とにあります。ですから、民をおさめ乱をしずめる臣下は、けっして低位にいるべきではありませんし、勲もなく徳もとばしき人物は、三公の上においてはなりません。かく適正に配置すれば、臣下らはみな各自の能力をふるい、その器量をまっとうすることでしょう。すると、どうして「それ以上に」風俗を改善し、秩序を再編

する必要などありませんか。

臣は、朝廷をかがやかす功績はなく、国家を安寧とする忠誠ももちえませんが、それなのに荣誉だけは赫赫たるものがあり、努力はしてきても、めぐまれすぎだと自認しております。これまで陛下はずっと、臣に格別の荣誉をたまわり、また異例なほどの高禄をくださいました。おかげで寝ていても恐縮するばかりで、そうした思いを察していただきたいと念じておりました。ですが、陛下の詔勅は正道に則したもので、臣にさらなる勉励の機会をお与えになられたのです。

いま臣は、陛下のご命令を拝領し、詔勅にしたがうことにいたします。よく自己の力量をはかって、危難をのりかえる所存です。ただ、力不足によって民の風俗がみだれたり、規律がゆるんだりするのを心配するばかりです。

臣はどうして、おのが知をしぼり、忠をつくさぬことがあります。ただ、いかにして陛下にお報いし、いかにして感謝を九重の奥につたえるべきか、その術を存じません。全身で陛下のみ心をつけとめ、とわに感謝したいと念じております。

玄文既降、	礼、藹、前、英、	仰震威容、	心、魂、戰、慄、	若、殞、若、殯、
雕牒增輝、	寵、華、昔、典、	俯慚陋識、		
臣	景、能、驗、才、	無、假、外、鏡、	故	讓、不、飾、跡、
撰、己、練、志、	久、測、内、涯、	辭、非、謙、距、		
而	宸、居、寂、阻、	徒、懷、漢、臣、伏、闕、之、誠、	所以	
九、重、嚴、絕、	競、無、魯、人、回、日、之、感、			
		迴、懼、鴻、威、		後、奔、殊、令、者、也、
		寸、亮、尺、素、	頻、觸、瑤、纈、	
		丹、情、実、理、	備、塵、珠、冕、	

既而 永鑒隆魏、国之大政、在功与位。故 治民紐乱、不処輿台之下、
 緬思宏晋、去助舍德、寧班衰司之上。

咸以 休对性業、詎有移風变范、克耀倫序者乎。

裁成器靈、

今臣 績不炤朝、名爵赫曦、黽勉優忝。

忠豈宜国、

陛下久

超以異礼之荣、雖寢寐矜戰、曲垂哀亮、而璽冊冲正、愈賜砥礪。
 越次殊常之秩。

今便

肅順天誥、審躬酌私、必跋危撓、将恐 氓俗由此方擾、
 恭聞睿典。軌訓以之交無、

臣豈不勉智罄忠。未知所以、

報奉淵聖、取諸微躬、長為慚荷。
 輸感霄極。

この表は、授官の礼状にすぎない。だが、じつに難解、じつにこった行文となっている。表文中の各所で、たいへん手のこんだ造語、造句をおこなっているからである。各種の注釈にたよって、なんとか右のような訳文をつくってみたが、どれほど正確に訳せているか、はなはだこころもとなひ。

この表の文の、どこがどう難解なのか。まずは主観をさけ、前人の指摘を列挙してみよう。

(1) 礼譎前英、寵華昔典。

「六朝麗指第二十四節」ここの「譎」「華」は、ともに代字である。「譎」は「茂ん」、「華」も「盛ん」の意

だ。もし、これを「礼茂前英、龍盛昔典」とかきなおしたとしよう。これでは「茂」「盛」の本義をつかっただけ。洗練された表現とはいえず、「藹」「華」などの代字をつかった場合の艶麗さにおよばない。

「六朝麗指第七十四節」「玄文……昔典の四句は」彫琢をきわめている。

(2) 心魂戦慄、若殞若殯。

「六朝麗指第三十七節」「説文解字」では、「殯」を「人が死んだら遺体を棺におさめ、埋葬するまで賓客としてあつかうこと」と説明する。だがこの行文では、「殯」は「死ぬ」の意で解さねばならぬ。章や表は謹直なジャンルであり、「死」字の代わりに「殯」字をつかう必要があるつか。あるはずがない。おもつに、新奇さを一途に追求したため、こんなふうにくじってしまったのだろう。……当時では、これほどまでにしなければ、新奇たりえなかったのだろう。

(3) 景能験才、無假外鏡、撰己練志、久測内涯。

「六朝麗指第七十四節」彫琢をきわめている。

「六朝文繫巻五」彫琢し、また贅肉をそぎおとし、奥妙な新境地をきりひらいている。古人はこの生渋な表現を批判しているが、私は、江淹文学の佳処は、むしろこうした生渋なところにあるとおもつ。

(4) 寸亮尺素、頻触瑤纈、丹情実理、備塵珠冕。

「六朝麗指第七十四節」彫琢をきわめている。

「六朝文繫巻五」「寸亮」云々の四句は、なんども辞退したがゆるされなかったことをいう。

(5) 治民紐乱。

「六朝麗指第七十節」ここの「紐」は、「広雅」釈言に「擘さくなり」とある。「擘」は「礼記」内則に「泥が

かわけば擘さく」とあり、その疏に「とりのぞく」とある。わざわざ「擘」でなく「紐」字をつかったのは、用字を洗練させたためである。

(6) 雖寢寐矜戰、曲垂哀亮、而璽冊冲正、愈賜砥礪。

「六朝文絮卷五」奥妙な構思がきわだっており、よく鍛練されている。

(7) 末知所以報奉淵聖、輸感霄極。

「六朝文絮卷五」造句はたいへん精妙である。

これらの前人の評、いずれも造句や用字の難解さを指摘したものである。こうした難解さ、これを好意的にとれば、「艶麗」「彫琢」「洗練」「奥妙な構思」「精妙」(1)(4)(5)(6)(7)などと評されようが、そうでなければ「新奇」を一途に追求したため、こんなふうにくじってしまった」「生渋な表現」(2)(3)とつづてくるのだろう。また(4)の『六朝文絮』の評は、「寸亮」四句が難解だったので、「なんども辞退したがゆるされなかった」の意だよ、と解説したものである。ということは、この四句は、そうした解説が必要なほど難解だったということであり、これも江淹の措辞の晦渋さをしめすものだろう。

驥尾に附して私見をのべれば、この表の文、難解な字句はこれだけではない。ほかにも、「黽勉優忝」(「優忝」が難解)、「曲垂哀亮」(「哀亮」が難解)、「愈賜砥礪」(句全体が難解)などは、解釈するのにたいへん苦労した。近時の注釈にたすけられて、なんとか右のように訳しておいたが、これでよかったのか、はなはだこころもとな

い。

このように、この表の文は晦渋な字句がおおい。当時の美文は難解な表現がすくなくないが、そのなかでもとくにこったものだ。いずれの字句も、修辭が過多にわたり、鬼面ひとをおどろかす措辭だといってよい。読者の

読みやすさを考慮せず、ただ新奇さの追求にはしってしまったからこうなったのだらう。

この「為蕭拝太尉（傳）揚州牧表」の難解さがとくに指摘されているが、これ以外にも、江淹の表の文の晦渋さに言及した評語がみつかった。それは、

「蕭驃騎謝被侍中慰勞表」に対し

あるひとが「彫琢ぶりが過度にわたっている。だから闊達な風がとぼしい」と評している。だがそうした部分こそ作者の苦心したものであり、このんで難解にしたわけではない。（『六朝文絮』巻五）

「為蕭公三讓揚州表」に対し

これらの諸篇は、どれも装飾した「讓る表」となっている。だから文飾はあっても、真情にはとぼしくなつた。だが、こうした奇異までの装飾ぶりこそ、江淹の独壇場なのである（『駢正文鈔』卷十六）。

などである。後者の「こうした奇異までの装飾ぶりこそ、江淹の独壇場なのである」という言いかたは、褒貶いずれともとれるが、江淹表の「奇異」な特徴をよくおさえた評であらう。

これを要するに、この時期の江淹の公用文は「彫琢ぶりが過度にわたって」いるうえに、「文飾はあっても、真情にはとぼし」い措辞があふれている。その意味で、たいへん難解かつ索漠とした行文であり、名文とはいいがたいと断じてよい。江淹の公用文が『文選』に採録されなかったのは、こうした性格がきらわれたからだろう。昭明太子だったら、「この江淹の文、翰藻は過剰なほどですが、沈思がたりませんね」と評したのではあるまいか。

つづいて、もっとあとの、こうした公用文の創作さえ、やめてしまった時期の作もみてみよう。具体的には、永明六年（四八八、江淹四十五歳）につくった「靈丘竹賦」である。この時期は、江淹は文人としては足をあら

い、もっぱら齊の廷臣や官僚として活躍していた。そのため多忙となつて、詩文をつくる時間はあまりなかっただろうし、またその必要も意欲も、ともになくなつていただろう。

そうした江淹が、めずらしく賦をつくつた。それが「靈丘竹賦」という作であり、現存するなかでは、彼の最後の作品ということになる。蕭道成の後をついだ第二代天子の武帝（本名は蕭嶺。在位四八二―四九三）は、靈丘の新林苑にりっぱな宮觀をつくつた。そしてこの年に、王侯や江淹らをひきつれ、同地に巡幸したのである。そのとき武帝は、同行した侍臣たちに賦をつくるよう命じた。そこで王侯は「靈丘竹賦応詔」という作をつくり、江淹もこの賦をつくつたのである。王侯の標題に「応詔」という語があるが、江淹のこの賦も、おなじ事情でつくられたはずだ。

「才尽きた」はずの江淹が、武帝に命ぜられて、「たぶん」やむなく筆をとつたとき、どんな賦をかいたのだろうか。いささが興味がでないではない。では、武帝の永明六年、四十五歳だった江淹がつくつた「靈丘竹賦」を取りあげてみよう。

けわしくも緑こい山（靈丘）をのぼり、玲瓏たる朱宮（新林苑の宮觀）にはいつてゆく。屈曲した長江がたゆたうのをみおろし、青々とした南山のほうをながめやつた。すると長江の石岸に、春の花があでやかにさき、江渚のほうには、夏の光があかあかとかがやいている。遠方には紫色の禁苑が横につらなり、近辺には天子さまの庭園がひろがっている。

さらに緑竹が巖窟をめぐり、竹やぶが嶺をおおっているのがみえた。黛色はふぞろいで、紺色がふときらめく。上方はしずかで竹林の隙間があり、下方はひっそりとおちついている。朱霞の気があたりをおおい、太陽の陽光はあたたかい。

この地の竹は、花房もなく花蕊もなく、またよい香りもただよわしておらぬ。ただ仙草よりもめずらしく、霊木よりも貴重である。池水をはさんでよくしげり、塘のまわりにすくとたっている。霜がおりてもしばまず、暑熱にあたつても凜としている。おかげで、ここの竹は国の内外で盛名が突出し、水陸の地でもとくに珍重されているそう。

さらにこの霊丘には、朝雲の賓館と行雨の宮殿がそびえている。その窓はおくぶかく緑色をしており、その扉はつらなつて空にむかいあう。彫刻でかざられた窓がしまると、陽光をさつとさえぎり、朱簾がまかれると、そよ風がはいってきた。周辺は箇籐の竹がびつしりしげり、條邊の竹がうつそつとおおっている。また鳩鵲宮の左にもはえており、露寒觀の東でもおいしげっている。

この周辺はすべて、金輿にのつた天子さまが出入りされ、また瑤輦にゆられる貴頭がゆきかう場所なのである。

登崎嶇之碧嶺、臨曲江之迴蕩、郁春華於石岸、遠亘紫林秘野、
 入朱宮之瓊玲、望南山之蔥青、絕夏采於沙汀、近匝玉苑禁垠、
 於是綠筠繞岫、參差黛色、上謐謐而留閒、蒙朱霞之丹氣、
 翠簟綿嶺、陸離紺影、下微微而停靖、暖白日之素景、
 故非英非蕊、珍跨仙草、夾池水而檀欒、既間霜而無凋、每冠名於華戎、
 非香非醜、宝逾靈木、繞園塘而櫺蠹、亦中暑而增肅、將擅奇於水陸、
 況有朝雲之館、窗崢嶸而綠色、綺疏蔽而停日、被箇籐之窈蔚、或産鳩鵲之左、
 行雨之宮、戸踟躕而臨空、朱簾開而留風、結條邊之溟濛、或植露寒之東。

此皆「金輿之所出入、

瑤輦之所周通。

まずこの賦は、全篇が対偶でできているのに注意しよう。ごく短篇のものをのぞき、一篇中の句すべてが対偶というのは、あの徐陵「玉台新詠序」でもなかったことで、まことにすばらしいといわねばならない。

さらに、対偶中の字句の対応も巧緻だ。たとえば、「緑筠繞岫↓翠簾綿嶺」や「蒙朱霞之丹氣↓暖白日之素景」の対偶は、色彩などの対応がコントラストにとみ、江淹の手腕、なおおとろえずという感がする。いつばう、冒頭の「登崎嶇之碧嶽↓入朱宮之瓏玲」の聯は、字句の対応からすると「登崎嶇之碧嶽↓入瓏玲之朱宮」とすべきだろうが、これも江淹ふうの新奇さをねらった表現なのだろう。

だが、そうした表現の充実さに対し、内容の希薄さはどうであろうか。靈丘（新林苑）にたてられた宮觀が、こんなにはすばらしく、そこにはえた竹も、たいへんりっぱなものですよ、というだけ。末尾二句で、「金輿にのつた天子さまが出入りされ、また瑤輦にゆられる貴顯がゆきかう場所」とあるので、天子（斉の武帝）や宮觀の非凡さをたたえようとしているらしい、と気づく程度だ。だが、それだけ。この賦には、漢賦が王朝の威容を賛美せんとした、あのたくましい情熱は、どこにも感じられない。

応詔の短賦とはいえ、あまりに空疎、あまりにも退屈にすぎはしないか。ただ洗練された用語をならべ、それを対偶にととのえたにすぎぬ。宮觀がりっぱだろうと、周囲の竹がきれいだろうと、それがどうだというのか。作者は靈丘の竹のなにに感動し、なにをつたえたいのか、読者にはさっぱりひびいてこないのである。

彼が呉興左遷時につづった「去故郷賦」や「傷愛子賦」は、こんな無感動、無内容の字句ではなかった。それらは、彼の嗚咽や悲痛がそのまま字句に昇華したような、つよい訴えやみずみずしい情感を、ゆたかにたたえて

いた。ところがこの「靈丘竹賦」では、そうしたものはすっかり枯渇し、ひあがってしまっている。一言でいえば、魅力がなくなっているのである。

四十五歳の江淹は、こんな無味乾燥したものしか、つくれなくなってしまったのだった。この「靈丘竹賦」、ぼんやりよんだだけでは、わからないかもしれぬが、彼の呉興左遷時の名篇とくらべたとき、その無残な「才尽」ぶりに、あらためて気づかされるのである。

十一 「われ」なき名篇

本稿の最後に、「才が尽きる以前の」江淹がかいた、傑作群にもふれておこう。

江淹の傑作とされるものは、ふしぎに「われ」が背後にかくれたものが多い。具体的には、「雜体詩」三十首、「恨賦」、「別賦」の三篇がそれだ。この三篇に共通するのは、「われ」が作品の前面にでて、主題をかたろうとしていないことである。すなわちこの三篇では、「甲である」ということを主張しようとしても、作者の江淹は、「われ」を表面にだして「自分はこうこうとかんがえる。だから甲である」とはいわない。ただ事例（模擬詩や故事）をたくさん列挙してゆき、「こうした事例がある。だから甲であるなあ」という婉曲な叙しかたをするだけなのである。

こうした叙しかたと関係するのだろう、この三篇はいずれも、創作時期が確定しにくいという特徴がある。江淹の詩文はおおく、なにかの出来事（時事、左遷、妻子の死など）にふれての創作なので、つくった時期も、比較の見当がつきやすい。それに対しこの三篇では、事例はおおく叙されているものの、「われ」の事迹（私はか

くなした）や意見（私はかくおもつ）が前面にでてこないで、創作時期を特定しにくいのである。

こうした叙しかたをした三篇が、江淹の畢生の傑作とされているのは、なにか特有の事情がありそうだ。なぜ江淹はこうした叙しかたをし、そしてそれが傑作だと評されているのか。そして創作年代はいつごろか。以下、「われ」が前面にでないという特徴に着目しながら、この三篇を考察してみよう。

まず「雑体詩」三十首をみてみよう。「雑体詩」は、無名氏もふくめ、三十人の詩人をえらび、その模した詩を時代順に列挙した、連作模擬詩である。過去の詩人三十人に敬意を表しつつ、各人の特徴をすくいあげ、いかにもそのひとらしい模擬詩をつくってならべたものだ。これらの詩、引用は略すが、じつにたくみなもので、嚴羽『滄浪詩話』詩評も、「雑体詩」の模擬詩に対し、

擬古は惟だ江文通のみ最も長じたり。淵明に擬すれば淵明に似て、康樂に擬すれば康樂に似て、左思に擬すれば左思に似て、郭璞に擬すれば郭璞に似たり。

と評している。

さらに興味ぶかいのは、「雑体詩」の詩は純粹に模擬に徹していて、個人的な「われ」（江淹）の声は、いっさいいけしきである。以前にかいた模擬詩「效阮公詩」では、阮籍の「詠懷詩」を模しながら、「われ」（江淹）が、劉景素に「異図をもためよ」と諷していた。ところがこの「雑体詩」では、そうした「われ」の声は完全にきえさり、ただ模擬それ自体に徹しているのである。

では江淹は、どうして「われ」を後退させた叙法をとったのか。ある種の文学的效果をねらったということもあるいはあつたかもしれない。だが私は、いちばんの理由は、江淹の意識の底にあつた、寒門出身らしい謙抑な姿勢にあつたろうとおもふ。

そもそもこの江淹、門地を重視する当時の官界にあつては、自分は万般にわたつて、謙抑な姿勢をとらねばならぬと、よく認識していたはずだ。さきにみた「傷愛子賦」でも、「わが江氏の先祖をふりかえれば、赫赫たる帝高陽（顓頊）の子孫に由来している。ただ遺憾なことに、後世になって勢威が衰微し、子孫が旧時の輝きをたもてぬことを心配していた」とかたつていた。おのが江氏は「勢威が衰微し」「旧時の輝きをたもてぬ」一族だと、はっきり自覚していたのである。

じつさい、江淹は少年時、薪かきとりをして母をやしなうという、辛苦の日々をすごしていた。そのためだろう、江淹はしばしば、おのが詩文において、

「詣建平王上書」下官はもともと、蓬よもぎや桑で戸をつくるほどの貧家の生まれで、布衣ふいにしてなめし皮おひを帯にした下賤の士です。

「与交友論隱書」私は以前、海の浜辺や山の窟穴にすみ、漁獵の民と仲間になっていました。などと自称し、へりくだる姿勢をわすれていない。

さらに江淹は、三十一歳のとき、「效阮公詩」という政治に口出した模擬詩をつくつて、劉景素をおこらせるといふ失敗をしかしてしまった。こうしたにがい経験によって、江淹はあらためて、政治方面でも謙抑すべきことを自覚したのだろう。

これ以後の彼は、おのが政治的意見を上奏することには、たいへん慎重になった。じつさい、彼の作品リストには、政治上の章表や論説の類はほとんどない。現存するのは、代作をのぞけば、官位授与の御礼ぐらいにすぎず、おのが政略や抱負をかたつたものではない。堂々たる政論を披瀝するのは、雲上の貴人たちの仕事である。自分のごとき寒門出身の者が、そうしたことに口をはさむと、ロクなことがない。景素で失敗した江淹はこうお

もって、経世への口出し（とくに諫言の類）をみずから禁じたのだらう。ときに主君にせまられて、口頭で意見をのべることはあったが（蕭道成や蕭鸞にむけてのべた、前引のものなど）、ほとんど追従や恭順のことばでしかなかった。

また、そもそも彼は、経世上の「かくなすべし」という見識や意欲は、もちあわせていなかったようだ。彼の生涯をみれば、宋末から斉にかけて、表や詔勅の積極的な代作をおこなっている。さらに斉の鬱林王のとき、御史中丞になるや、果敢な弾劾や肅正もおこなったこともあった。しかし、それらは蕭道成や蕭鸞の意をうけ、その意思を代書し、代行したものにすぎない。彼みずからの経世意欲や「かくすべし」の信念に、したがったものではなかったのである。

江淹はただ、「つよい側」につくことだけが目標だった。それゆえ、「つよい側」について立身したあと、それからどうするか、というような考えは、もちあわせていなかったのだらう。彼の望みたるや、せいぜい侍中の地位にのぼり、「仕官しても、ただ卿の地位と二千石の禄があればよく、もし日々の暮らしをたて、夏冬の祭ができるほどの蓄えがあれば、すぐにでも隠遁したい」という程度だったのである（「一 黄昏の回想」を参照）。そうした江淹だったので、立身し高位についても、「かくなすべし」という政治的主張はなかったし、なにかしらの治略を実践する気もなかったのだらう。

こうした寒門出自に由来する、消極的な人生态度や政治姿勢は、彼の詩文創作にも、すくなくからず影響をあたえたに相違ない。たとえば、一世代まえの寒門文人だった、鮑照の場合を想起してみよう。彼は、ときの天子、宋孝武帝が詩文をこのんで、自分がいちばんの妙手だと自負していることをした。そこで彼は、わざと下手な詩文をつくるようにして、孝武帝の機嫌を損じることをさけたという（『宋書』臨川烈武王道規伝附鮑照伝）。

鮑照にこうしたことがあったとすれば、江淹の場合においても、おのが文才を誇示したいけれども、貴人のまえでは、それもはばかれるというような場面が、なんどかあったことだろう。そうした寒人特有の事情が、いろんな場面で、いろんなふうに、彼を謙抑的な姿勢にさせたのだとおもわれる。

そうした一例だろう、江淹は、詩文創作の場において、時代をリードしようというような、革新的な文学的主張はかたろつとしなかった。彼は、政治の場でもそうであったように、創作の場でも、文質彬彬であるべきとか、声律を諧調させねばならぬなどの、「われ」独自の主張はかたつていない。ただ主君に氣にいられるべく、主君の好みに適した詩文をつくってきただけだった。

寒門出身の江淹においては、詩文創作（とくに「效阮公詩」での失敗以後の創作）をおこなう場合、「主君に氣にいられる」こと、それがなにより重要なことだった。そのためには、「われ」の好みなどに、こだわつてはおれない。主君に氣にいつてもらうためには、各種のスタイルをひろくまなんでおき、各様の作風を修得しておかねばならない。そして、劉景素が近時の文人甲の詩文がすきだとわかれば、さつと甲ふつの作をかけるようであればならないし、また蕭道成がふるい乙時代のスタイルをこのむとすれば、すぐ乙ふつの作風に対応できないければならない。

そのためには、だれの、そしてどんな時期の作風にも、通じておく必要がある。もともと詩文の才にすぐれ、器用でもあった江淹は、そのための模擬研究をじつくりおこなったのだろう。明の張溥は、そうした江淹の器用さを、つぎのようにかたつていいる。

私（張溥）はつねづね、江淹と任昉の二人は、駢偶を自在にあやつり、なんの拘束もなくつづつたんだらうとおもっている。

もし兩人が漢代に生まれていても、その才腕をふるえば、ふるくは枚乗（あざな叔）や谷永（あざな子雲）ぐらいにはなれただろうし、くだつては馮衍（あざな敬通）や孔融（北海は官名）あたりの作をつづつたことだろう。ただ彼らは南朝の後半期に生まれたので、華麗な修辭を駆使したにすぎない。卓抜した才能を有した点からみると、兩人はまだ才能を発揮しつくしたとはいえぬ（なんでも自在にかけたはずだ）。

張溥からみれば、江淹は自在な才腕をもった文人であり、「その才腕をふるえば、ふるくは枚乗（あざな叔）や谷永（あざな子雲）ぐらいにはなれただろうし、くだつては馮衍（あざな敬通）や孔融（北海は官名）あたりの作をつづつた」はずなのである。つまり彼の文学的な資質は、ときと場合にふさわしい詩文を、適宜に、そして自在にかきわけけるような、柔軟性にとんだものだったのだろう。その意味で、この模擬という手法は、もつとも手なれた叙しかたであり、彼がそれを得意にしたのは必然だった。すると江淹の「われ」なき「雜体詩」は、そうした模擬の研究成果の、いわば集大成のようなものだったのかもしれない。

くわえて彼は、いろんな時代の、いろんなスタイルを熱心に模擬してゆくうちに、あらためて、各時代の詩がもつ、特有の魅力に気づいたのだろう。そこで彼はこの連作の序文で、つぎのように主張したのだった。

楚の詩歌と漢代の作風はおなじでないし、魏の文学と晋の詩文も、またことなるものだ。それは、たとえば、藍や朱などのいろどりは、それぞれの色が多様な交錯の美をしめし、宮や角の音階は、それぞれの響きが無限のハーモニーをかなでるようなものだ。だから女性の美しさがちがっても、ひとしく心をときめかすし、草花の香りがちがっても、おなじように気分がよくなるのも、これとおなじ原理ではないだろうか。……

ところで五言詩の発生は、それほどふるくはないが、前漢と魏代では詩風がことなっているし、西晋と東晋以後でも、そうとう傾向がちがっている。これら各代の詩は作風や傾向の相違があり、また辞藻や音律の

違いもあるが、私は、それぞれに美をそなえ、善を有しているとかんがえる。

いま私は、三十首の詩をつくって、歴代の詩風を模倣してみた。これら三十首の模倣詩は、歴代の詩の変容ぶりをただしく品評したものではないが、まったくの見当ちがいでもあるまいとおもっている。

夫「楚謡漢風、既非一骨。譬猶「藍朱成彩、雜錯之變無窮、

魏製晉造、固亦二体。「宮角為首、靡曼之態不極。

故「娥眉詎同貌、而俱動於魄、不其然歟。……

「芳草寧共氣、而皆悅於魂、

然五言之興、諒非亶古。但「關西鄴下、既以罕同、故「玄黃絳緯之弁、

「河外江南、頗為異法。「金碧沈浮之殊。

僕以為亦各具美兼善而已。今作三十首詩、駁其文体。雖不足品藻淵流、庶亦無乖商榷云爾。

江淹はいう、各代の詩は「それぞれに美をそなえ、善を有している」と。この発言を、私なりに補足したなら、「だから、そうした各代の詩をつましく模倣して、主君に気にいられるようにするとよいぞ」と、江淹はいいかつたのだらう。謙抑的だった江淹に文学的主張があったとすれば、こうした「主君に気にいられるようにせよ」というのが、それであろうか。江淹はそのことを示唆しようとして、そしてその具体的手段として、各代の模倣詩を三十篇も連作し、それを提示してみせたのだらう。

くわえてこの模倣の手法は、おだやかな詩才誇示ができるという点でも、都合がよかったとおもわれる。過去の詩文を媒介させるため、「われ」の才腕を露骨にみせつけることなく、ワンクッションおいたようなかたちで、主君に「ほほう」と感心してもらうことができる。そうした婉曲な自己宣伝ができる模倣手法は、寒門出身の江

淹にはもちろんだが、それ以外の「主君の意をむかえたい」人びとにも、かつこつのお手本になったことだろう。こつこつふうにして、「われ」を主張しない「雑体詩」は当時たかく評されるようになり、やがて彼の傑作だとされていったのだと私はおもつ。

そして、謙抑さに由来するこの「われ」なき模擬と、江淹の生地きじというべき恨人さ（多情多恨な性格）とが合体したのが、彼の畢生の名作「恨賦」「別賦」だったとかんがえられる。この両賦では、「雑体詩」で模擬詩を列挙したように、恨みや別れ関連の故事（恨人が、とくにこのみそうなものだ）を、ひたすら列挙しているからである。

こつした故事列挙の手法や効能については、私はかつて『六朝の遊戯文学』第十九章や『六朝文体論』第十四章において、「恨賦」を例にあげて些少の考察しておいた。すなわち「恨賦」では、江淹はまず、

僕本恨人、心驚不已。直念古者、伏恨而死。

自分は多情多恨な男で、死のことをおもったびに小心翼翼とすごしている。だから、わが思いはつねに、無念のまま死んだ古人のほうにむかうのだ。

とかたっている。こつしたいつぷうかわつた序文ふう文章を冒頭において、江淹は以下に、恨みをもちつつ死んでいった古人の、さまざまな話柄を列挙してゆく。

秦の始皇帝が剣をかざすや、諸侯は西の秦にさせ参じた。始皇は天下を平定し、文字や度量衡を共通にし、華山をわが庭、紫淵をわが池とした。だが雄図はつきず、武力をおさめない。大亀をわたして橋とし、西の海をめぐつて太陽をみようとした。ところが忽として魂がうしなわれ、あの世に旅だってしまった。

趙王遷は秦の捕虜となり、房陵に配流された。薄暮に無念の気もちがわき、明けがたも心は動揺する。艶

姫や美女とひきはなされ、金玉の馬車もつしなつた。宴席で酒をのまんとすれば、悲しみに胸がふさがる。その恨みはたえがたく、千年も万年もつづくほどであった。

至如「秦帝按劍、削平天下、同文共規。」

諸侯西馳。

華山為城、紫淵為池。

雄圖既溢、方「架龍鼉以為梁、一旦魂斷、宮車晚出。」

武力未畢。「巡海右以送日。」

若迺趙王既虜、遷於房陵。「薄暮心動、別艷姫与美女、

昧旦神興。「喪金輿及玉乘。」

置酒欲飲、悲來填膺、千秋万歳、為恨難勝。

右では、秦の始皇帝と戦国の趙王遷の故事だけをあげた。このあと、前漢の李陵、王昭君、後漢の馮衍、晋の嵇康らの故事を列挙してゆく。このように「恨賦」では、ひたすら恨み関連の故事を列挙し、読者の胸中を「恨み」の情緒でいっぱいにしてしようとしているのである。

最後にいたつても、ただ「むかしから死はひとしくおとずれてきた。無念のおもいをのみこみ、嘆きの声をしのばなかったものは、だれもいかなかったのだ」(原文「自古皆有死、莫不飲恨而吞声」)という、ため息のごとき詠歎がつづられるだけ。これが「恨賦」のすべてであり、なんら結論めいた言辞は布置されていない。末尾の部分など、たとえば、始皇帝や趙王遷に関する「われ」の見解や「恨み」への洞察などが、披瀝されてもよさそうである。しかしそれらは、いっさい叙されることはない(「別賦」もこれとどうようで、別れに関する故事を列挙するだけで、やはり江淹の考えは提示されることはない)。

この「恨賦」、始皇帝の故事や戦国の趙王遷の故事を、それぞれ一篇の模擬詩とみなせば、「雜体詩」とおなじ手法だとみなすことができる。やはり、故事を列挙することによって、「この世には恨みがみちている」という主題を暗示しているのである。その意味では、「恨賦」と「雜体詩」とは、同種の創作手法に依拠した姉妹作とみなすこともできよう。

「恨賦」がとった、故事列挙による主題暗示は、高度に技巧的かつ作爲的な手法だといってよい。比較のために、呉興左遷時につくられた「去故郷賦」の叙法を想起してみよう。そこでは、江淹は景素にむけて、「私はつらい」「かなしい」「ゆるしてほしい」と声高にうったえていた。自分を忠臣の屈原に模し、篇中に悲痛な情感をみなぎらせてはいたが、単調といえたいへん単調な作である。それに対し「恨賦」では、声を大にしてうたえるのではなく、故事の列挙によって、それとなく、じわじわと主題を暗示しようとしている。「去故郷賦」にくらべると、たいへん冷静、かつ技巧的なものだといわねばならない。

ただ、この、じわじわとした訴えかけは、かなり効果的だったようだ。清の許槌は、この「恨賦」の故事列挙の手法に対して、

一話また一話と、ひとつずつ故事を叙してゆくややかたは、読者を慷慨させ、また激昂させる。この文をよめば、英雄だつて涙をながすだろう。

とのべ、たかく評している（『六朝文絮』巻二）。許槌がいいたいのは、「一話また一話と、ひとつずつ故事を叙してゆく」手法が、強烈な慷慨や激昂の感情をよびおこし、「英雄だつて涙をながす」迫力をつみだした、ということだろう。

つまり、無念な故事をいちずに列挙してゆく構成は、嗟嘆や繰りごとを声高にかたるよりも、恨みの情緒を喚

起するのに、ずっと効果的だったのである。この「恨賦」や「別賦」が彼の傑作だと評されたのは、そうした技巧的かつ効果的な訴えにあったといつてよからう。

このようにみえてくると、「われ」が背後にかくれた「雑体詩」「恨賦」「別賦」の三篇は、呉興左遷時の「去故郷賦」「待罪江南思北歸賦」などとは、かなりちがった手法でつくられているといつてよからう。とすれば、その創作時期も、とうぜんことなっているとかがえねばならない。では、「雑体詩」をふくむこの三篇は、いつごろにつくられたのだろうか。

この三篇に共通する列挙手法を注目したとき、その前駆とおぼしき作がある。それが、「泣賦」と題された賦である。この賦は標題からも連想されるように、「恨賦」や「別賦」と相似した意図でかかれたものだろう。これはみじかいもので、全篇を紹介しよう。

秋の陽ざしははかなく、私の心をいたませる。濃霧がたちこめて草花をしぼませ、清風がふきよせて庁堂をめぐる。周囲をみても知人はおらず、衣冠をとのえても気分はわびしいまま。

そこで私はだまりこんで、ふかい山谷にのぼり、山の頂上にすわってみた。桐柏の樹によりかかり、岩石からわきでる泉にむかいあう。遠方をまっすぐみつめると、あちこちに秋の煙霧がただよっている。寂然したなか物思いにふけるが、私の気分はいつまでもはれぬ。

蕩々たる江水、岸辺の蓮葉はあかくそまり、南方にたつ喬木は、もう葉をおとしはじめた。わが心はぼんやりとして要領をえず、魂も茫洋として四圍をさまようだけ。すると、本貫の済陽の古俗を詩に詠じ、故郷の南徐州や揚州の遺風を想起しようとした。だが、南徐州や揚州を想起しようにも、関や橋梁で邪魔されるし、済陽の地を詠じようにも、あまりにもはなれている。道はあちこちでおれ、たちきれ、魂もゆきかねて、

悲痛な思いをするばかり。涙がこぼれおちて袖をしめらせ、嗚咽のあまり袈衣もぬれてしまった。

たとえば、斉の景公が牛山にのぼって国都をながめ、荊軻が燕の市場で飲酒高吟したとき。また孟嘗君が雍門周の弾琴をきき、司馬遷が史書の廃されるのをおそれたとき。また李陵が包囲されて運命をいたみ、王衍が息子の死をかなしんだとき——こうしたとき、みな涙が糸のように頬をつたつたそつだが、そうした彼らを私はどうして仰視できよう。

上古から觀察してみると、人びとはかくのごとく涙をながしてきた。とすれば、多情な私にあつては、いうまでもないことだ。

秋日之光、流兮以傷

霧離披而殺草、
風清冷而繞堂。

視左右而不騰、默而
具衣冠而自涼。

登高谷、
坐景山、

倚桐柏、
對石泉、

直視百里、処処秋煙、闌寂以思、情緒留連。

江之永矣蓮葉紅、南有喬木葉已窮。

心蒙蒙兮恍惚、
魄漫漫兮西東。

詠河袞之故俗、
眷徐揚之遺風。

眷徐揚兮阻閑梁、詠河袞兮路未央。

道尺折而寸斷、
魂十逝而九傷。

歎潺緩兮沫袖、
泣嗚咽兮染裳。

若夫

「齊景牛山、
荊卿燕市、

孟嘗聞琴、
馬遷廢史、

少卿悼躬、
夷甫傷子、

皆泣緒如絲、
詎能仰視。

鏡終古而若斯、況余輩情之所使哉。

この賦では、末尾ちかくの「たとえば、斉の景公が牛山にのぼって」(原文「若夫齊景牛山」)以下で、故事が

列挙されているのに注目しよう。斉の景公はかくかく、燕の荊軻はしかじかと叙して、「泣く」故事をつらねてゆき、「泣く」という感情をつきあがらせようとしている。そして、最後に「上古から觀察してくると、人びとはかくのごとく涙をながしてきた。とすれば、情ふかい私にあつては、いうまでもないことだ」（原文「鏡終古而若斯、況余輩情之所使哉」とのべるなど、いかにも「恨賦」「の末尾部分」とよく似たことばで、一篇をむすんでいる。つまり標題だけでなく、内容の面でも故事を列挙したり、「泣く」感情をつきあがらせたりする点で、「恨賦」「別賦」との相似をおもわせるところがあるといつてよい。

ただ、「恨賦」や「別賦」との相似は、末尾ちかくの「若夫斉景牛山」以下の部分だけであり、それ以前の部分では、それほど類似はしていない。この賦、冒頭では、秋のはかない陽ざしのなか、周囲に知人もあらぬ「われ」（江淹）がでてくる。その江淹、ひとりで庁堂をでて山谷にはいつてゆき、高山の頂きにのぼってゆく。そして、はるかとおくの故郷をながめつつ、望郷のおもいにとらわれてしまった。かくして「道はあちこちでおれ、たちきれ、魂もゆきかねて、悲痛な思いをするばかり。涙がこぼれおちて袖をしめらせ、嗚咽のあまり裳衣もぬれてしまった」とつづくのである。

このように「若夫斉景牛山」以前の部分では、江淹は積極的に「われ」を前面にだしており、まだ故事列挙が全篇をおおうほどではない。こうした「われ」隠しの不徹底さや、部分的にとどまる故事列挙から判断すると、この「泣賦」は、「恨賦」や「別賦」の前駆ふうの作だったとおもわれる。

この「泣賦」は、「われ」が前面にでているため、創作年代もわかりやすい。丁氏『江淹年譜』は、「泣賦」の創作年を、元徽二年（四七四）、江淹が呉興に左遷させられた年にかけている。その論拠として、たとえば賦中の「周囲をみても知人はおらず」は、いかにも呉興への左遷直後をおもわせるし、「本貫の済陽の古俗を詩に詠

じ、故郷の南徐州や揚州の遺風を想起しよう」などとあるのも、呉興にすればこそその感慨だろう、と指摘されている。

元徽二年といえは、あの「效阮公詩」「傷友人賦」「袁友人伝」「去故郷賦」、そして「被黜為呉興令辞箋詣建平王」などの傑作をつくった年である。江淹にとつては、呉興に左遷された不幸な年であつたが、いっぽう彼の文学にとつては、生産性ゆたかな年でもあつた。そうかんがえれば、同年に「泣賦」がつくられ、またそこに悲痛な情緒や陰鬱な雰囲気がただよっているのも、なるほどと納得されるわけである。

だが、そうだったとすれば、逆に、「恨賦」「別賦」の創作年は、この年だとすべきではないだろう。この両賦では、無念だとか、かなしい、つらいなどの感情を、第三者的に、おちついた目でみつめている。さらに、自分を恨人、つまり多情多恨な男であると、理性的に自己判断することができていた。こうした創作のしかたは、冷静かつ客観的なものであり、かなしい、つらいという感情に、翻弄されるままだった「傷友人賦」や「去故郷賦」などにとくらべると、その感情処理のしかたに、ずいぶん違いがあるとせねばならない。

こうみてくると、「恨賦」「別賦」は、呉興左遷時の作とはかんがえにくい。かく冷静な感情処理ができるようになるには、ただ漫然と時間が経過するだけでなく、江淹の心境を変化させるにたる、おおきな環境の変化があつたに相違ない、とかんがえるべきだろう。すると、そのおおきな環境の変化とは、辺地の呉興から、繁華な建康（あるいは故郷の京口）に帰還すること以外にはありえない。

その意味で、私は、「恨賦」や「別賦」の創作は、心がおちつき、精神的な余裕ができた時期、具体的には、呉興から帰還したころが、もっともふさわしいとかんがえる。江淹は故郷へ帰還後、すぐに蕭道成に声をかけられて仕官し、多忙な日々をおくるようになった。すると元徽五年（四七七）、三十四歳の江淹が建康、あるいは

故郷に帰還して、蕭道成につかえる以前のわずかなあいだに、近過去の経験をおもいだしながら、この両賦をかけた可能性がたかいようにおもつ（あの「無為論」をかけたころだ）。そのとき江淹は、「泣賦」における創作体験を想起しながら、その「われ」隠しや故事列挙の手法をさらに徹底させ、展開していったのだろう。

いっぽう、まえにものべたように、「恨賦」「別賦」の故事列挙を模擬詩の列挙におきかえたのが、「雑体詩」の三十首連作であつた。それゆえ「雑体詩」も、この時期に主要なものができたのだろう。ただ連作ゆえ、その最終的な完成は、おそらく丁氏『江淹年譜』もいうように、もっとおそく、三十九歳ごろまでくだるのではあるまいか。

賛にいう。江淹さん、あなたは、いろんな意味で成功者でした。寒門に生まれ、父が早世するという境遇でしたが、最終的には、金紫光祿大夫という二品官にのぼりました。貧窮だった少年時、あなたは母とともに、侍中になることを夢みていたようですが、それ以上の高位につけたのです。詩文の方面でも、質量とも拔群の諸作を完成させ、文学史にその名をとどめています。「江郎才尽」の逸話など、気にする必要はありません。あなたは、アメリカンドリームならぬ、寒人ドリームを体現したのです。やすらかに眠りください。

江淹略年譜

【四四四（元嘉21） 1歳】京口に生まれる。父は康之、南沙令。母は平原劉氏。

【四五六（孝建3） 13歳】父死す。山で薪をとって母をやしなう。母子で侍中への立身をねがう。群書に博通し、詩文に専念する。二十万言を誦詠する。

【四六三（大明7） 20歳】建康にゆき、始安王劉子真に五經を教授する。新安王劉子鸞の幕府にて、従事として起家する。「奏記詣南徐州新安王」。

【四六四（大明8） 21歳】奉朝請に転ず。劉子鸞から劉子真の幕府にうつる。「侍始安王石頭詩」。

【四六五（永光・景和・泰始1） 22歳】劉子鸞、前廢帝に賜死さる。劉子真にしたがって広陵へゆく。

【四六六（泰始2） 23歳】劉子真、明帝に賜死される。建平王劉景素につかえる。

【四六七（泰始3） 24歳】在広陵。下獄するも「詣建平王上書」で釈放される。

【四六八（泰始4） 25歳】劉休範によって秀才に推挙される。対策及第し、劉休若の右常侍（左常侍とも）となつて湘州へゆく。

【四六九（泰始5） 26歳】湘州から劉景素のもとにかえり、吳興太守となつた景素にしたがう。「報袁叔明書」。

【四七〇（泰始6） 27歳】劉景素にしたがって湘州へゆく。「從冠軍建平王登廬山香爐峯詩」。

【四七一（泰始7） 28歳】劉景素にしたがって荊州へゆく。「建平王散五刑教」「建平王聘隱逸教」。

【四七二（泰豫1） 29歳】劉景素、宋廷に異図をいだく。劉景素にしたがって京口へかえる。鎮軍參軍、南東海郡丞となる。

【四七三（元徽1） 30歳】在京口。「与交友論隱書」。

【四七四（元徽2） 31歳】「效阮公詩」十五首をつくって景素をいさめる。建安の呉興令に左遷される。「傷友人賦」「袁友人伝」「去故郷賦」「泣賦」「被黜為呉興令辞箋詣建平王」。

【四七五（元徽3） 32歳】在呉興。「待罪江南思北帰賦」「傷愛子賦」。

【四七六（元徽4） 33歳】在呉興。劉景素反するも失敗して殺害される。妻の劉氏死ぬ。「悼室人詩」。

【四七七（昇明1） 34歳】建康および故郷の京口にかえる。蕭道成につかえ、尚書駕部郎、驃騎参軍事となる。以後、蕭道成のための章表おとし。「還故国詩」「無為論」「知己賦」。また「恨賦」「別賦」も、この年につくったか。

【四七九（昇明3・建元1） 36歳】蕭道成、斉をたて高帝となる。蕭道成のための詔勅おとし。豫章王蕭疑（道成の次子）の下で驃騎記室参軍となる。

【四八〇（建元2） 37歳】東武令、正員散騎侍郎、中書侍郎。

【四八二（建元4） 39歳】高帝没し、蕭贍が褚淵と王儉に補佐され即位する（武帝）。「齊太祖高皇帝誄」。また、この年までに「雜体詩三十首」完成か。

【四八三（永明1） 40歳】驃騎將軍、掌国史、建武將軍、廬陵内史。恩人の檀超が没し、「齊故司徒右長史檀超墓誌文」をかく。自分の前集十巻を撰す。「自序」。

【四八五（永明3） 42歳】驃騎將軍、兼尚書左丞、国子博士。

【四八七（永明5） 44歳】このころ、蕭子良西邸の集いに参加か。

【四八八（永明6） 45歳】「靈丘竹賦」（現存のなかで最後の文学作品）。

【四九三（永明11） 50歳】御史中丞。謝朓らを弾劾する。武帝崩じ、鬱林王たつ。

【四九四（隆昌、延興、建武1） 51歳】鬱林王・海陵王ともに廃せられ、明帝たつ。車騎將軍臨海王の蕭昭秀の長史となる。

【四九五（建武2） 52歳】廷尉卿、給事中。冠軍長史、輔国將軍。娘の才君の義父が明帝に誅殺され、その関連で才君も死ぬ。

【四九六（建武3） 53歳】才君の義父が誅殺されたことに連座して（？）、宣城太守につつまれる。

【四九八（建武1） 55歳】在宣城。明帝没し、東昏侯が即位する。

【四九九（永元1） 56歳】宣城太守から建康にかえり、黃門侍郎、歩兵校尉、秘書監、侍中（侍中は少年時、江淹母子がねがった官位）となる。

【五〇〇（永元2） 57歳】三月、崔慧景が広陵で反し、建康にせまる。江淹、病と称してうごかず。四月、蕭懿が崔慧景をころす。十月、蕭懿が東昏侯にころされる。十一月、蕭衍が襄陽で挙兵する。

【五〇一（永元3、中興1） 58歳】三月、蕭宝融が江陵で即位して和帝となり、蕭衍は義師をひきいて建康にむかう。江淹は秘書監のまま衛尉を兼務する。だが九月、義師が新林にいたるや、微服して蕭衍軍にはしる。冠軍將軍、秘書監、司徒左長史、吏部尚書。

【五〇二（中興2、天監1） 59歳】蕭衍、和帝より禅りをうけ梁朝を樹立する。散騎常侍、左衛將軍。のち金紫光祿大夫、醴陵伯。

【五〇五（天監4） 62歳】死ぬ。武帝は素服して哀を挙げ、憲（または憲伯）という謚をおくった。

* 右の略年譜は、ほぼ丁福林『江淹年譜』に依拠して作成した。

参考文献

著書

- 高橋和巳『作品集9 中国文学論集』『江淹の文学』『六朝美文論』（河出書房新社 一九七二）
 俞紹初・張亞新『江淹集校注』（中州古籍出版社 一九九四）
 曹道衡『中古文学史論文集統編』『江淹作品寫作年代考』（文津出版社 一九九四）
 東道定雄『宋書物語』（日本図書刊行会 一九九七）
 大上正美『阮籍・嵇康の文学』『江淹の挫折 建安吳興の令左遷をめぐって』（創文社 二〇〇〇）
 『六朝詩人伝 江淹の条（大修館書店 二〇〇〇）』
 蕭合姿『江淹及其作品研究』（文津出版社 二〇〇〇）
 福井佳夫『六朝の遊戲文学』『江淹恨賦論』（汲古書院 二〇〇七）
 丁福林『江淹年譜』（鳳凰出版伝媒集団 鳳凰出版社 二〇〇七）
 金秀雄『中国神仙詩の研究』（汲古書院 二〇〇八）
 羅立乾・李開金『新訳江淹集』（三民書局 二〇一一）
 松浦史子『漢魏六朝における山海経の受容とその展開』（汲古書院 二〇一二）
 福井佳夫『六朝文体論』『上書のジャンル 江淹詣建平王上書を中心に』（汲古書院 二〇一四）
 丁福林・楊勝朋『江文通集校注』（上海古籍出版社 二〇一七）
 黒田眞美子『韋心物詩論』『江淹の悼亡詩について』（汲古書院 二〇一七）
 郭晨光『江淹雜体詩三十首研究』（中国社会科学出版社 二〇一二）

* 右のうちでは、『江淹年譜』『新訳江淹集』『江文通集校注』の三書がとくに有用だった。前者は江淹の事跡をかたると

き、後二者は作品を読解し、その意義をかんがえるとき、それぞれおおいに参考にさせていただいた。感謝もつしあげる。

論文

- 森博行「江淹雜体詩三十首について」(『中国文学報』第二十七号 一九七七)
- 中野将「江淹効阮公詩について その時代と文章制作の姿勢」(『中国文化 研究と教育』第四五号 一九八七)
- 中野将「江淹集の変遷」(『中国古典研究』第三三号 一九八八)
- 黒田眞美子「江淹詩の叙景表現について その色彩を中心として」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第二〇号 一九九八)
- 王大恒「江淹作品の道家傾向」(『寧波大学学报』二〇〇五 三)
- 屠青「近十年江淹研究綜述」(『中州学刊』二〇〇五 一)
- 陸岩軍「江郎才尽 研究述評」(『重慶郵電学院学報』二〇〇六 三)
- 黄九蓮「低沈哀傷、濃鬱悲情 江淹駢賦的悲情及影響」(『湖北經濟学院学報』二〇〇八 九)
- 張喜貴「貶謫吳興之旅对江淹詩文創作的影響」(『福建論壇』二〇一一 一二)
- 独孤嫋霓「六朝文人の政治と文学 魏、齊、梁文壇人物の政治的焦燥感を中心に」(横浜国立大学博士論文 二〇一四)
- 梁明「求仙帰隱、心靈寄託 論江淹の道教思想」(『蘭州教育学院学報』二〇一二 七)
- 郭建勛・馮俊「江淹辞賦通論」(『中国文化研究』二〇一四冬之卷)
- 今場正美「江淹の效阮公詩制作と左遷後の心境について」(『学林』六五号 二〇一七)
- 熊征「江淹の隱逸思想について 陶淵明との関わり」(『中国哲学』四五・四六号 二〇一八)
- 富田繪美「江淹丹沙可学賦考」(『六朝學術学会報』二三号 二〇二二)
- 唐碧月「江淹事迹及創作考論」(『蘭州職業技術学院学報』二〇二二 一)

* 江淹研究は、日本ではそれほどさかんではないが、中国では枚挙にいとまがないほど、おおくの論文がかかっている。

「江郎才尽」の話だけの研究史がかかっているのには、おそれいってしまった。あらためて、かの地の研究者の層の厚さを実感させられたいである。このように中国の江淹論文はおおすぎるので、個々の作品論ふうのものは割愛して、総論的なもののみとし、さらに本稿執筆のさいに直接に参照させていただいたものだけにとどめた。